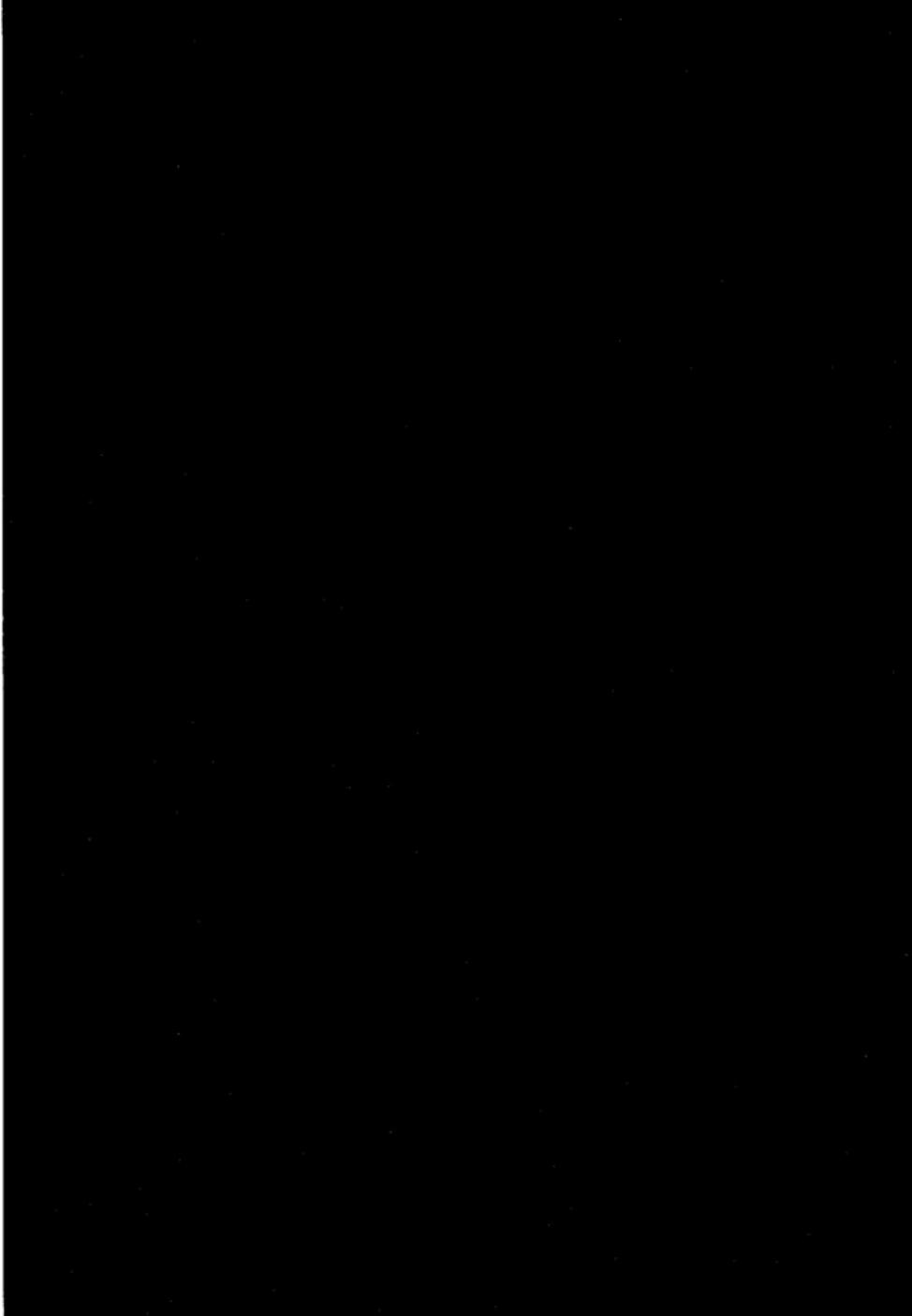
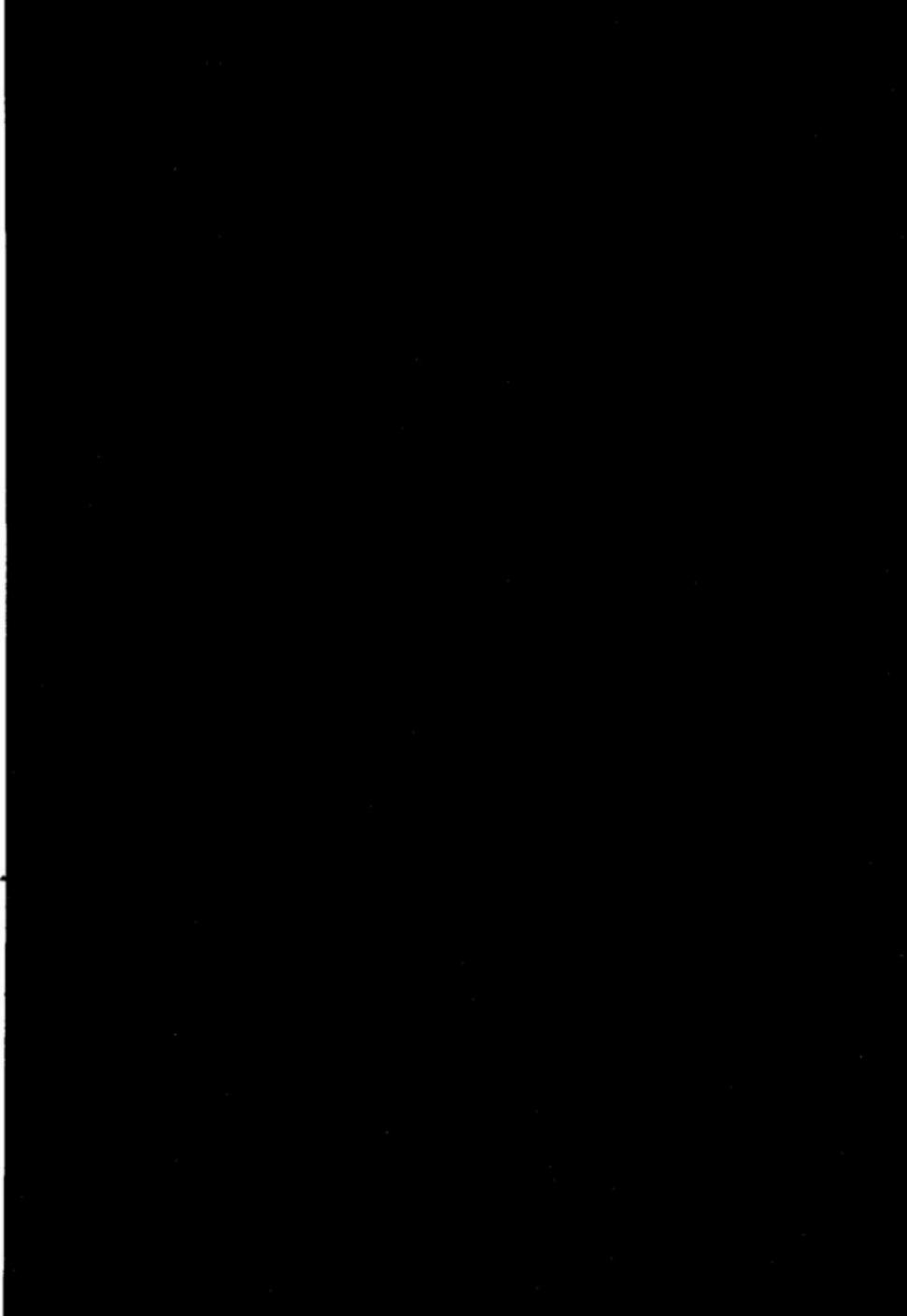


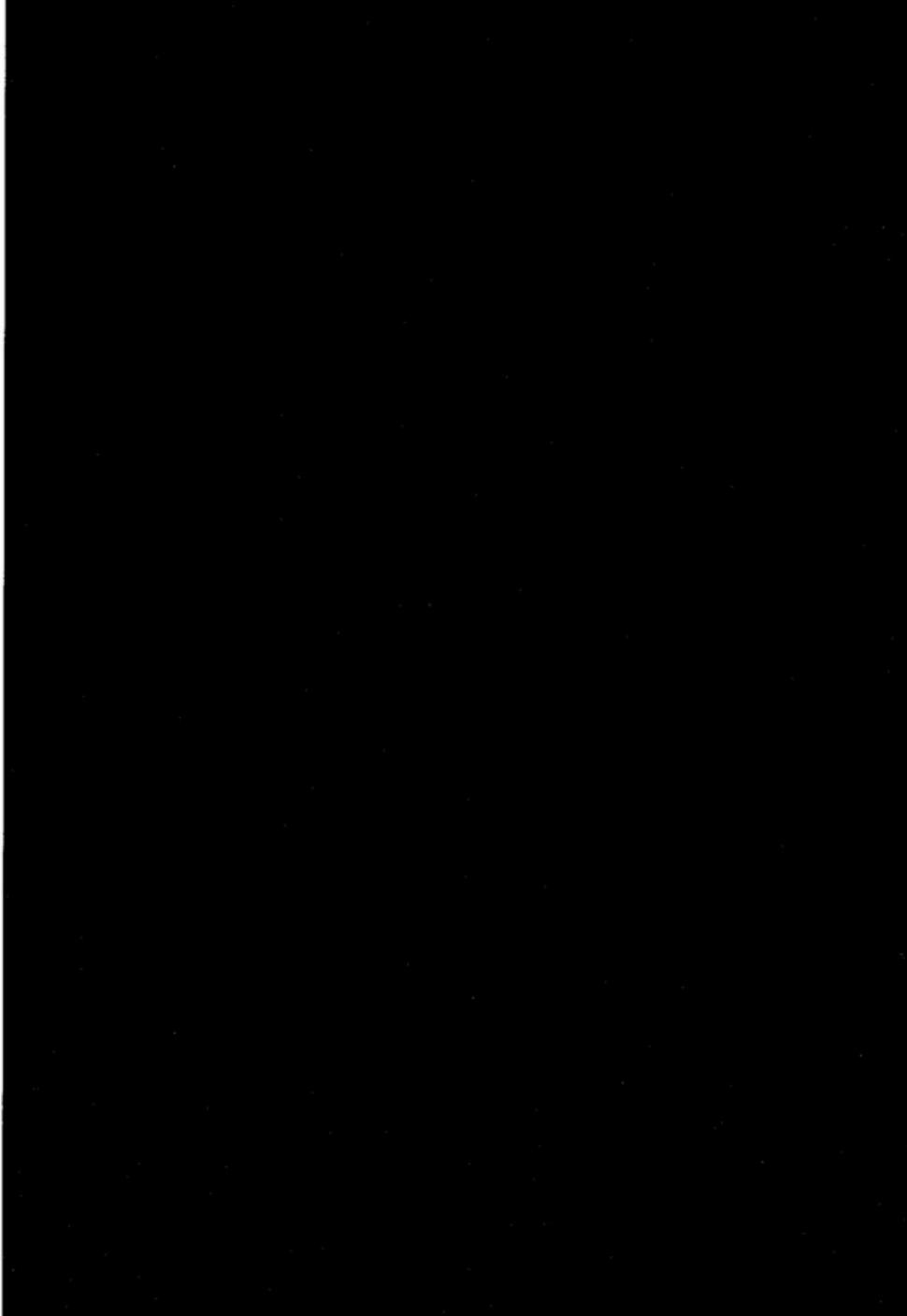
渡馬門政

1982

別府大学付属博物館





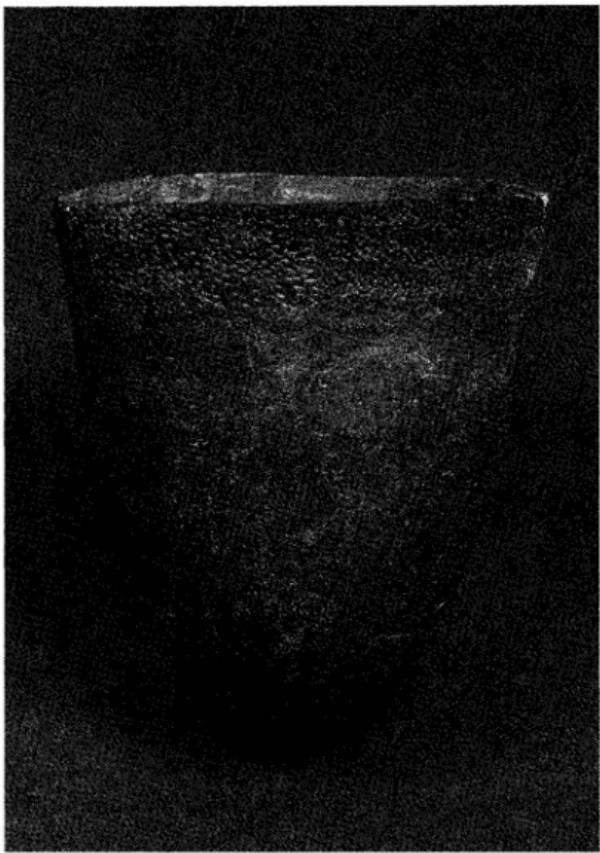


政 所 馬 渡

1982

別府大学付属博物館

題字 賀川 光夫



政所式土器

はじめに

1960年、大分県荻町大字政所で、農道工事の土砂運搬車後部に、尖底土器らしいものが土にまじって顔を出しているのをみつけた。その土器は、口縁部の一部を除いてはほぼ完形品であって、砲弾形をなしていた。器面をよくみがき、厚手に焼成された土器で、口縁部に貝殻腹縁文（貝殻腹縁部を継に押し付けた文様）を施しためずらしいものであった。農道工事は遺跡の一部を破壊していたとみえ、土器片がわずかに散乱していたが、それらは、押型文の粗大な文様を施したもので、その特徴から考えて、縄文早期末葉（田村式・ヤトコロ式）の時期にあてられるものと推定された。なお、最初に発見した土器は、押型文ではなく、口縁部に貝殻腹縁文を施す土器であったために、＜政所式＞という名称を付して標式とすることにした。しかし、その後、類似の土器の出土がみられず、時期設定にも問題があった。

1976年、政所地区の土地改良事業が実施されることになったのを機会に、＜政所式土器＞の解明をおこなうことになった。その結果、こ

の遺跡で発掘された土器群は、いわゆる＜ヤトコロ式＞といわれる押型文平底が主体であつて、さきの貝殻腹縁文の類は、その出土をみなかつた。しかし、口縁部の施文は撚糸文であるが、胎土・厚手尖底の器形・押しつけ施文の技法などが共通するもの数点が検出され、ヤトコロ式土器群にまじって、＜政所式土器＞というべき一群が存在することがわかつた。撚糸文や縄文を施す土器は、西日本ではかならずしも主流でなかつた。押型文土器に共伴してわずかに撚糸文や縄文がみられるのが通常であるが、政所馬渡遺跡では、撚糸文や縄文を施した土器片が大量に出土した。最近、ヤトコロ式土器に後続すると考えられている円筒土器群に撚糸文や縄文がみられることとあいまつて、注目されるところである。

このように、政所馬渡遺跡は、縄文早期末の土器の諸相をみるうえで、興味ある遺跡となつた。そして、この調査でも明確にできなかつた＜政所式＞について、今後も追求する必要を痛感したのである。

1981年7月8日

賀川光夫

例　　言

- 1 本書は、1976年4月26日から5月5日までの10日間、大分県直入郡荻町政所遺跡においておこなわれた発掘調査の報告書である。
- 2 この調査については、荻町教育委員会の依頼により、別府大学文学部賀川光夫が担当した。
- 3 この調査には国庫補助（総合土地改良事業）をうけたこともあり、荻町教育委員会より、1977年3月に、概報として「荻台地の遺跡II」に含めて刊行している。
- 4 遺物の整理は、別府大学考古学研究室においておこなわれた。
- 5 各章の執筆者は、次のとおりである。

第1章 遺跡の調査	1 清水宗昭
	2～5 下村悟史
第2章 遺構	井ノ上秀文
第3章 遺物	1 a 若月省吾
	1 b 井ノ上秀文
	2 下村悟史
第4章 研究と考察	賀川光夫・下村悟史
第5章 押型文土器の編年	賀川光夫
第6章 九州と中国・四国の早期土器	賀川光夫

- 6 この報告書の編集には、賀川光夫・下村悟史・白井昭一・妹尾周三の4名があつた。実測図・写真等はそれぞれの執筆分担者が作成し、最後の九州と中国・四国の対比図は、妹尾が整理および作図した。
- 7 この報告書は、別府大学付属博物館<大野川流域における先史時代の調査研究>の一環として刊行するものである。

目 次

はじめに
例 言

第1章 遺跡の調査	1
1 調査にいたるまでの経過	1
2 遺跡の位置および立地環境	2
3 調査区の設定	5
4 土層	5
5 遺物の出土状況	7
第2章 遺構	13
1 第1集石遺構	13
2 第2集石遺構	14
3 第3集石遺構	15
第3章 遺物	16
1 繩文文化関係	16
a 土器	16
(1) 第I群 - 押型文土器群 -	16
(2) 第II群 - 摩拭文土器群 -	25
(3) 第III群 - 無文土器群 -	29
(4) 第IV群 - その他の土器群 -	29
b 石器	33
(1) 石鏃	33
(2) 尖頭形石器 I	34
(3) 尖頭形石器 II	36
(4) 石斧	36
(5) 石核	36
(6) 彫刻刀様石器	36
(7) 削器	39

(8) 2次加工剝片	39
(9) 使用痕剝片	39
(10) 穰器	43
(11) 磨石・敲石	43
2 細石器文化関係	43
a 土器	43
b 石器類	45
(1) 細石核	45
(2) 細石刃	45
(3) 搗器	45
(4) 剥片	46
(5) 石核再生剥片	46
(6) 細石核素材	47
(7) 接合資料	47
 第4章 研究と考察	48
〔縄文文化関係〕	48
1 政所馬渡遺跡出土の土器群について	48
2 主要土器の細部拡大と粘土型について	50
3 押型文土器共伴の燃糸文土器と縄文土器について	52
4 政所式土器の設定	54
5 政所馬渡遺跡出土の石器と石材について	55
〔細石器文化関係〕	58
6 政所馬渡遺跡における細石器文化について	58
 第5章 押型文土器の編年 - 縄文早期から前期への系譜 -	64
1 押型文土器の研究と<早水台式土器>	64
2 田村式土器の確認	65
3 ヤトコロ式土器	66
4 九州における縄文早期の編年	68
5 円筒土器と政所馬渡遺跡出土の土器	70
 第6章 九州と中国・四国の縄文早期土器	71

[挿 図]

第 1 図	荻町内縄文時代遺跡分布図および政所馬渡遺跡の位置	3
第 2 図	政所馬渡遺跡周辺の地形	4
第 3 図	調査区配置図	6
第 4 図	J - 1 区西側土層断面図	9
第 5 図	G - 5・G - 6 区北側土層断面図	9
第 6 図	G - 5 区第IV層・第V層出土遺物分布図	10
第 7 図	G - 6 区第VII層出土遺物分布図	11
第 8 図	G - 5 区出土遺物垂直分布図	12
第 9 図	第 1 集石遺構平面図	13
第 10 図	第 2 集石遺構平面図および断面図	14
第 11 図	第 3 集石遺構平面図および断面図	15
第 12 図	第 I 群 a 類土器実測図	17
第 13 図	第 I 群 b 類・第III群 a 類土器実測図	18
第 14 図	第 I 群 c 類土器実測図 (1)	21
第 15 図	第 I 群 c 類土器実測図 (2)	22
第 16 図	第 I 群 c 類土器実測図 (3)	23
第 17 図	第 I 群 c 類土器実測図 (4)	24
第 18 図	第II群 a 類・b 類土器実測図 (1)	26
第 19 図	第II群 a 類・b 類土器実測図 (2)	27
第 20 図	第III群 a 類・第IV群 a 類土器実測図	30
第 21 図	第IV群 b 類・c 類・d 類土器実測図	31
第 22 図	石巒・尖頭形石器 I 実測図	35
第 23 図	尖頭形石器 II・石斧・石核・彫刻刀様石器実測図	37
第 24 図	削器・2次加工剥片実測図	38
第 25 図	使用痕剥片・2次加工剥片実測図	40
第 26 図	使用痕剥片・砾器実測図	41
第 27 図	砾器実測図	42
第 28 図	敲石・磨石実測図	44
第 29 図	細石核・細石核素材・搔器・剥片・石核再生剥片・細石刃実測図	46
第 30 図	接合資料実測図	47
第 31 図	九州・中国・四国地方における縄文時代早期土器編年表	75

〔表〕

第1表	政所馬渡遺跡出土石器一覧表	33
第2表	政所馬渡遺跡出土土器文様別頻度表	62
第3表	政所馬渡遺跡出土剝片・碎片石材別頻度表	63

〔図版〕

原色図版

図版 1	政所馬渡遺跡遠景	77
図版 2	政所馬渡遺跡近景	77
図版 3	G - 6 区北側土層断面	78
図版 4	J - 1 区西側土層断面	78
図版 5	E - 4 + E - 5 区第1集石遺構	79
図版 6	G - 4 区第2集石遺構	79
図版 7	G - 5 区第3集石遺構	80
図版 8	G - 5 区土器出土状況	80
図版 9	G - 6 区細石核および細石核素材出土状況	81
図版 10	G - 6 区細石刃核共伴土器および細石刃出土状況	81
図版 11	G - 5 区砾器およびG - 6 区尖頭形石器出土状況	82
図版 12	G - 6 区細石核および細石刃出土状況	82
図版 13	第I群a類土器	83
図版 14	第I群a類土器	83
図版 15	第I群b類土器	84
図版 16	第I群b類土器	84
図版 17	第I群c類土器 1	85
図版 18	第I群c類土器 1	85
図版 19	第I群c類土器 2	86
図版 20	第I群c類土器 2	86
図版 21	第I群c類土器 3	87
図版 22	第I群c類土器 3	87
図版 23	第I群c類土器 4	88
図版 24	第I群c類土器 4	88
図版 25	第II群a類およびb類土器 1	89
図版 26	第II群a類およびb類土器 2	89
図版 27	第II群a類およびb類土器 3	90

図版 28	第II群 a 類および b 類土器 3	90
図版 29	第III群 a 類および第IV群 a 類土器	91
図版 30	細石刃核共伴の土器	91
図版 31	第IV群 b 類および c 類土器	92
図版 32	第IV群 b 類および c 類土器	92
図版 33	第IV群 d 類土器	93
図版 34	第IV群 d 類土器	93
図版 35	細石核・細石核素材・搔器・剥片・石核再生剥片および細石刃	94
図版 36	石礫および尖頭形石器	94
図版 37	尖頭形石器・石斧・石核および彫刻刀様石器	95
図版 38	削器および2次加工剥片	95
図版 39	使用痕剥片および2次加工剥片	96
図版 40	敲石および磨石	96
図版 41	使用痕剥片および蹠器	97
図版 42	使用痕剥片および蹠器	97
図版 43	蹠器	98
図版 44	蹠器	98
図版 45	土器片とその粘土型 - 押型文 -	99
図版 46	土器片とその粘土型 - 繩文・燃糸文 -	100
図版 47	土器片とその粘土型 - 燃糸文・網目状燃糸文 -	101
図版 48	土器片とその粘土型 - 繩文・条痕文 -	102

第1章 遺跡の調査

1 調査にいたるまでの経過

1960年、荻町大字政所字馬渡で農道拡幅工事がおこなわれた際、現場の土砂運搬車に混入していた尖底深鉢形土器が、当時荻地方の踏査に出掛けている賀川によって、偶然採集された。それは、口縁部にアナグラ属（ハイガイまたはサルボウ）の貝殻腹縁文を縱に施文したもので、当地方においては、まったく未発見のものであった（1960 賀川）。とくに貝殻腹縁文土器は、南九州のカイガラ文系土器との関連が注目された。さらに、この尖底深鉢形土器と一緒に、やや外反した口縁部をもち、粗大な山形文を縱走させて平底に至る押型文土器も発見されていることなどから、付近一帯は、これらの土器を包蔵する重要な遺跡であると考えられた。

ところが、大野川上流域（竹田市・荻町）は、県下有数の農業地域として、昭和51年度（1976）より総合土地改良事業が進められているところである。荻町教育委員会は、これに先立って、荻台地に分布する遺跡の中で、昭和50年度（1975）改良予定地に含まれる遺跡17か所のうち、7か所を選んで、国庫補助を得て予備調査を実施した。この結果、縄文時代早期および前期の包含層各1か所、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡3か所（1か所は集落跡）、中世館跡1か所を確認することができ、一応の成果を得た。

政所馬渡遺跡は、さきの貝殻腹縁文を施した尖底深鉢形土器と押型文土器とが出土しており、良好な包含層の遺存が期待された。この遺跡も、土地改良事業の予定地に含まれ、初年度の昭和51年度（1976）事業に組み込まれることになった。このため荻町教育委員会は、昭和51年度国庫補助事業の予備調査10か所の中にこの遺跡をあげ、実施の運びとなった。しかし、遺跡は水田地であり、地主本田主税氏の都合により早急に地さげ工事の必要が生じ、すでに一部造成にかかっていた。このため、荻町教育委員会は、地主と遺跡の取り扱いについて協議をおこない、その結果、賀川に調査依頼があり、発掘を実施した。

調査期間および関係者は、次のとおりである。

調査期間 1976年4月26日～同5月5日

調査主体者 荻町教育委員会

調査および整理担当者 賀川光夫（別府大学文学部教授・別府大学付属博物館長）

1960 賀川光夫「早期縄文土器の新資料—大分県直入郡荻町政所出土—」『考古学雑誌46-3』日本考古学会

調査員	橋 昌信（別府大学文学部助教授・別府大学付属博物館学芸員）
〃	清水 宗昭（大分県教育庁文化課主事）
〃	坂本 嘉弘（大分県教育庁文化課主事）
調査補助員	井ノ上 秀文（別府大学文学部学生）
〃	下村 悟史（　　〃　　）
〃	若月 省吾（　　〃　　）
調査事務	榎 信久（荻町教育委員会）

なお、調査期間中、山村高啓（荻町役場収入係）、弥栄久志（鹿児島県教育庁文化課）、大塚主（竹田市文化財調査員）、鳥養孝好（竹田高校教諭）、富来雅勝・山口和則（大分放送）、三村修次・栗田勝弘（別府大学文学部学生）など各氏のご協力を得た。

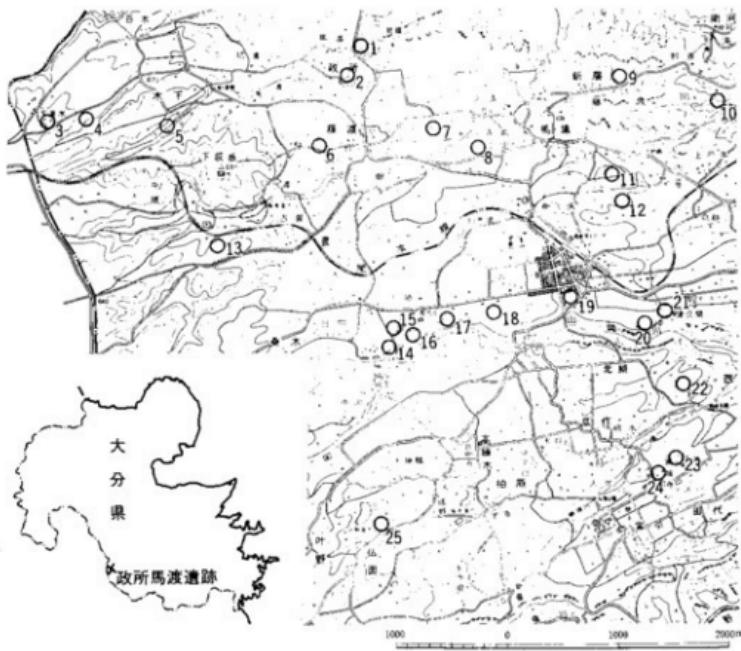
2 遺跡の位置および立地環境

政所馬渡遺跡は、大分県直入郡荻町大字政所字馬渡に所在する。

九州中央部に位置している阿蘇山は、地質時代より活発な活動を繰り返し、今日でも白煙を噴きあげる代表的な活火山である。いまから3万3千年前の中期更新世の時期には、とくに活動が激しく、多量の熔岩を噴出している。この熔岩は、新期阿蘇熔結凝灰岩と呼ばれ、阿蘇山を中心に九州中央部一帯に広く分布している。阿蘇外輪山東麓の大分県でも、この阿蘇熔結凝灰岩が厚く堆積し、その一部は、臼杵・大分市周辺までひろがっていることが確認されている。

このような熔結凝灰岩は、厚い基盤をなして顯著な熔岩台地を形成している。切り通しなどの土槽を観察すると、熔結凝灰岩の上に、数メートルから10数メートルのローム層が堆積し、さらにその上部には、沖積期の黒色火山灰層が堆積している。この現象は、同様な熔結凝灰岩台地一帯にみとめられ、阿蘇山の火山活動による強い影響を物語っている。阿蘇外輪山東麓の各所に源を発する諸河川は、この熔結凝灰岩台地を深く浸食し、九州第2の大河大野川となって別府湾に注ぐ。これら諸河川の浸食作用は、東方にのびた舌状台地や独立丘陵を形成し、舌状台地間には、きわめてけわしい峡谷の発達を促している。台地上は、一般に平坦であるが、湧水点を生じている所は、付近が開析され、深い谷や小さな丘なども形成されて、地形を複雑にしている。

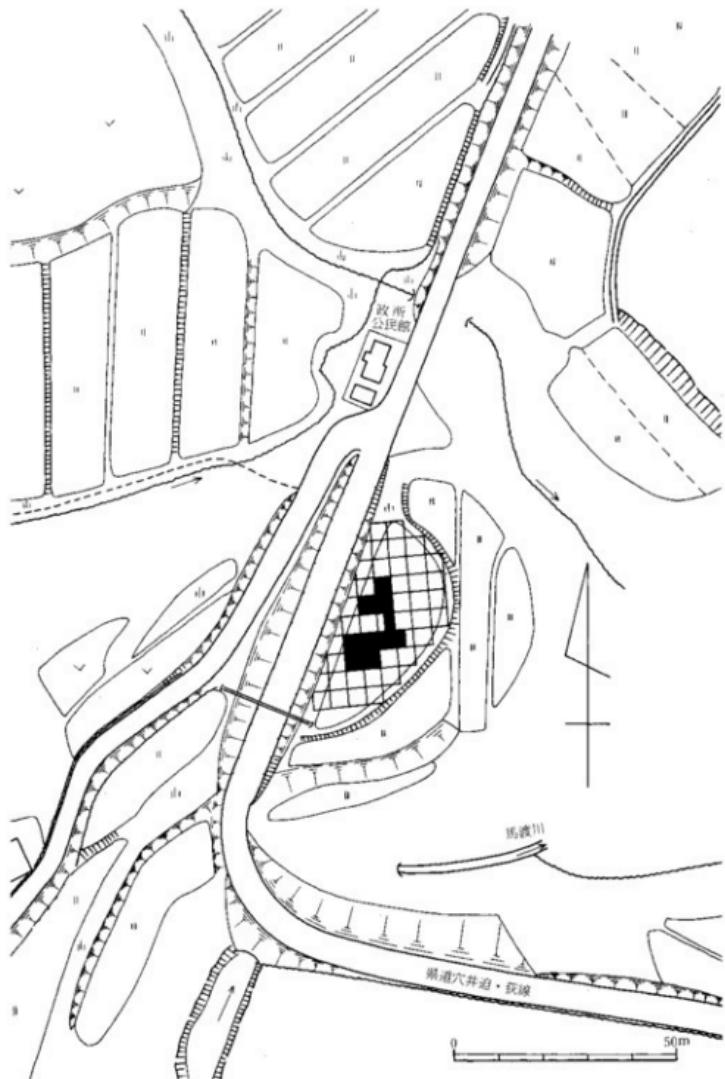
ところで、政所馬渡遺跡は、北を滝水川、南を馬渡川によって形成された舌状台地中央部の南端に位置し、標高は520mである。北側は、湧水によって開析された小谷が開け、遺跡とは、小川によって界されている。南側は、馬渡川に、東側は、そのまま急傾斜の崖となっている。北側が開析されているため、遺跡は小舌状台地の東端に位置していることになる。西側は、県道によって南北に仕切られており、この県道で仕切られた約800m²の平坦地がその中心となる。



- | | | |
|----------------|-----------------|-------------|
| ① 政所馬渡遺跡(早・前期) | ⑩ 野鹿洞穴(早・前・後期) | ⑯ 桜山遺跡(晚期) |
| ② 政所西遺跡(晚期) | ⑪ 谷尻原遺跡(早・後・晚期) | ⑰ 横迫遺跡(晚期) |
| ③ 下滝水遺跡(後・晚期) | ⑫ 八重牧遺跡(晚期) | ㉑ 横迫遺跡(晚期) |
| ④ 山ノ上遺跡(前期) | ⑬ 古賀遺跡(中期) | ㉒ 天神原遺跡(晚期) |
| ⑤ 木下遺跡(後期) | ⑭ 上岩戸遺跡(前期) | ㉓ 古屋國遺跡(晚期) |
| ⑥ 篠井追遺跡(早期) | ⑮ 桑木下原遺跡(晚期) | ㉔ 東福寺遺跡(後期) |
| ⑦ 立石遺跡(前期) | ⑯ 上右京遺跡(前・晚期) | ㉕ 仏面遺跡(後期) |
| ⑧ 寺ノ前遺跡(早期・晚期) | ⑰ 右京西遺跡(晚期) | (山村高吉氏作成) |
| ⑨ 下ノ原遺跡(早期・後期) | ⑱ 右京東遺跡(晚期) | |

第1図 萩町内縄文時代遺跡分布図および政所馬渡遺跡の位置

もともと萩町は、滝水川・藤渡川・岩戸川および大野川上流によって浸食をうけた大きな3つの台地にわかれており、それぞれの台地は、さらに小河川によって分断されている。その分断された先端部や台地周縁部には、縄文時代の各時期を通じて集落が営まれ、政所



第2図 政所馬渡遺跡周辺の地形

馬渡遺跡もこれらの遺跡群の1つとしてとらえることができる。ただその面積が充分はないため、集落の規模としては、さほど大きなものは當まれていない。おそらく、単一集団の季節的あるいは時間的に限定された集落のあり方が想定できよう。したがって、今後、他の同時期の遺跡群とのかかわりあいの中で、立地のあり方や遺跡のひろがりなどについての検討が必要となろう。

3 調査区の設定

すでにおこなわれていた造成工事によって、1mあまりの水田基盤が除去されていたので、まず削平面の状況を観察するため、浮き土を排除する作業からおこない、その後、遺構・遺物の検索に努めた。その結果、台地中央部から東側にかけて、多数の疊にまじって押型文土器や石器類を出土する黒色粘質土層を確認することができた。台地全体は、やや東側に傾斜しており、堆積土層も、それにしたがって東側に傾斜している。そのため、台地の西側では黒色粘質土層の堆積は薄くなっている。また、西端の県道に面する部分は、削平によって、黄褐色粘質土層が露出していた。

黒色粘質土層は、ヤトコロ遺跡(竹田市)・田村遺跡(朝地町)・菅無田遺跡(野津町)・新生遺跡(野津町)・早水台遺跡(日出町)などで、多くの押型文土器を包蔵する主要な土層と考えられている。このため、その黒色粘質土層のより濃密に分布している部分を中心に、調査区を設定することにした。また、黒色粘質土層と黄褐色粘質土層との境目付近から黒曜石製の細石核を採集した。このことにより、黄褐色粘質土層面の露出している部分も、調査区の対象に含めた。結局、800m²全面に、主軸を南北にとった4×4mを1グリッドとする調査区を設定した。北からA, B, C～J, 西から1, 2, 3～8と記号を付し、調査区名は、E-4, G-6というように呼ぶ。地形の関係から、欠番の調査区がいくつか存在する。今回の調査で、遺構や遺物を検出した調査区は、E-4・5, F-5, G-3～6, H-3・4である。

4 土層

1m余りの地さげ工事のため、一貫した土層は観察できなかつたが、遺跡西端に、原地形が残されていたので、全体的な土層は、ここを参考に、以下のように17層に区分した。

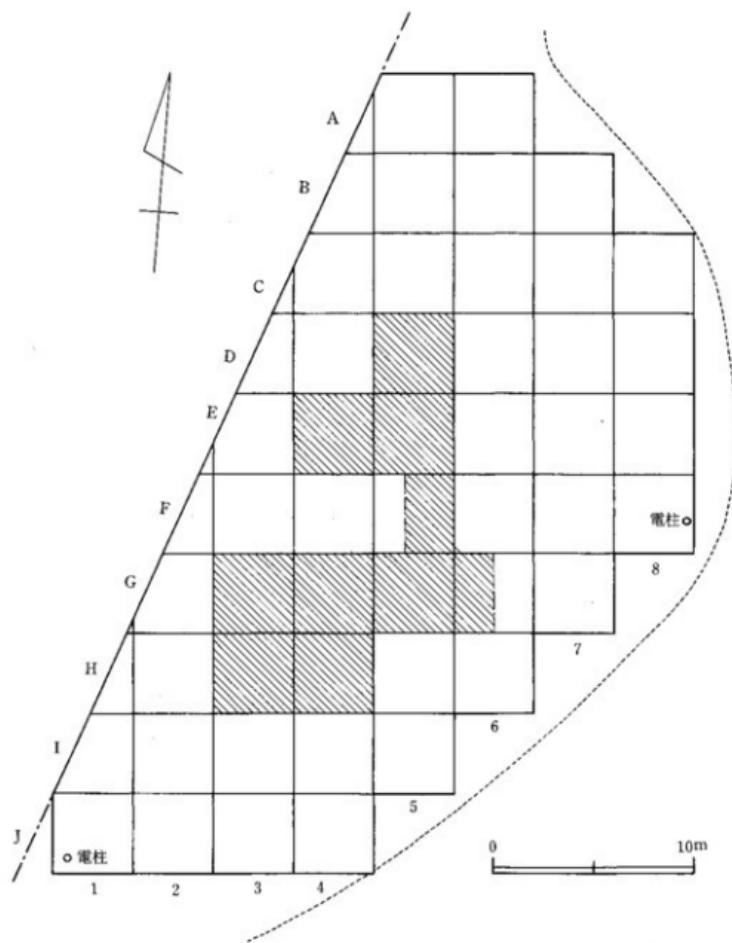
第I層 耕作土層、約30cm、砂質。鉄さび色のかたい水田基盤を含み、現在、水田耕作がおこなわれている層である。

第I'層 黒褐色土層 約20cm。粘質に乏しい土壤である。

第II層 黄褐色土層 約30cm。下部にだいだい色のバミスのかたまりを含む。バミスはガラス質の砂で、未固結である。層全体は、このバミスの影響によって粘性が乏しい。(アカホヤ類似層)

第III層 黑褐色弱粘質土層 約15～30cm。第V層黒色粘質土層への漸移層で、色調

が幾分明るいことから区別した。土質はきめが細かく、下部にむかうほど、粘質を増す。



第3図 調査区配置図

- 第IV層 暗褐色粘質土層 約20~35cm。黒色粘質土層への漸移層と考えられ、その性質は、黒色粘質土層とほとんど変わらない。
- 第V層 黒色粘質土層 約50~60cm。もっとも厚い堆積をしめし、漆黒色のきめが細かい粘質土層である。固結の具合はさほどではなく、スコップで削ると光沢がある。
- 第VI層 灰黒色弱粘質土層 約15~30cm。幾分灰色味を帯び小白斑を含む。粘質は第V層よりも弱く、かたく締まりがある。
- 第VII層 暗黒褐色粘質土層 約10~15cm。わりとやわらかく、きめが細かい。
- 第VIII層 黑褐色粘質土層 約10~15cm。黄褐色粘質土層が腐食を受けたような觀を呈す。土質はわりとやわらかい粘質である。
- 第IX層 黄褐色粘質土層 約20~40cm。大粒のスコリアを含む黄褐色のローム層である。土層はかたく締まっている。
- 第X層 暗黄灰色弱粘質土層 約5~10cm。粗粒のスコリアを含む。
- 第XI層 暗黄褐色弱粘質土層 約10~30cm。スコリアを含む。固結。
- 第XII層 火山灰層 約5~10cm。スコリアおよび気泡の多い火山砂を含有する。色調は黒灰色である。
- 第XIII層 明黄褐色弱粘質土層 約5~10cm。
- 第XIV 山灰層 約5cm。
- 第XV層 黑灰色砂質土層 約30cm。
- 第XVI層 火山灰層 約5cm。
- 第XVII層 暗黄褐色弱粘質土層 30cm以上。

5 遺物の出土状況

調査区設定の際、地形の傾斜の関係から、遺跡中央部一帯より東端部にかけての場所以外では、黄褐色粘質土層が露出している部分があった。もともと政所馬渡遺跡の調査は、以前発見された政所式土器の実体究明と、押型文土器文化自体の追求、さらに、共伴する燃糸文土器群との関係などを明らかにすることがその主眼であった。ところが、工事中、第IX層付近で、細石核を発見したため、まずこの細石核の出土層位を検討する課題が生じた。第IX層中に文化層の有無を確かめてみたところ、第IX層を含めそれ以下は、まったく遺物を包含しない無遺物層であることが判明した。そこで、第IX層のすでに露出している調査区域は、発掘の対象から除外することにした。ここで、あらためて細石核がどの層に包含されるのか興味がもたらされた。

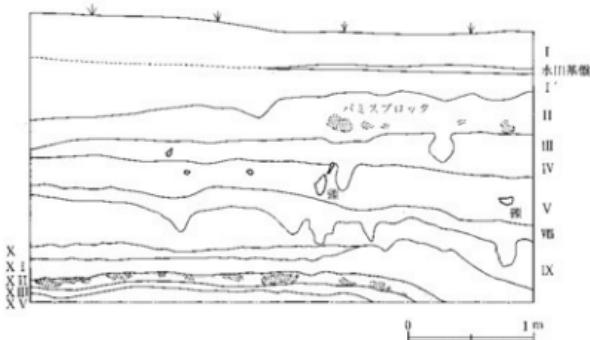
工事の際出土した遺物は、すべて一括採集遺物として取り扱った。その中には、細石核をはじめ、押型文土器や燃糸文土器、無文土器、それに伴う石器類などが含まれる。これらの資料から判断すると、政所馬渡遺跡には、大別して2時期の遺物が包含されていると

予測でき、黒色粘質土層が厚く堆積している遺跡中央部を中心に、発掘を進めることにした。

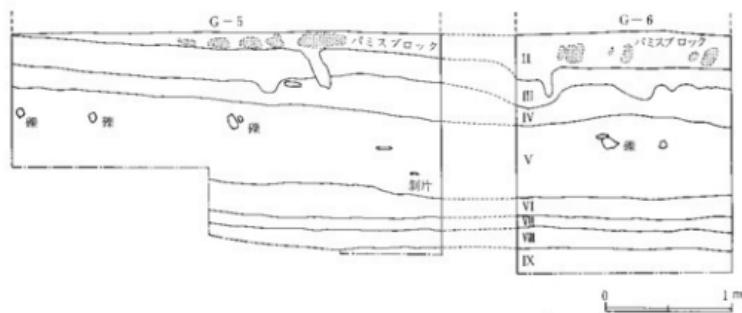
遺跡中央部には、第II層下部のだいだい色のパミスが広く分布していたので、まず、これの除去からおこなった。この層には遺物がほとんど含まれていない。第III層からは、少量の押型文土器片が出土はじめ、下部にむかうにしたがって破片もいくらか大きさを増した。第IV層からはかなりまとまった遺物の出土をみ、中心的な包含層であるとみなされた。礫も各所に分布しており、G-4区では、まとまった集石の形で検出された。押型文土器に集石が伴出する例は、今日、西日本各地の縄文時代早期の遺跡で、普遍的に知られつつあり、屋外炉との関係も注目されている。第V層は、政所馬渡遺跡でもっとも厚く堆積している層であり、第IV層同様中心的な包含層である。この層の上半までは、第IV層と同様な遺物の出土状況を呈し、集石も、E-4やG-5区などで確認された。E-4区では、平石3枚を弧状に立て、周囲に10cm台の礫が多数分散している。それらに伴って、押型文土器や撚糸文土器、石器類なども出土した。また、集石は生活面の理解に重要な意味をもつものと考えられるが、E-4区とG-6区の集石には、多少のレベル差がある。つまり、同一層内の集石に、地点を異にして集石ごとのレベル差がみうけられるということは、いくらかの時期差をしめしている可能性がある。しかし、調査では、それを裏付ける決定的な資料は得られなかった。第V層下半では、ほとんど遺物は含まれず、わずか1、2点の押型文土器片を得たに過ぎない。ただ、G-6区では、土器の出土をみなくなった第V層中部で、サヌカイト製の尖頭形石器が出土している。

続いて、旧石器文化の所在を明確にすべく、G-6区を一部掘りさげた。今後の工事予定では、さらに1m程度の地さげ工事がおこなわれるようになっているが、遺跡下半部は大部分保存されることになる。このため、旧石器文化追求のための調査は、試掘程度にとどめた。第V層の黒色粘質土層を掘りさげると、やがて、土壤は灰色がかった黒色に変化し、1点の遺物も包含しないで無遺物層となる。押型文土器を中心とする遺物群の出土をみなくなつてから50~60cmの下で、第VII層のローム2次堆積様土層に達した。この層を掘り進めて、細石刃、細石核を検出することができた。削平面から2m下、原地表から計算すれば約3m下ということになる。この細石器を含む文化層は、層厚10cm程度であり、同一層内から細石器に共伴すると考えられる2点の土器片を検出した。細石器に土器を共伴する例は、福井洞穴(長崎県)でまず注目され、その後、九州各地の調査研究が進展するにつれて、すでに10指に満とうとする。政所馬渡遺跡でも、細石器と土器が明らかに同一層内から出土し、しかもこの土器は、押型文土器包含層とは、50~60cmの無遺物層をはさんで出土しており、共伴の確かさは、かなり高いものと考えられる。

なお、細石器文化層下の第IX層およびそれ以下の各層には、遺物は、まったく包含されていない。



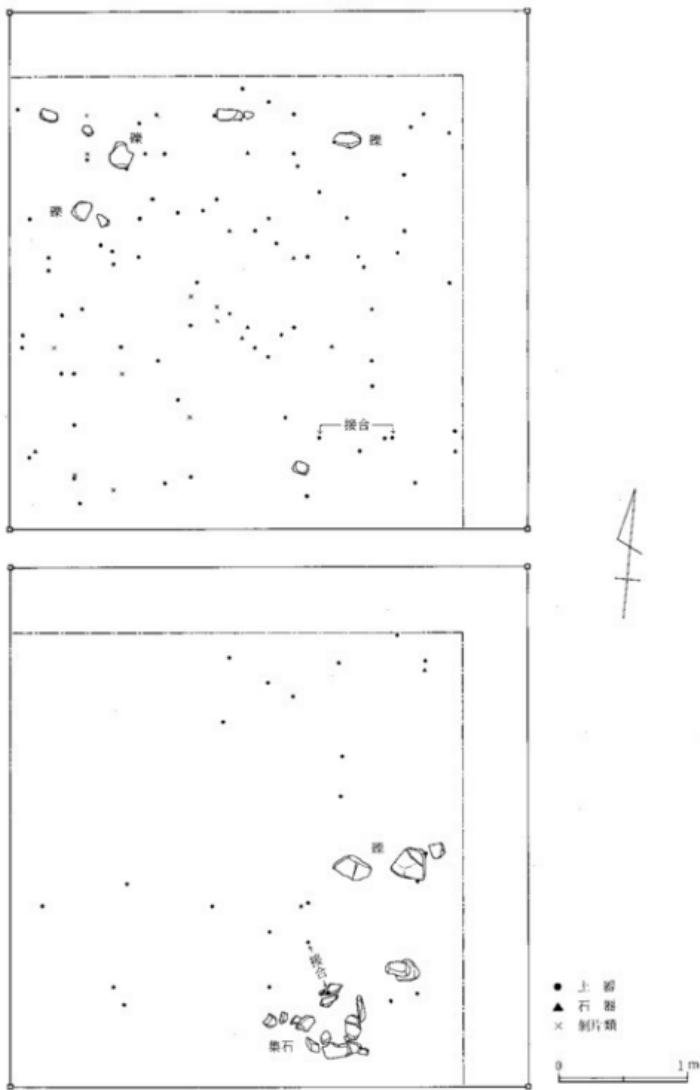
第4図 J-1区西側土層断面図



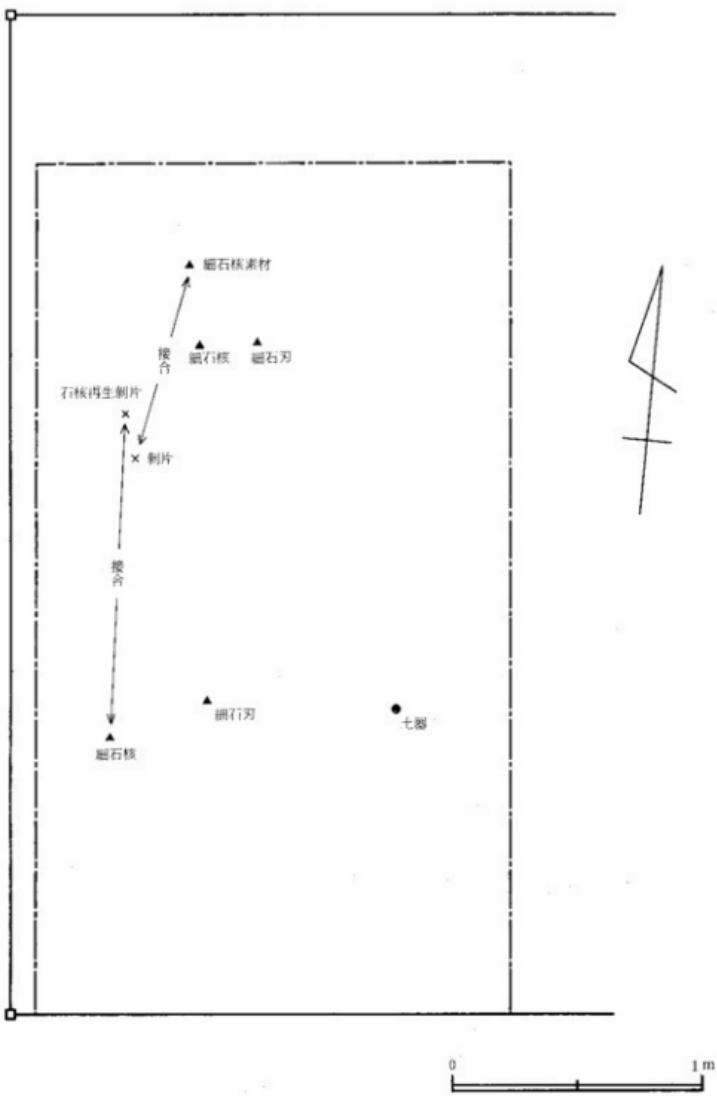
第5図 G-5・G-6区北側土層断面図

I 耕作土層	VI 灰黑色弱粘質土層	XII 火山灰層
I' 黒褐色土層	VII 暗黑褐色粘質土層	XIII 明黃褐色弱粘質土層
II 黄褐色土層	VIII 黑褐色粘質土層	XIV 火山灰層
III 黑褐色弱粘質土層	IX 黄褐色粘質土層	XV 黑灰色砂質土層
IV 暗褐色粘質土層	X 暗黃灰色弱粘質土層	
V 黑色粘質土層	XI 暗黃褐色弱粘質土層	

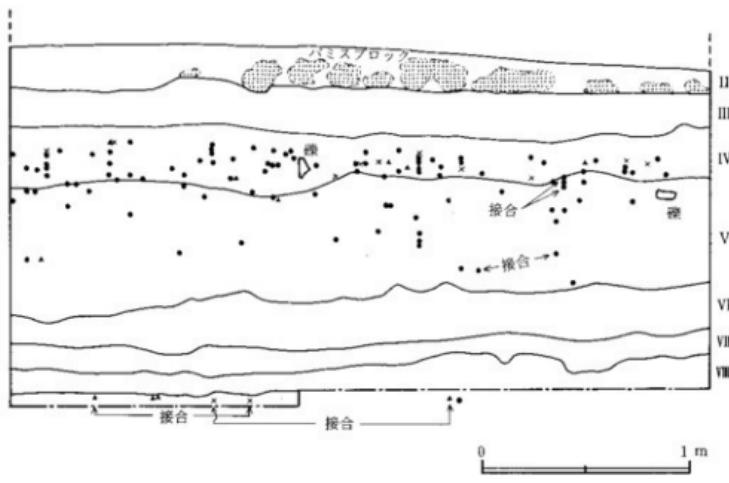
注 J-4区は西側最高部にあるため、一部土層の消滅がみられる。G-5, 6区は第I層がすでに削平されたものである。



第6図 G-5区第IV(上図)・第V層(下図)出土遺物分布図



第7図 G-6区第VIII層出土遺物分布図



第8図 G-5区出土遺物垂直分布図

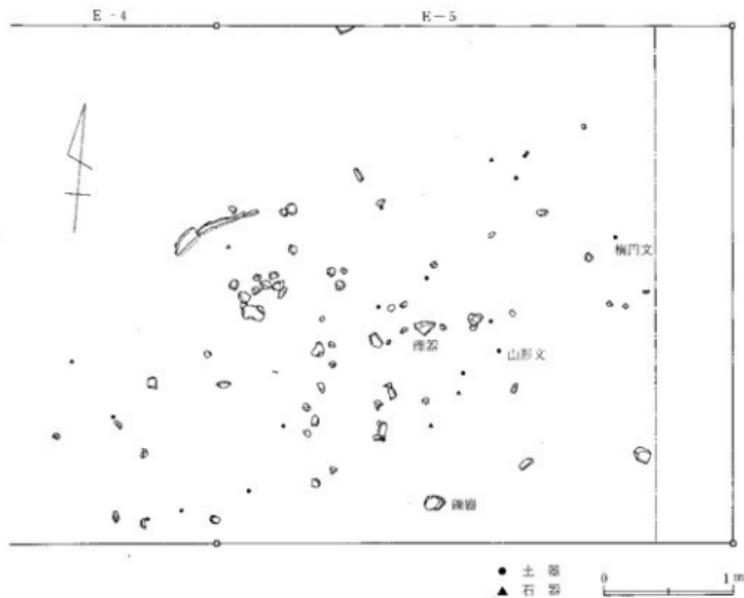
註 G-5区出土遺物の平面分布を東壁セクションに1点づつ、対照的な垂直分布として投影したものである。細石器関係遺物は、IX層に包含されているように投影をされているが、これは、土層が若干凹凸、傾斜しているためで、実際にはすべてVIII層下部に包含されていた。

第2章 遺構

西日本各地の押型文土器出土遺跡において、比較的多く検出されているものに、集石遺構がある。政所馬鹿遺跡においても、調査区のほぼ全域に縦の分布がみられ、その中でも、E-4, E-5, G-4, G-5区で確認されたそれぞれの集石遺構は、この遺跡の中心的な存在であった。

1 第1集石遺構(第9図、図版5)

この集石遺構は、E-4, E-5区第V層において検出されたもので、3枚の偏平石が、円弧状にやや外傾して立ちならび、中央部には10cm台の円礫や角礫が多少まとまって分布していた。石材は、ほとんどやわらかい安山岩であり、一部に河原石などもみうけられる。

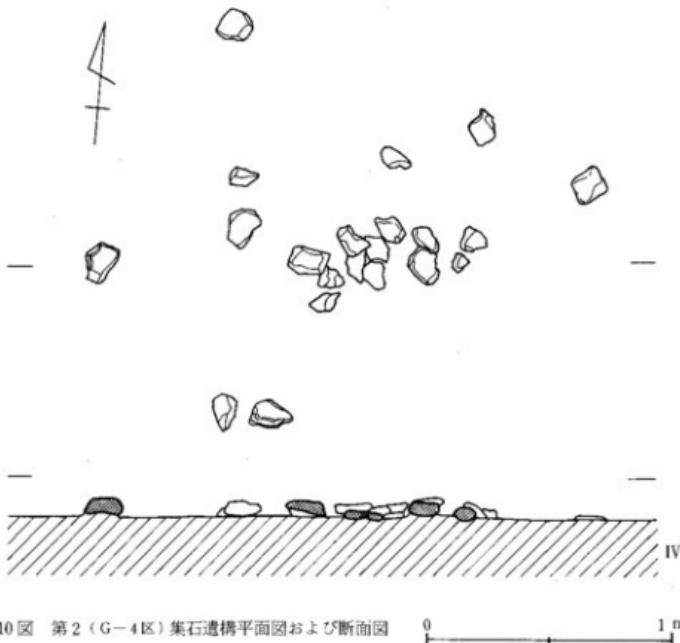


第9図 第1(E-4・E-5区)集石遺構平面図

偏平石は、3枚確認されたのみであるが、大分県速見郡山香町川原田洞穴や大分市下黒野遺跡で発見されたアサガオ状にひろがる炉址の遺構の状況を呈していたものとみられる。やわらかい安山岩は、その成因から、火を受けたようにみえる部分がある。しかし、これらの偏平石および礫群には、明らかに火を受けたと考えられる赤変や剥落があり、もろくて弱い。その周辺からは、押型文土器を中心として、無文土器や撚糸文土器ならびに珪岩質の尖頭形石器や安山岩製の礫器などが出土した。

2 第2集石遺構(第10図、図版6)

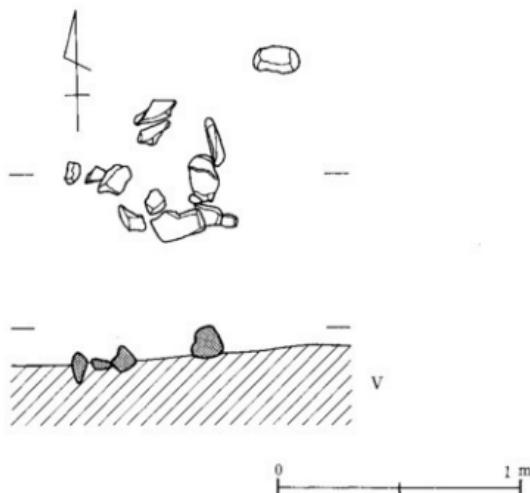
G-4区において検出された集石遺構は、第IV層面に10~15cm台のやわらかい安山岩の角礫をもちいて作られているものである。礫は赤褐色に変化している部分があり、火を受けた可能性もある。しかし、礫自体赤褐色の岩質をもっている部分があり、連続はできない。集石の分布範囲は、わりと狭く、単純な配列をしめす。地しき工事で、遺構すれすれまで削平がおこなわれており、大部分はその際破壊され、下部だけ残存したのも知れない。遺構周辺からの遺物の出土はほとんどなく、押型文土器の小破片を検出したに過ぎない。



第10図 第2(G-4区)集石遺構平面図および断面図

3 第3集石遺構(第11図、図版7)

遺物群の分布密度の高いG-5区第V層で検出されたもので、ほかの集石遺構と同様、やわらかい安山岩が使用されている。礫の大きさは、10cm台から20cm台をこえるものまであり、変化に富んでいる。円礫あるいは角礫は、半径60cm程度に丸く配列され、一部重複する部分がある。ざんねんながら、集石南端部が未掘部分にかかるため、全体のひろがりを確認することはできなかった。しかし、小規模ではあるが、検出した分のみでも1つの遺構とみなされることはなく、事実、礫の多くには火を受けた形跡が観察された。このことは、ほかの集石遺構にもみとめられ、遺跡自体の性格の一端をうかがい知ることができよう。遺跡周辺には、遺物は、わりと少なく、多くは遺構よりも10cm程度上部で、押型文土器・撲糸文土器・縄文土器などが検出できた。



第11図 第3(G-5区)集石遺構平面図および断面図

第3章 遺物

1 繩文文化関係

a 土器

繩文文化関係の遺物は、第IV層と第V層を中心として出土し、そのほかに、地さげ工事によって削平された土中から出土したものもある。中でも土器は、押型文土器が多数をしめ、撚糸文土器・繩文土器や無文土器などもかなり存在し、繩文早期土器では、変化に富むものであった。これらの土器は、文様・器形・施文技法などによって、4群10類に分類することができる。

(I) 第Ⅰ群—押型文土器群—

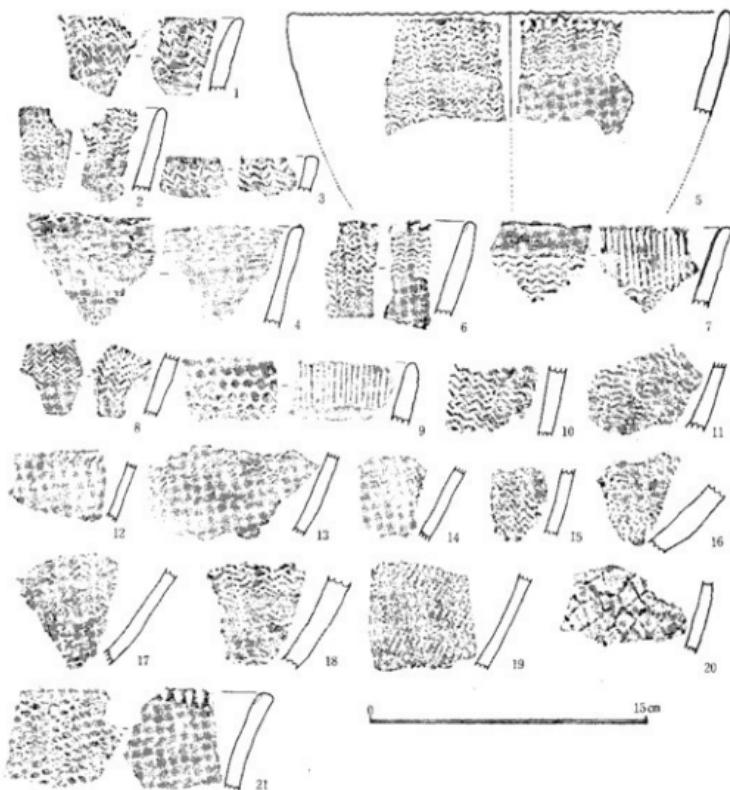
a 類(第12図、図版13, 14)

a 類に分類した押型文土器は、出土した押型文土器全体からみれば、量的にはもっとも少なく、全体的器形を知り得るものもない。しかし、概略的には、5のように、口径と器高がほぼ等しいか、わずかに器高が高く、口縁部が若干外傾し、胸部にやや張りをもちながる尖底へと続くものと考えられる。器壁は、ほかの押型文土器に比較して、平均的に薄く、胎土・焼成ともによく、かたく綺がありがある。文様の施文方向は、横方向が多く、口縁部付近では、口縁部に対して平行に施文される傾向がある。

1~4は、口縁部内面に、外面と同様な文様を、1段帯状に施文するものである。5と6は、口縁部内面に、文様を1段帯状に施文することは、1~4と同様であるが、さらに、口唇部内側に、原体による刻み目を施している。7と9は、外面上部に無文帯を残し、口縁部内面に、口唇部より垂直に原体条痕を施文するものである。とくに7は、原体条痕を施文する前に、外面と同様の山形文を、1段帯状に施文し、その上に重ねて原体条痕を施す。

8, 10~20は、胸部破片である。文様・器形・焼成などの諸特徴から、a 類に分類している。8は口縁部直下の破片で、外面が、あたかも帯状施文のごとくみうけられる。同様な例として12~14がある。12, 13は、薄く文様が残存しており、文様を施文するときにその部分だけ弱かったか、あるいは、意図的にすり消されたかのどちらかであろう。20は、格子目押型文としては、粗大で奇異な感じを受けるが、器壁は、薄手でかたく、きめが細かい。21は、口縁部内面に、原体の端を押しつけて原体条痕状に施文したもので、ほかに類例をみなかった。外面の楕円文の特徴からすれば、時期的には、すこし新しくなる可能性がある。

a 類に分類した押型文土器は、從来呼称されている早水台式を中心とするものである。

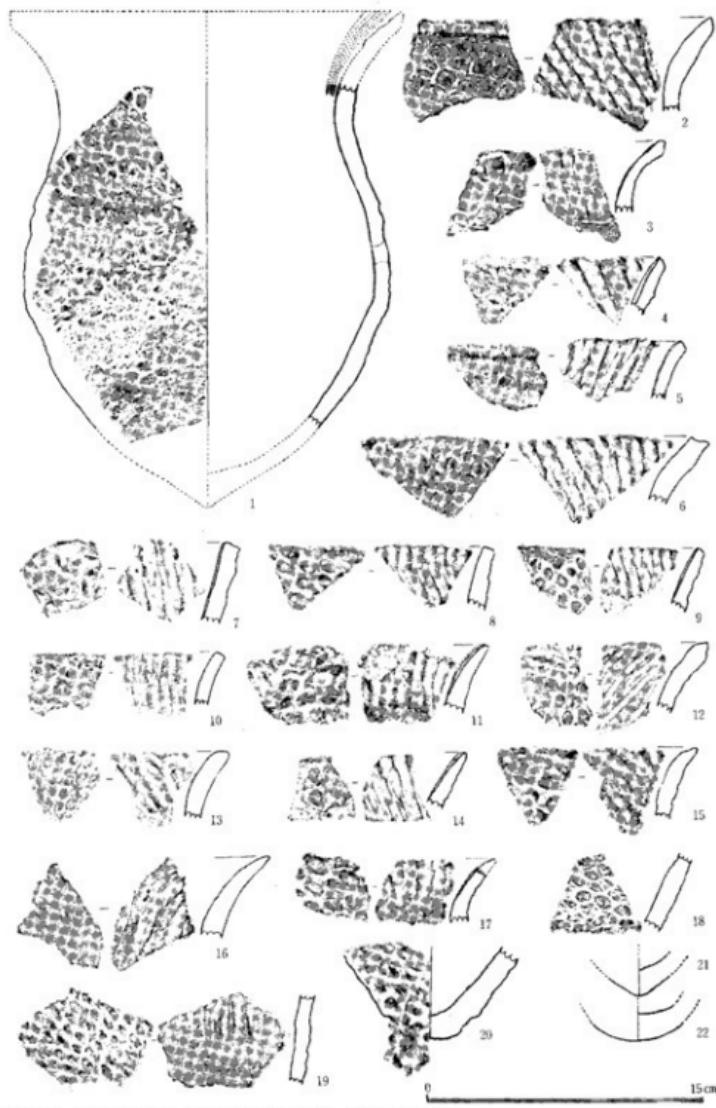


第12図 第I群a類土器実測図

中には、稻荷山遺跡出土の押型文土器に類似したものがあるほか、菅無田、新生遺跡出土の押型文土器に類似するものもある。これらは、時間的にいくらか幅をもつものと考えられる。

b類(第13図、図版15, 16)

b類として分類した押型文土器は、口縁部がいちじるしく外反し、その内面に、口唇部直下よりいわゆる原体条痕のみを長く施文することを特徴としている。胴部は、誇張され



第13図 第I群b類(1~20)・第III群a類(21~22)土器実測図

たふくらみをもち、乳房状の尖底部へ続くものと考えられる。文様は、ほとんどが横円文で、粗大化の傾向にあり、施文方向は、器形の関係から、口縁部に平行かあるいは縦方向が多くみうけられる。中には、一部斜め方向に施文したものもある。

1の土器は、比較的大破片で発見されたため、およその器形を想定することができた。口縁部と底部を欠くが、頭部が締まり、異常にふくれた胴部へと移行し、特異な感じを受ける。内面調整は、とくによく、胴部中央部には、焼成前に直径1cm強の小穴がうがたれており、特殊な使用目的のため、製作された可能性がある。

2~5と9は、口唇部外側が斜めに切れるもので、へらなどを使用して整形したかのような観を呈する。6と7は、口縁部中央が凹状になっており、原体条痕を施文する際、粘土が幾分盛りあがったものと考えられる。8, 10, 11, 13は、口唇部上端が平らに切れ、12と14~16は、口唇部端がしだいに薄くなつて切れる特徴をもつものである。

b類は、外面・内面ともに文様が平均化しているが、口唇部では、微妙な変化をもつことがみとめられよう。

20は、b類唯一の底部である。しかし、乳房状の器形を残し、若干平底氣味に整形されている。平底への移行を暗示する例かも知れない。

b類に分類した土器群は、田村式と呼ばれる一群であり、押型文の中では一時期を画する主要な土器群である。文様もほとんどが横円文に統一され、政所馬渡遺跡では、山形文は1点も検出されなかった。ただ、標式遺跡である田村遺跡では、山形文も出土しており、田村式自体には、山形文も含むものと考えられる。

c類（第14図～第17図、図版17～24）

政所馬渡遺跡において、もっとも主体をしめる押型文土器の一群である。口縁部はわずかに外反し、胴部は、若干ふくらみをもちながら、平底の底部へと移行するものを特色とする。一般に、文様は彫りが深く鮮明であるが、施文方向は一定性を欠く。口縁部内面の施文方法によって、さらにいくつかの小グループに区分することはできる。

第14図1~13は、口縁部内面に原体条痕のみをわりと長く施文し、b類に近似した様相を呈するものである。しかし、口縁部の外反度や原体条痕の施文技法、文様自体に、若干の違いがあるため、b類とは区別した。とくに1は、外面にc類に多くみられる菱形に近い横円文をもち、内面は、b類の特徴をよくしめしている。概して、外面がb類に近いものは、原体条痕の縮小化がみられ、内面の原体条痕がb類に近似しているものは、外面の文様がc類に類似するといったような特徴をみいだすことができよう。単純に、b類からc類への過渡的な土器として片付けるには、問題も多いと考えられるが、今後、類例をまつて検討しなければならないグループであろう。

14~20は、c類の基本的な形態の1つで、口縁部内面に外面と同様な文様を、1段帶状に施文し、さらに、原体条痕を上端部に施文するものである。14は、口径30cmを計り、口

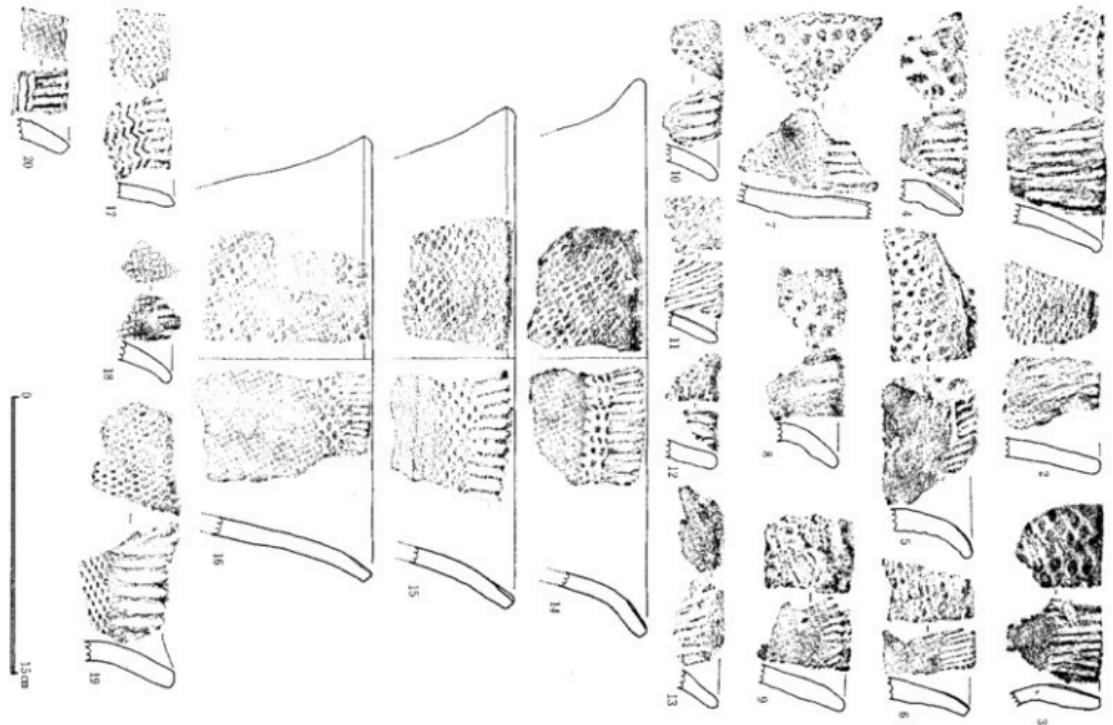
縁部がかなり外傾している。外面の文様は、右下に斜行するように施文されており、口唇部は、平縁で終わる。15は口径27cm、16は口径24cmをそれぞれ計り、2点とも口唇部を平縁に整形する。これらは、幾分胴が張り、小さな平底へ続くものと考えられる。17、18は、それぞれ山形文と格子目文を施文する例で、19は、口縁部がゆるやかな波状を呈する類例の少ないものである。20は、特異な文様で、山形文の変形化したものか、内外面ともに沈線状となっている。

第15図21~39は、口縁部内面に外面と同様な文様を1段帯状に施文し、原体条痕をまったく施文しないグループである。21は、格子目文の良好な例であり、口径28cmで口縁部が外傾し、口唇部は平縁で終わる。他の土器にくらべて、器壁がやや厚い。22は口唇部をわずかに欠損しているが、山形文を施文した資料である。推定口径は26cm程度で、外面の施文方向は、縦・横方向と一定性を欠く。23~29、32~35は、楕円文を施文したもので、施文方向も一定していない。文様は、25の穀粒状のものから29の粗大なものまであるが、比較的平均化している。30、31、36、37は、山形文を施文したもので、31は、口唇部にも山形文を施文する。36、37の山形文は、まろびしたものである。38は、格子目文で、きわめて彫りが深い。39は、外面に楕円文、内面に格子目文を施文した特異なものである。類例は非常に少ないが、他に小破片の同例が出土している。

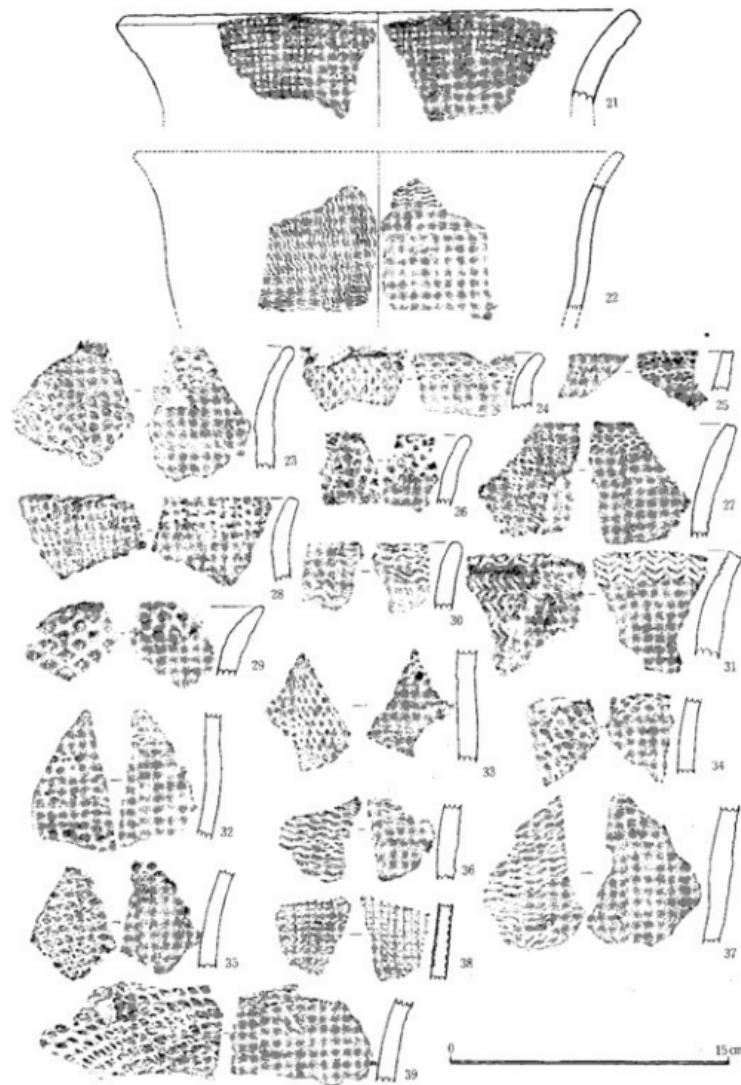
第16図40~47は、口縁部内面にまったく文様を施文せず、素文としているグループである。内面は、手なでか、みがきが施される。40は、口径22cmを計り、外面に縦方向の山形文を施文する。器形は、口縁部がやや外反氣味で、胴部は、わずかなふくらみをもって、平底へ続くものと考えられる。口唇部は、c類に多い平縁で終わる。41~47は、それぞれ山形文・楕円文の口縁部であり、46、47は、文様が他に比較して粗大である。

48~77は、胴部破片である。これらは、粗大な楕円文を中心とするもので、48~64、66、67は、とくに文様が粗大である。器形は、かなり大形になるものと予想されるが、口縁部および底部が未発見のため、実形を知ることができない。65、68~77は、やや小形ではあるが、粗大な楕円文を施文したものであり、これらも、器形的には、大形になるものと考えられる。口縁部は、内面が素文化した46、47に類例をみることができる。中には、b類に分類できるものが存在するかも知れないが、破片を観察した結果、すべて大形の器形になり、胎土、焼成ともb類とはいくらか異なる。分類上c類に含めたが、今後検討を要するグループである。

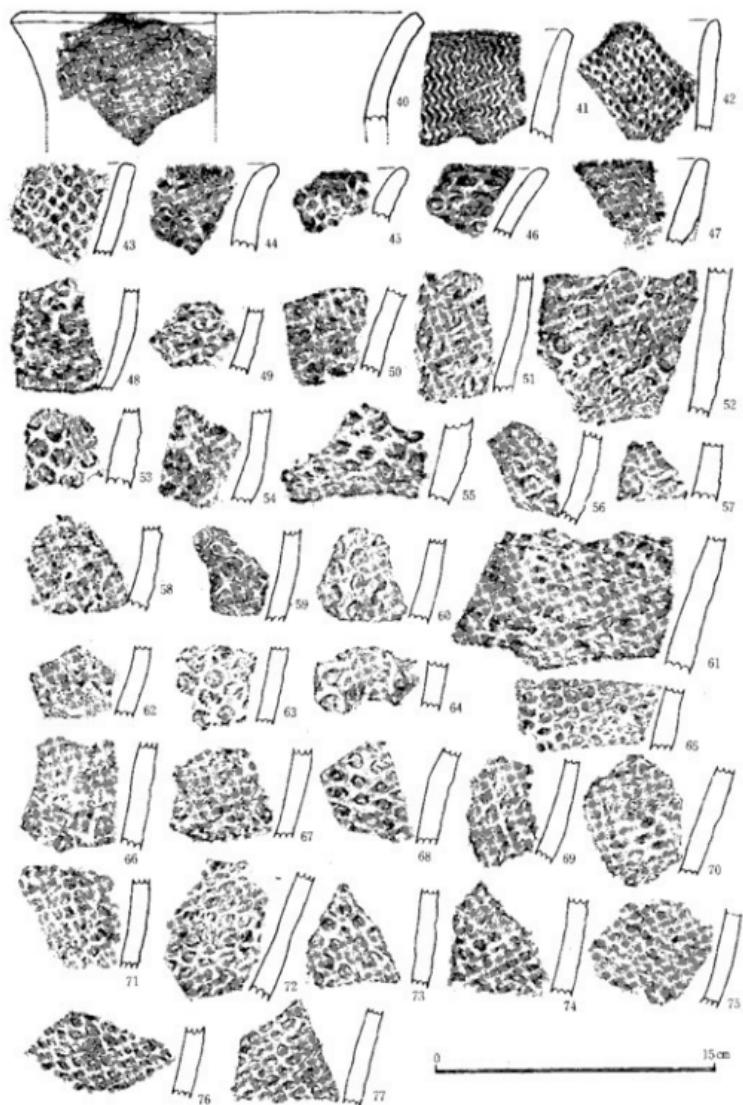
第17図78~109も胴部破片である。78~86に取りあげたものは、c類に特徴的な菱形に近い小形の楕円文を施文したものである。まったく同様な文様が平底の底部にも施文され、時期的に同一とみてさしつかえない。87~94は、格子目文を押捺した資料である。従来、格子目文は、古い時期の押型文土器に多いとされているが、新しい時期にもかなり存在することが明らかとなった。政所馬鹿遺跡では、a類に分類することができる格子目文も少數ながら存在した。しかし、圧倒的に多く出土したのは、新しい時期の格子目文であつ



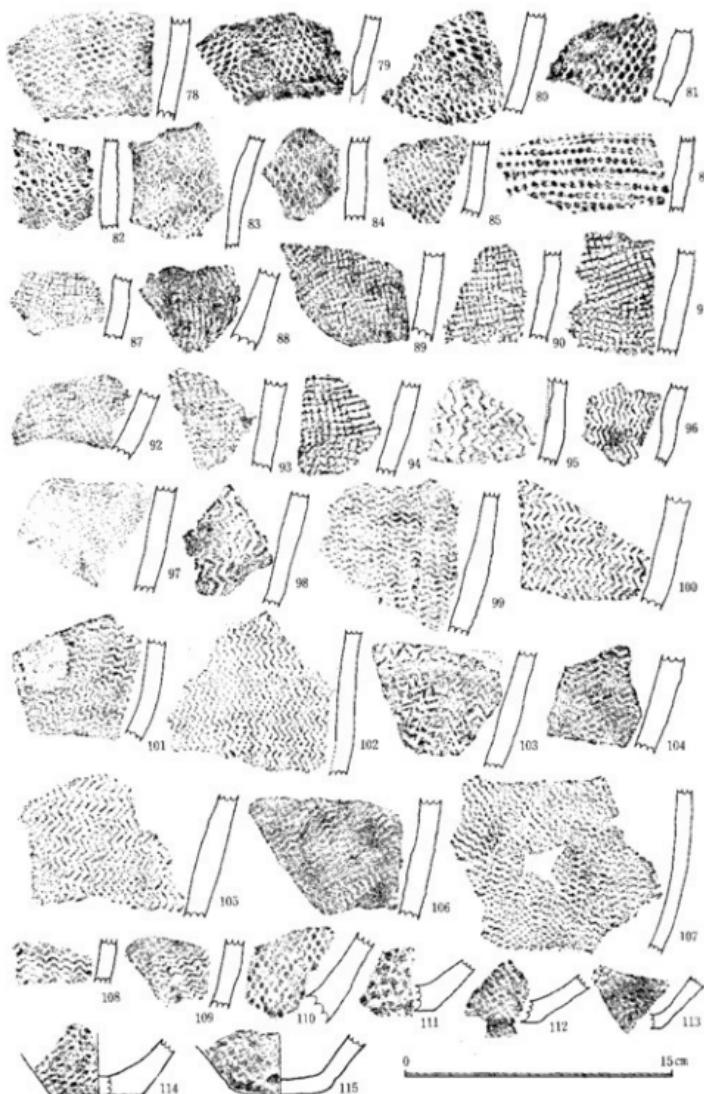
第14図 第I群c 陶土器実測図(1)



第15図 第I群c 陶器実測図(2)



第16図 第I群c類土器実測図(3)



第17図 第I群c類土器実測図(4)

た。胎土・焼成・器厚・文様の形などから、a類の格子目文とは容易に区別がつく。一般に、c類の格子目文は、単位文様が正方形に近く、彫りが深い。しかも、施文方向に一定性を欠くということも、1つの特色といえよう。

110～115は、底部破片である。c類の底部は、平底となるものを特徴とする。底部径は、一般に小さく、尖底を若干押しつぶしたような観を呈するものがある。中には、114などのように、へら削り整形を施したとみうけられる整った底部もある。115は、底面が丸味を帯びており、安定性を欠く。文様は、菱形に近い梢円文が多い。

以上、c類に分類した土器群は、一部b類的特徴とc類的特徴を兼ね備えた一群と、粗大な梢円文を施した土器のほかは、いわゆるヤトコロ式あるいは出水下層式土器とみなされ得るものである。口縁裏面の施文方法から、さらに細分したが、全体的な時間の流れの方向としては、口縁部内面の文様消失、文様の粗大化という傾向をみるとできよう。

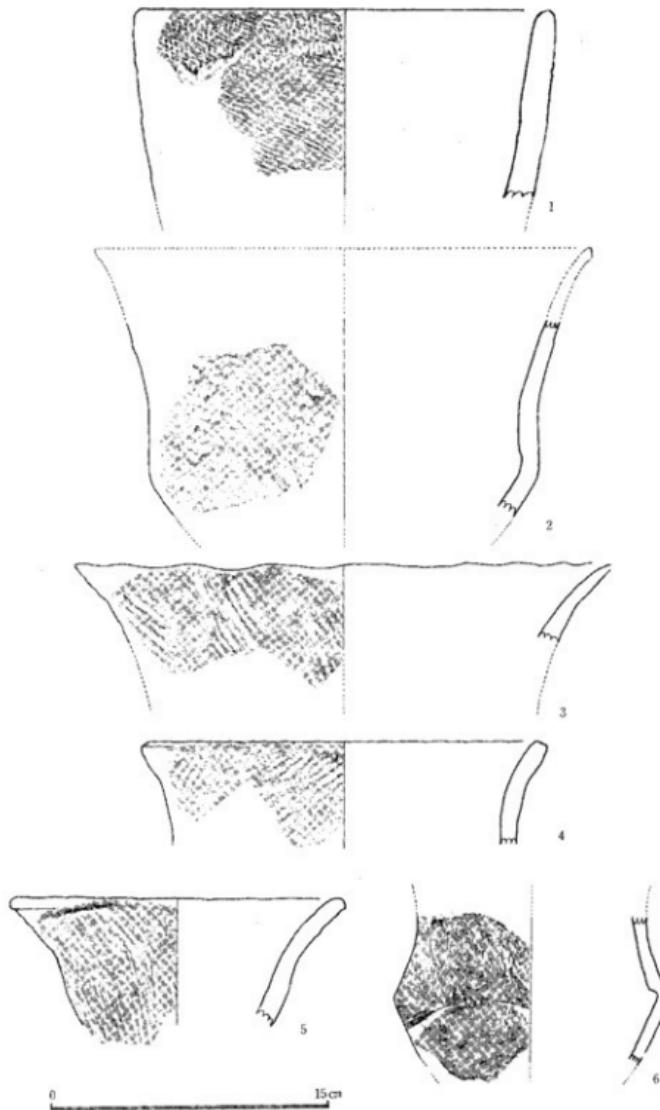
(2) 第II群—燃糸文土器群—

a類(燃糸文、第18図1, 5, 第19図7～20, 23, 24, 28, 35, 37; 図版25～28)

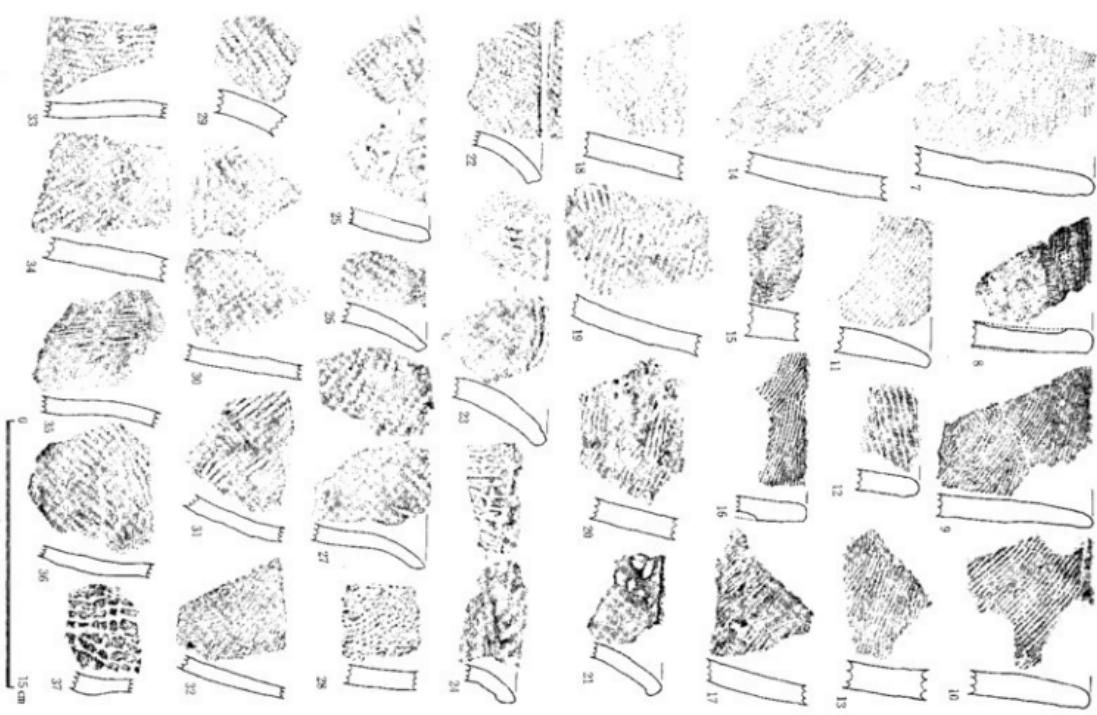
燃糸文を施した一群の土器で、器壁は比較的厚手のものが多い。胎土に小石を混入する例も存在するが、器壁の調整はよくおこなわれており、内面もよくみがかれている。文様は1段燃りの燃糸をもちいた例が多く、右斜め下に斜行するものを一般的とする。中には、垂下するものや、網目状燃糸文もある。全体的器形は、底部が尖底となり、砲弾形となるものと考えられる。

第18図1は、口径23cmを計り、右行する1段の燃糸文を全面に施文し、口縁部上端5cmくらいに絡条体圧痕文を施し、文様帶を形成する。地文とした燃糸文と絡条体圧痕文は、同一の原体をもちいて施文された可能性が大きい。器壁は厚く、内面はひじょうによくみがかれている。5は、棒に巻いた0段(1)の燃糸を、口縁部から垂直にころがして施文したもので、10本程度を1つの単位とする。原体の燃糸が器壁深く入り込んでいるため、一見、条線のように見える。器形は、口縁部がいちじるしく外反し、反対に、胴部以下はすぼまりながら底部へと移行する。底部は、器形から想定すれば、平底になる可能性もあるが、はっきりしない。口径18cmのわりと小型の土器である。

第19図7～20は、すべて1段の燃糸文を地文にもつもので、7は、第18図1と同一個体になるものと考えられる。8, 15は、口縁部に文様帶を形成し、文様の形態も第18図1に類似しているが、細部の文様の相違や、胎土・焼成などが異なっている点から、別個体とみられる。9～12, 16は、口縁部に文様帶を形成しないものである。13, 14, 17～20は胴部破片で、口縁部付近ほど施文が鮮明でない。23は、外反する口縁部で、外面には垂直に、内面には口唇部に平行に、1段の燃糸文を施文する。35も、器形および施文技法が類似したものである。28は、燃糸文土器の中でも数が少ない2段燃りの燃糸文を施文したと考えられる胴部片である。燃糸文土器の中で、特異なものとしては、24, 37の網目状燃糸文が



第18図 第II群a類(1, 5)・b類(2~4, 6)土器実測図(1)



第19図 第II群 a類(7~20, 23, 24, 26, 35, 37)・b類(21, 22, 25~27, 29~34, 36)土器実測図(2)

あげられよう。これは、1段の撚糸を棒状原体に網目状に巻いて、器面をころがして施文したものである。24は、外反した口縁部で、口縁部内面に、棒状原体による原体条痕を施すものである。

b類(繩文、第18図2~4、6、第19図21、22、25~27、29~34、36、図版25~28)

撚糸文と同様、繩文を施文した土器もかなり出土した。器形は、口縁部が外反あるいは直行し、胸部に屈折をもちながら、平底か幾分あげ底気味の底部へ移行するものと考えられる。一部には、胸部の屈折がゆるやかなものも存在する。文様施文は、全面に施すものと、部分的に施すものがあり、2段撚りの単節繩文がもっとも多い。器壁は、撚糸文土器にくらべて、かなり薄手である。

第18図2は、胴部破片であるが、破片が大きいためある程度の器形が想定できた。口縁部は、外反するものと推察され、屈折した胴部をもつ。文様は、類例の少ない3段撚りで、口縁部から垂直に、間隔を置いて回転施文したものである。3も、器形的には、2と大差ない。口径29cmで、口縁部より垂直に2段撚り(L/R)の繩文を、帯状に施文する。文様を施した部分の口径は、若干低くなり、全体的にみた場合、口縁部が小波状を呈する。4は、口径22cmを計り、外反した口縁部から2段撚り(R/L)の繩文を、垂直にころがして施文したものである。そのため、文様は、左下に斜行する単節繩文となる。6は、強く屈折した胴部をもつ小形の土器である。口縁部と底部を欠損するが、さきにあげた器形と同一であろう。外面の整形は、ひじょうによく、全面に、あらい纖維でゆるく撚った1段(R)の原体を垂直にころがして、無節繩文を施している。

第19図21は、3段撚りの繩文を施した口縁部で、第18図2と同一個体である。22と25~27は、それぞれ口縁部破片で、器形と文様に変化がある。22は、強く外反した口縁部に、2段(L/R)の繩文を施文する。25は、口縁部内面に押型文土器にみうけられる原体条痕に類似した文様を施している。26は、幾分外反した口縁部で、25、26とも単節繩文が施文されている。27は、ほかの繩文上層の文様より筋が大きく、圧痕も深い。器形は、口縁部がやや外反して、若干ふくれた胸部へと移行する。口縁部内面にも、外面と同一の繩文を、口縁に沿って帯状に施文する。

29~34、36は、2段撚りの原体を使用して施文した単節繩文をもつ胴部破片である。30は、内面にも、外面と同じような文様を施している。31は、2段撚り(L/R)の原体をもちいて、最初、一定間隔を保って帯状に施文し、その後、方向を変えてさらにその空間に施文して、羽状繩文的な効果を表現しているものである。

繩文土器の文様は、原体そのものの種類によって、その軌跡に変化がみられるが、また、原体の撚りの強さや施文方向、あるいは施文時の力の配分などでも、さまざまに文様が変化する。そのため、器面に施された文様の種類も多く、変化に富むものである。

(3) 第III群—無文土器群—

a 類 (第13図21, 22, 第20図1~10, 図版29)

押型文土器出土遺跡において、顯著に共伴する土器としてあげられるものに無文土器がある。無文土器は、共伴する押型文土器の時期によって量に違いがあり、政所馬渡遺跡では、比較的少量であった。

出土した無文土器は、口縁部の形状によって、第20図1のようにこぶ状突起をもつもの、2, 5~8の直行するもの、3, 4の外反するものなど、3つに大別することができる。とくに、3, 4は、外反する口縁部に、屈折した胴部をもつものと考えられ、器形的には、縄文土器と類似している。

底部は、尖底と丸底がある。第13図21, 第20図10は乳房状となり、第20図9は鋭くとがっている。第13図22は丸底となる。このほかに、図示しなかったが、いくらかあげ底氣味の底部も出土している。

(4) 第IV群—その他の土器群—

a 類 (条痕文土器、第20図11~16, 図版29)

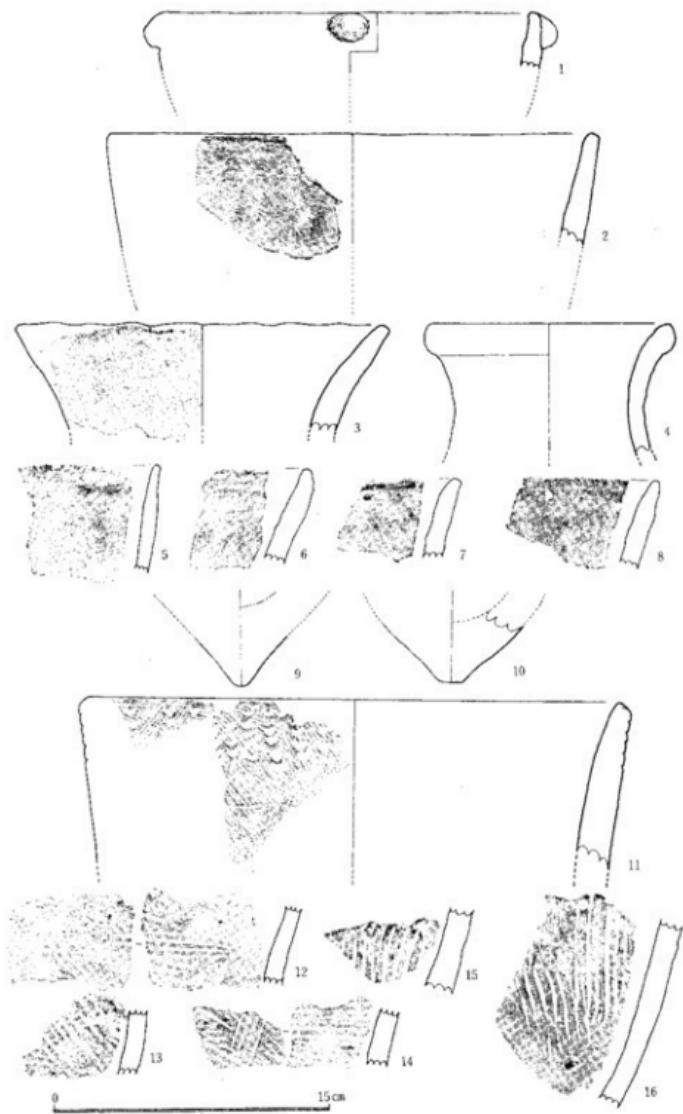
a 類としてあげた条痕文土器には、いわゆる貝殻条痕と、それ以外の原体によって条痕を施したもののが存在する。

第20図11は、きめの細かい条痕を地文とし、口縁部上端4cm間に半截竹管状の工具を使用し、刺突文を4段連続施文する。地文の条痕は、貝殻以外で施文されたと考えられるが、原体は、何であったかはっきりしない。口径30cmで、器壁が厚く、砲弾形の器形を呈するものと思われる。内面は、ひょうによくみがきが施されている。12~14は、いわゆる貝殻条痕文を施した土器である。12, 14は、表裏ともに条痕調整がなされており、14の裏面は、横方向に規則的である。外面は、条痕が交差し、あたかも、文様を構成しているかのような感じを受ける。15, 16は、撚糸を、棒状原体に巻きつけて擦過したと考えられる条痕文をもつ胴部破片である。

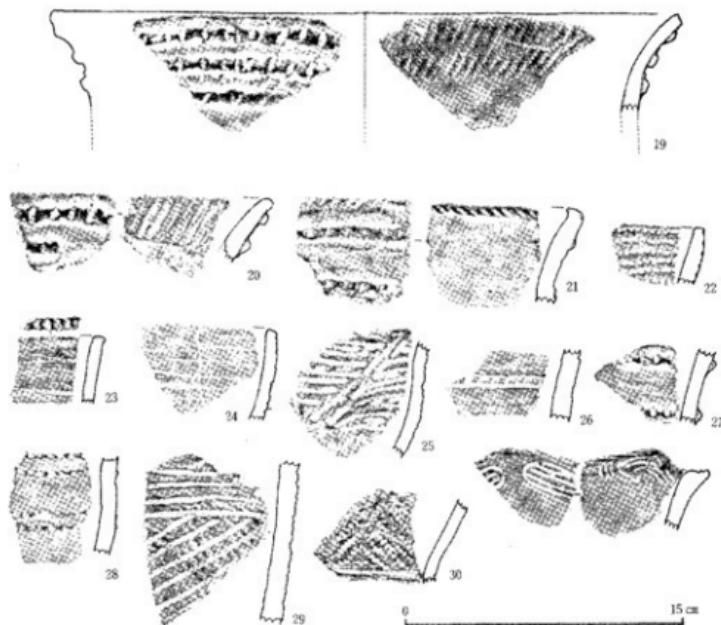
b 類 (塞ノ神式土器、第21図1~8、図版31, 32)

b 類土器は、南九州に分布の中心をもつ塞ノ神式土器である。政所馬渡遺跡でもごく少數ではあるが塞ノ神A式として分類される土器が出土した。この土器は、沈線と網目状撚糸文を口縁部から胴部にかけて施文するものである。

第21図1~3は、頸部の屈折部で、4, 5本を1単位とする沈線文を施す。4~6は、胴部片で、4, 5は、網目状撚糸文を縦方向に施文したものである。6は、沈線で文様区画をおこない、その区画内に、網目状撚糸文をもつ胴部破片である。なお、網目状撚糸文は、塞ノ神式土器に盛行をみる文様であるが、最近、円筒土器以外からも、報告例がある。



第20図 第III群a類(1~10)・第IV群a類(11~16)土器実測図



第21図 第IV群 b類(1~8)・c類(9~18)・d類(19~31)土器実測図

c 類（手向山式土器、第21図9～18、図版31,32）

まのびした山形文を施し、さらに凸帯をはりつけたり、幾何学的な沈線文で文様を構成したりする一群の土器である。これらは、大口盆地（鹿児島県）に分布の中心をもつ手向山式土器と総称されているもので、器形は、口縁部が外反し、胴部で屈折して、平底かあるいはいくらかあげ底の底部へ移行するものである。

第21図9～11は、口縁部内面に山形文を施文するもので、9は、外面の口縁直下に、2本の凸帯を口縁と平行にはりつけ、その上に、指頭状の工具による刻み目をつける。凸帯の下には、さらに、凹線文を数本施文する。凹線文の付近には、焼成後の穿孔が認められた。10も、口縁直下に刻目貼付凸帯をもつが、それ以下は、変形山形文を施文する。9, 10とも口縁が外反する資料である。11は、貼付凸帯の上にも山形文が施され、内面には異形山形文が施文される口縁部付近の破片である。12, 13, 15, 18は、それぞれ変形山形文を施文する胴部破片であり、14, 16, 17は、沈線による幾何学的な文様を施文したものである。

d 類（その他の土器、第21図19～31、図版33,34）

ごく少數の出土で、上記の分類に該当しない一群の土器を、d 類としてまとめた。

第21図19, 20は、口縁部が外反し、円筒形に近い胴部をもつものと考えられ、19は、口径34cmを計る。外面には口縁と平行して3本の刻目貼付凸帯を施し、それ以下は、L/Rの繩文が施文されていると推察される。口縁部内面にもL/Rの単節繩文が施文されている。21, 27, 28も、外面に、同様な刻目貼付凸帯をもつものである。これらは、同一個体ではないが、施文技法が類似している点で、同一のグループとして取り扱ってさしつかえあるまい。22は、細い棒状工具で連続刺突文を数段にわたって施文したものである。23～25は、沈線文土器であり、23は、口唇部に刻み目が施されている。沈線はあまり鮮明ではない。25は、沈線も幅広く鮮明で、曾畠式土器に類似した文様を構成する。しかし、曾畠式土器とは明らかに異なるものと考えられる。26は、半截竹管状工具による押引文を施した胴部片である。29は、最初、0段燃り(r)の燃糸文を施文し、その上から、棒状工具によって、横行あるいは斜行の沈線文を施文している。30は、単節繩文(L/R)を羽状的に施文したもので、その下に沈線を1本引く。31は、外反する口縁部に、沈線で文様を構成したもので、塞ノ神式土器に類似した文様があるところから、塞ノ神式土器に包括される可能性がある。

d 類として一括した土器は、それぞれ興味ある種類のものであるが、これらを主体的に出土する遺跡の報告は、いまのところない。しかし、施文原体の文様や構成など、注目すべき点が多く、これらを総合しなければ、繩文時代早期末文化の全容は、明らかにすることはできない。そのような点から、分析をきびしくして、今後、類例を検討していく必要があろう。

器種	区・層	D-5	E-5	F-5	G,H-3,5	G-5	G-6	一括	計	
		III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V
石 鏨		---	---	3	- 1 -	---	- 4 -	- 1 --	22	31
尖頭形石器I		---	---	1	-	---	---	---	1	2
尖頭形石器II		---	---	---	---	---	---	1 -	1	2
石 斧		---	---	---	1	---	1 -	---	1	1
石 核		---	---	1	---	---	---	---	1	1
彫刻刀様石器		---	---	---	---	---	---	---	2	2
削 器		---	---	1 -	- 1 -	---	---	---	5	7
2次加工剝片		---	---	1	---	- 1 -	- 2 -	---	2	6
使用痕剝片		---	---	1	---	- 2 -	- 1 2	---	4	10
疊 器		---	---	2	---	---	- 1	---	2	5
敲 石		---	---	---	---	---	---	---	3	3
磨 石		---	---	---	---	---	---	---	4	4
									(計)	74
細 石 核		---	---	---	---	---	---	2	1	3
細 石 刃		---	---	---	---	---	---	4	1	4
搔 器		---	---	---	---	---	---	---	1	1
剝 片		---	---	---	---	---	---	2	1	2
石核再生剝片		---	---	---	---	---	---	1	1	1
細石核素材		---	---	---	---	---	---	1	1	2
									(計)	13

第1表 政所馬渡遺跡出土石器類一覧表

b 石器類

今回の発掘調査で出土した縄文文化関係の石器および剝片類は、一括採集資料も含めて、第1表にしめすとおりである。

(1) 石鏨 (第22図1~31, 図版36)

石鏨は、総数31点で、石器全体の約半数を占める。その中でも、硅岩製の石鏨が16点

あった。

第22図1, 2は、長2等辺3角鎌と呼ばれるものであり、表裏とも、側辺から入念な加工がなされている。しかし、1の場合には、基部のえぐりが鋭角をなしており、比較的断面も薄い。3は、淡黒色の黒曜石を素材としたもので、不規則な調整で、偏平に仕上げられている。わりと大形で、鎌身に対してえぐりが小さい。4は、先端部付近に段をもち、脚が大きくひろがる。脚端は斜めに切れ込み、えぐりは3同様小さい。5~7は、歎形鎌と呼ばれている一群で、側縁が幾分湾曲したきわめて入念なつくりである。しかし、7は、側辺が直線的で、先端が小さく突出した特異な形態をしている。9~12は、大きい剝離による調整が施され、基部のえぐりは浅い。11は、鎌身が比較的長く、形態的にやや趣を異にする。これらは、概して断面が厚い。14~17, 22, 23は、両側面がほぼ直線的で、両側面からの細かい調整剝離が加えられ、精巧に作られている。16は、素材が偏平だったためか、片面に主要剝離面を残す。基部の形態は、14~17のように3角形状にえぐるものと、22, 23のようにわずかに内湾するものがある。19~21, 28, 29は、鎌身が1.5cm前後の比較的小形の石鎌である。19は、基部がわずかに内湾するもので、片面に主要剝離面を残す。この主要剝離面には、1側辺からの細かい調整剝離が加えられている。20, 21は、基部が直線的で、調整があらく施され、断面も厚い。28, 29は、形態的には、14~17に類似するが、小形であるため区分した。18は、政所馬渡遺跡でただ1点だけ出土した半磨製石鎌である。まず調整剝離をおこない、みがきを施し、さらに細調整のための細かい剝離を加えて、側辺を直線的に整形している。30は、形態的には3角鎌であるが、基部がわずかに外湾しており、側辺はあらい調整剝離が施されているため、幾分鋸歯状を呈している。片面に主要剝離面を残し、断面はやや厚い。31は、偏平な剥片を素材とし、あらい剝離によって側辺調整がなされている。基部は、丸味を帯びているが、石鎌として分類した。13, 24~27は、石鎌の破片である。27は、片脚を欠損しているが、石材に角閃安山岩を使用した唯一の例である。

以上、政所馬渡遺跡出土の石鎌を概観した結果、それは、形態的变化に富んでいるものであった。石鎌の中で、長2等辺3角鎌や歎形鎌は、押型文土器の中でも古式のものに共伴することが知られている。政所馬渡遺跡では、長2等辺3角鎌や歎形鎌の出土は、少なかった。政所馬渡遺跡で中心的な石鎌としては、14~17, 22, 23のように、側辺が直線的で、形態的に整った精巧な作りのものと、これに伴って、9~12のやや粗雑な作りで、断面が厚手のものや、19~21, 28, 29のように、小形の石鎌などがあげられよう。

(2) 尖頭形石器 I (第22図32, 33, 図版36)

尖頭形石器 I として分類したものは、2点ある。第22図32は、両面とも周囲からの入念な調整剝離が加えられ、形態的にも整った形をしている。使用素材が、厚味のある破片であったためか、断面は厚い。33は、縦長の剥片を素材として利用したもので、調整は、主



第22図 石器(1~31)・尖頭形石器Ⅰ(32, 33)実測図

要剥離面から、大きな剥離によってなされている。主要剥離面側の先端には、さらに細かい2次調整をみる。全体的な形態は、基部を欠損しているため、明らかでない。材質は安山岩である。

(3) 尖頭形石器II(第23図1,2,図版37)

第23図1,2は尖頭形石器IIとして分類した。1は小さい角閃石を含むきめ細かなサヌカイトを素材としたもので、先端部および基部を一部欠損するが、ほぼ完形で、柳葉状を呈している。両面とも、まずあらい剥離で整形され、さらに細かな調整剥離が施されている。横断面は、先端が偏平で、中央部はほぼ菱形であり、基部に近づくにつれて3角形状になり、厚さも最大となる。なお、特別な基部調整は、観察できなかった。2は粗質なサヌカイトを素材としており、裏面には主要剥離面を残す。調整は、主要剥離面からの加熱によってなされており、右側辺の剥離がより入念である。しかし、急角度の調整のため、階段状剥離となって停止している部分もある。中央部は、調整が行き届かず、若干自然面を残している。断面は、中央部が台形に近い3角形であり、下部は3角形となる。全体的な形状あるいは調整などから、大形片面加工の尖頭形石器の基部と考えられよう。

(4) 石斧(第23図3,図版37)

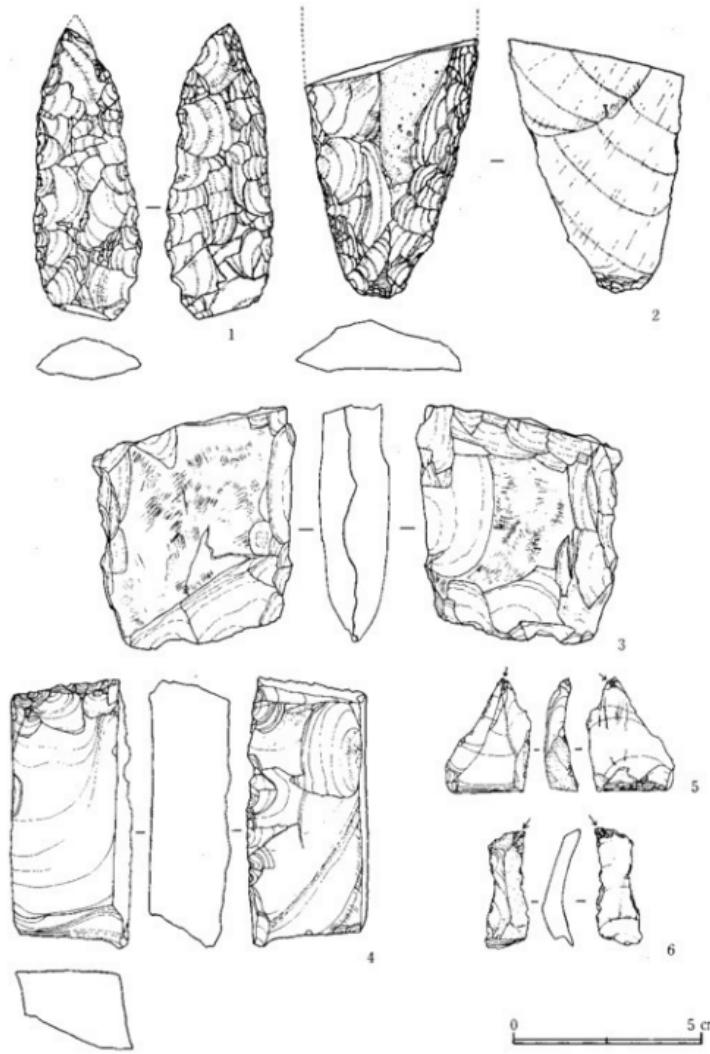
一般に、押型文土器と共に伴する石斧の数は、あまり多くなく、政所馬渡遺跡でも、石斧は第IV層出土のもの1点だけであった。それは、偏平で硬質な細粒子の砂岩を素材としたもので、側辺から大小の調整剥離によって整形され、さらに部分的にみがきを施している半磨製石斧である。全体の形態は、基部側が中央部で折損しているため、明らかでない。刃部には、使用に際して生じたと思われる大小の刃こぼれがみうけられた。また、中央部で折損した部分には、再加工を施したと考えられる剥離も観察された。

(5) 石核(第23図4,図版37)

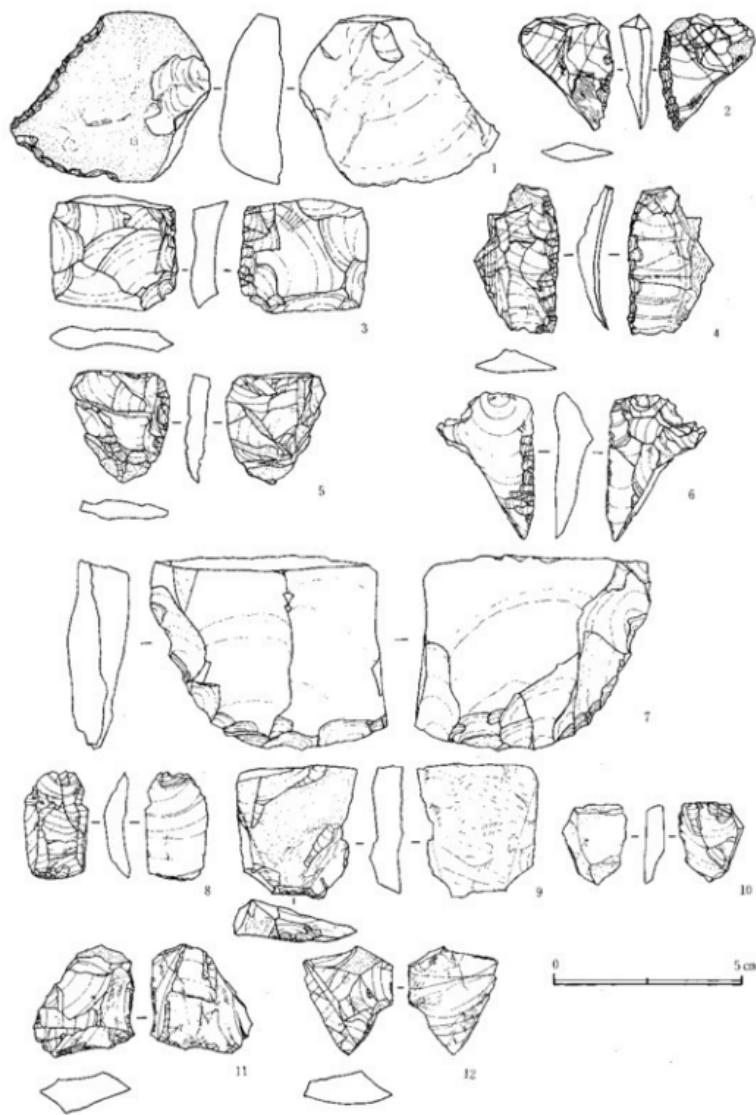
この石核は、両側が節理面となっており、方柱状の特異な形態をしめす。剥離作業面は、前後2面あり、縦はぎと横はぎの剥片がはぎとられた形跡が認められた。打面は、特別には調整されず、平坦打面あるいは節理面をそのまま利用している。政所馬渡遺跡では、縦はぎと横はぎの剥片がかなり出土しており、この石核の剥離方法と軌を一にする。同一石核から縦長と横長の剥片がはぎとられていることは、興味深い。

(6) 彫刻刀様石器(第23図5,6,図版37)

第23図5は、硅岩の縦はぎ剥片を素材としたもので、剥片の先端部に彫刻刀面を作り出している。両側辺は、この剥片をはぎと以前の剥離があり、剥片自体、先端部がとがった形態となる。6は、漆黒色黒曜石の小形な縦長剥片の先端部に、調整加工を施したもの



第23図 尖頭形石器II(1, 2)・石斧(3)・石核(4)・彫刻刀様石器(5, 6)実測図



第24図 刮器(1~7)・2次加工剥片(8~12)実測図

である。打瘤は、主要剥離面側から折りとられ、裏面には自然面を残す。先端部の調整は、錐としての使用も可能にするものである。5, 6とも剥片自体は主要剥離面側へ湾曲した形状を呈する。

(7) 削器（第24図1～7, 図版38）

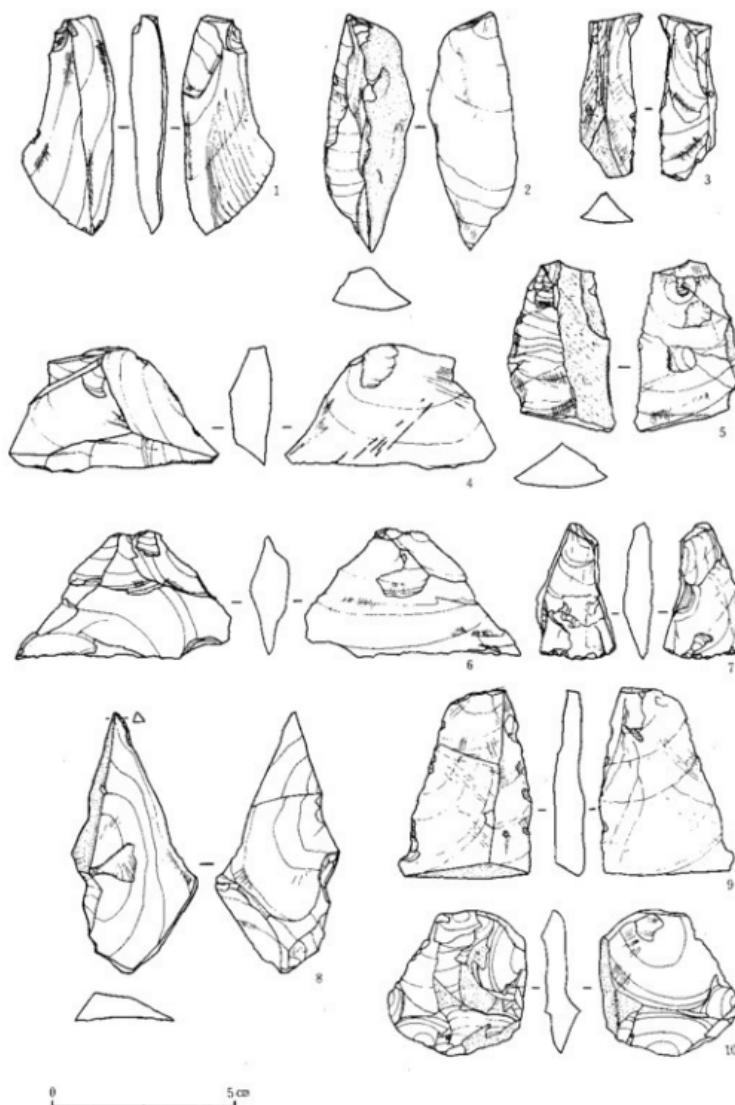
第24図1～7は、削器として分類したものである。1は、平坦打面を作り出した頁岩の円礫から、1打ではぎとられた大形の剥片に、主要剥離面から細かな2次調整を施し、刃部を形成したものである。刃部の位置と断面の厚さから、搔器の使用も可能である。2は、縦長剥片の一方の端に、2次加工によって刃部をつけたものである。刃部の加工は、主要剥離面に、細かい剝離が加えられており、同時に、打瘤も除かれている。3は、細粒子で硬質な砂岩の横はぎ剥片を素材にもちい、両面ともに2次加工によって、偏平ではば正方形に近い形に整形されている。4は、縦長の剥片の一側辺に、刃部加工を施したものである。5は、節理の多く入った硅岩を素材としており、側辺の一方の片面に、刃部を形成する。6は、裏面に主要剥離面をそのまま残し、側辺の中央部付近に、細かい2次加工を施して、刃部を形成している。表側の刃部付近には、使用による刃こぼれがみうけられる。7は、頁岩の大きな剥片を素材としており、大小の2次加工を加えて刃部を形成している。刃部には、使用によると思われる磨滅が観察される。

(8) 2次加工剥片（第24図8～12, 第25図8, 図版38, 39）

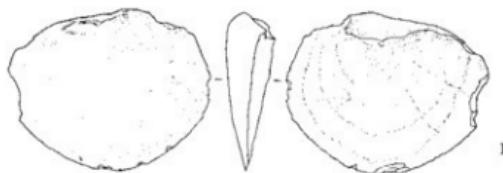
第24図8～12は、硅岩の縦長の剥片を利用し、先端または側辺に2次加工を施したもので、刃器としての使用が可能である。8は、片面に主要剥離面をそのまま残し、末端部に主要剥離面側からの細かい剝離が加えられており、搔器の使用が考えられる。9も、片面に主要剥離面をそのまま残し、剥片末端部に主要剥離面からの2次加工が確認できる。10～12は、一側辺に細かい剝離が加えられており、何らかのかたちで、刃器として使用されたと考えられるものである。第25図8は、流紋岩の横はぎの剥片で、末端部のとがったところに、2次加工を施したものである。先端部の形状から、刺突具か、あるいは錐などとしての使用目的が考えられる。

(9) 使用痕剥片（第25図1～7, 9, 10, 第26図1, 図版39, 41, 42）

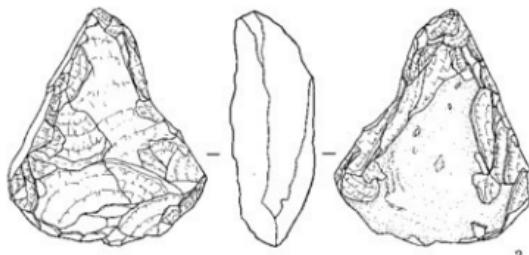
使用痕の観察された剥片で図示したものは、10点あり、縦はぎの剥片が7点、横はぎの剥片が3点である。政所馬渡遺跡出土の剥片には、縦はぎと横はぎの2とおりの剥片があり、それぞれの剥片剥離技術によってはぎとられたものと考えられる。使用痕は、縦はぎの場合は側辺に、横はぎの場合は末端部に、多くみうけられる。第26図1は、横はぎ剥片の中でも形状を異にし、安山岩の円礫から、1打によってはぎとられた剥片である。使用痕の状況から、これらの剥片は、すべて刃器として使用されたものであろう。



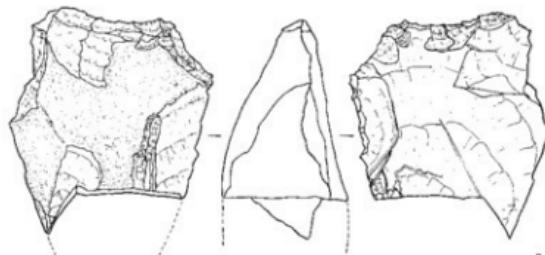
第25図 使用痕剥片(1~7, 9, 10)・2次加工剥片(8)実測図



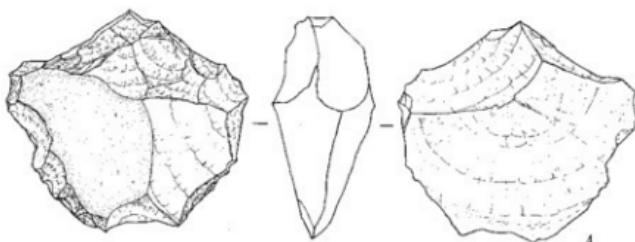
1



2



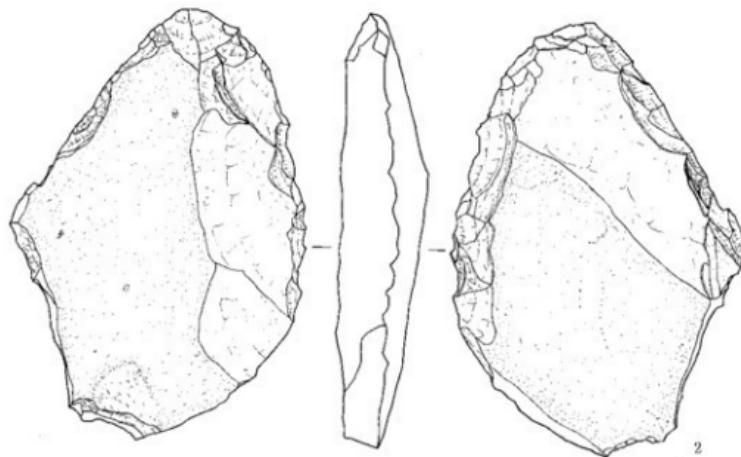
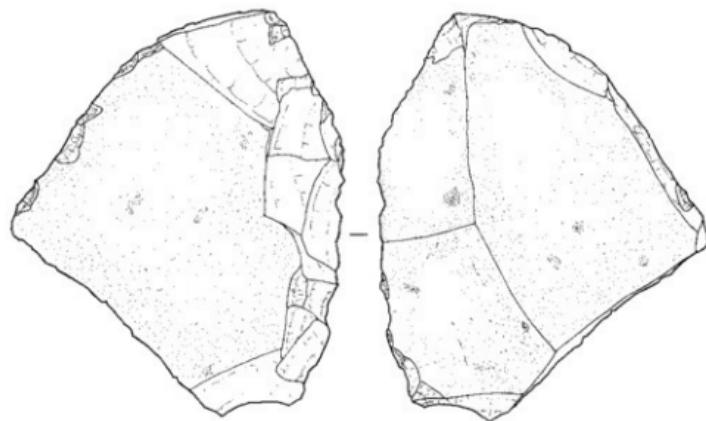
3



4



第26図 使用痕剥片(1)・鍤器(2~4)実測図



第27図 砥器(1, 2)実測図



(II) 磨器（第26図2～4、第27図1、2、図版41、42、43、44）

政所馬渡遺跡からは、一括採集資料も含めて5点の磨器が出土した。これらの磨器は、大きく2つの形態に分けられる。1つは、第27図1、2のように、偏平な安山岩礫をもちいて側辺に一方からあるいは交互に剥離を加えたものと、ほかの1つは、第26図2～4のように半割した礫あるいは剥片を素材とし、刃部加工をおこなったものである。第27図1は、一側辺に片面だけから2次加工を加えて刃部を形成しており、大部分は、自然面を残しているものである。刃部縁には、使用によると思われる磨滅がみうけられる。2は、刃部形成のため、両側面から先端部にかけて、交互剥離が加えられている。ただ、先端部の調整は、さほど入念ではなく、鋭い刃部を形成するまでにはいたっていない。第26図2は、安山岩の円礫からはぎとった分厚い剥片を素材にもちいており、一部に主要剥離面がみられる。先端は、両面からの調整剥離によって、尖頭状に整形され、側辺も、両面からそれぞれ2次加工が施されて調整されている。先端部には、使用の際に生じたと思われる磨滅がみうけられる。3は、流紋岩の礫からはいだ厚い剥片を素材としたもので、先端部には、両面からの細かな調整剥離が加えられ、刃部形成がおこなわれている。主要剥離面側の左上方には、使用によると思われる磨滅がみとめられる。4は、厚手の剥片を、礫器に転用した可能性がある。

(II) 磨石・敲石（第28図1～7、図版40）

磨石・敲石として分類した石器の石材は、すべて安山岩であった。第28図1は、楕円形礫の一面を磨石として使用したもので、礫の長軸方向縁端には、敲石として使用した痕跡がみとめられる。2は、ほぼ球状を呈した礫で、一部に片寄って敲石として使用された打痕が観察される。3は、偏平な楕円形礫の両面を磨石として使用し、礫の長軸方向縁端には、敲石として使用した打痕がみとめられる。4も、1や3と同様な楕円形礫をもちいており、一面が磨石として利用されている。磨石面の中央には、さらに打痕が観察された。5～7は、破碎しているが、磨石・敲石として使用されたものである。5と7は、磨石面に打痕がみとめられ、5は、全体に火を受けた形跡が観察された。

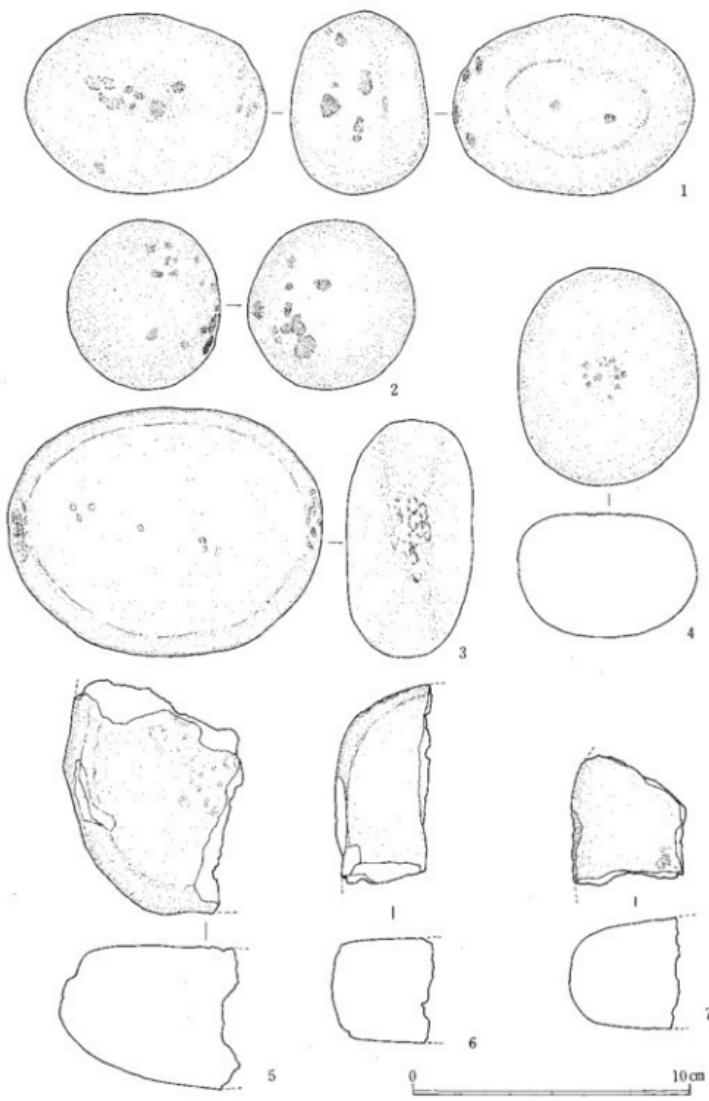
磨石や敲石は、1個で兼用される場合が多く、すりみがいたり、たたいたり、あるときは台石として利用されたり、多目的な使用方法が考えられよう。

2 細石器文化関係

G-6区第VII層より発見された細石器文化関係の遺物は、一括採集資料も含めて、細石核・細石刃・搔器・剥片・石核再生剥片・細石核素材と共に伴う土器片などである。

a 土器

細石核・細石刃を出土した第VII層と同一平面内において、2点の土器片が出土した。2点



第28図 敲石・磨石(1~7)実測図

とも無文の胴部片で、胎土に多くの砂粒と金雲母を含む。色調は黒褐色を呈し、表面は平滑であるが、焼成が悪く脆弱である。裏面は全面剥落しており、調整などは明らかでない。これらの土器は、押型文土器に伴う無文土器とはかなり趣を異にしているものであった。

b 石器類

(1) 細石核 (第29図1~3、図版35)

一括採集資料も含めて、3点の細石核が出土した。第29図1は、漆黒色の黒曜石を使用した舟底形の細石核である。厚味のある剝片を素材として使用し、側面調整は、入念におこなわれている。とくに下方からの調整が顕著で、下縁は、小さな調整剝離によって直線的に仕上げられている。また、横方向からの調整もわりと入念で、背縁を形成するにいたっている。細石刃をはぎとるための打面は、側面調整のあと、長軸方向の一打によって作り出されている。打面調整はとくに施されておらず、そのまま平坦打面となっている。細石刃剝離面には、現在5本の橢状剝離が確認される。細石刃剝離面と打面とのなす角度は60度となり、かなり鋭角をしめしている。2は、珪化木内に含まれている瑪瑙を使用したもので、形態的には角柱状を呈する。素材の制約から、側面調整は、上下・斜め方向と不規則に施され、やや粗雑な感じをうける。一部には、節理面を残している。打面は、側方からのあらい調整で形成されており、細石刃をはぎとる場合には、さらに長軸方向に小さな剝離を加え、打面の調整をおこなっている。3は、2面の細石刃剝離面をもつもので、褐色から黄白色の珪化木が利用されている。打面は、長軸方向の打撃によって形成された平坦打面であり、細石刃をはぎとる場合は、一部に小さな調整剝離を施す。橢状剝離面の切り合い関係から、図示した左側が古い細石刃剝離面となっている。打面と細石刃剝離面とのなす角度は、1と同様鋭角をしめし、かなり剝離作業が進んだ段階の細石核である。

(2) 細石刃 (第29図10~12、図版35)

細石核の数に対して、わずか3点の細石刃しか検出することができなかった。第29図10は、打面の一部を切除された薄手の細石刃である。11、12は、ともに打面を有した完形品であり、12は、断面が3角形を呈している。3点とも2次加工および使用痕などは、観察されなかった。

(3) 撃器 (第29図6、図版35)

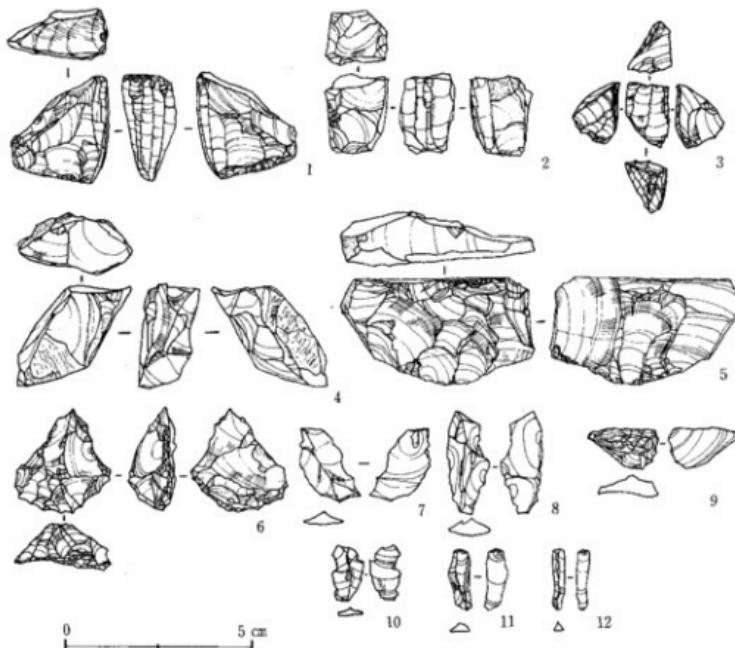
一括採集資料ではあるが、漆黒色黒曜石の分厚い剝片か不定形石核の残核を素材としたもので、下端は橢状剝離様の調整が加えられ、撃器的な刃部を形成している。側面には、裏面側からの加撃によって大きな剝離が加えられ、さらに小さな剝離を丹念に施している。細かな剝離は、裏面の刃部付近にもみとめられる。

(4) 剥片（第29図7, 8, 図版35）

珪化木の部分を含む瑪瑙の剥片が、2点出土している。第29図7は、調整打面からはぎとられた＜ノ＞の字形の剥片である。石材の性質から主要剥離面に凹凸がみられる。8は、断面が厚味のある3角形で、横方向からの加撃によってはぎとられたものである。2点ともに、その周縁には、明確な使用痕や2次加工はみあたらなかった。

(5) 石核再生剥片（第29図9, 図版35）

細石刃剥離面に、4, 5回の剥離をこころみているが、加撃力の配分と石材の目に逆らった方向からの加撃であるためか、すべて、階段状剥離となって停止している。そのため、新たな打面を形成すべく、1打によってこの部分をはぎとったものである。石質は、褐色から黄白色の珪化木である。



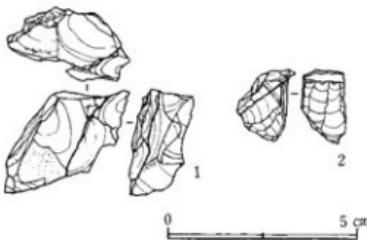
第29図 細石核(1~3)・細石核素材(4, 5)・搔器(6)・剥片(7, 8)・石核再生剥片(9)・細石刃(10~12)実測図

(6) 細石核素材（第29図4,5、図版35）

前記細石核と同一石材で、形態的にもきわめて類似した、細石核素材とみなされる資料が2点出土した。第29図4は、珪化木の部分をいくらか残した濃いあめ色の瑪瑙製で、2の細石核と同一石材である。やや不安定な感じをうけるが、上下端は、大きな剝離によって調整されている。しかも、上端は打面として用意されており、細石刃を製作する場合には、さらに細かな調整剝離が施される。側面は、節理をそのまま利用している部分もあり、調整は充分ではない。5は、平坦打面をもつわりと偏平な細石核素材である。側面調整は、おもに下方から施されているが、横方向からと打面側からも、細かな調整が加えられている。打面は、側面調整以前に作り出されていて、線条痕ないし擦過痕が確認される。背縁付近には、一部自然面を残す。この細石核素材に、長軸方向への加擊で新たな打面を作り出せば、1の細石核とまったく同一となる。石質も、漆黒色の黒曜石で、類似している。

(7) 接合資料（第30図1,2）

発掘面積の限定と単純な組み合わせの石材使用から、石器の接合をこころみたところ、2組の接合資料をたしかめることができた。その1組は、第29図3の細石核と、9の石核再生剝片である。それぞれの主要剝離面が接合し、しかも古い細石刃剝離面を一部共有しているため、おののの細石刃剝離面の前後関係を決定付けることができた。つまり、この再生剝離をおこなった後に、新たな剝離面を打面として最終的な細石刃を製作したことになる。もう1組は、4の細石核素材と、8の剝片である。接合面は珪化木の部分であり、節理的様相をしめし、凹凸がはげしい。しかし、細石核素材の平坦打面と考えられる部分を一部共有していることから、接合は確実である。8の剝片は、ほとんどが珪化木の部分を残した瑪瑙であるため、細石核素材の側面調整のため、はぎとられた公算が大きい。



第30図 接合資料実測図

第4章 研究と考察

〔縄文文化関係〕

1 政所馬渡遺跡出土の土器群について

政所馬渡遺跡出土の土器群については、第3章において4群10類に分類し、詳細な説明を加えたので、ここでは、それらを概略的にまとめて、政所馬渡遺跡のあり方を検討してみたい。

政所馬渡遺跡から出土した土器群の中で主体となるのは、第I群に分類した押型文土器群である。それらは、早水台遺跡(1955, 1965 八幡・賀川)の調査における押型文土器の基準設定を軸にして組み立てた形式学的分類によって、a類からc類までに小分類することができる。この小分類の基準設定にあたっては、器形や文様を中心としたものに、さらに、口縁部内面の原体条痕に、時代性がよくあらわれることを考え、この原体条痕の有無や形状の観察を重要視した。もともと政所馬渡遺跡各層出土の押型文土器は、層位ごとの明確な形式差はみとめられず、包含層は、第IV層から第V層を中心とする単純なものである。しかも、地さげ工事によって出土した遺物もかなり存在したため、必要に応じて層位を考慮しながら形式学的分類をおこなったのである。

それによると、a類は、従来呼称されている早水台式土器のわくにはいるもので、単純な尖底深鉢形の器形を基本とする。口縁部内面には原体条痕が施され、外面の文様も横に整然と施文されるものが多い。口縁部内面に原体条痕を施文しないものは、稻荷山式土器(1970 橋ほか)に類似するものであるが、稻荷山式土器のような口唇部の刻み目は施さない。出土量は、概して少ない。b類は、いわゆる田村式土器である。外反した口縁部にふくらんだ脣部をもち、乳房状の尖底へと移行する形態で、口縁部内面に、原体条痕を太く長く施文することを特徴とする。出土量は、a類に比較して多いが、さほどではない。c類は、ヤトコロ式土器に相当するもので、外反した口縁部とややふくらんだ脣部をもち、平底の底部へと移行する深鉢形の器形を呈する。原体条痕を施文するものと、しないものとがある。この遺跡では、c類が押型文土器群の中では中心的な存在であり、出土量も多い。したがって、政所馬渡遺跡は、押型文土器の中では、もっとも新しい時期の平底の押型文土器が主体をしめる遺跡であるといえよう。

1955 八幡一郎・賀川光夫「早水台」『大分県文化財調査報告3』大分県教育委員会

1965 八幡一郎・賀川光夫「続早水台」『大分県文化財調査報告9』大分県教育委員会

1970 橋 昌信ほか「稻荷山遺跡緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告20, 21』大分県教育委員会

また、形式学的分類のほかに、全体的な土器の出土量を知るため、文様別・層位別に統計をとった。それによると、山形押型文が14.2%、楕円押型文が33.1%で、格子目押型文は2.7%であった。楕円押型文の出土量がいちじるしく多く、山形押型文の2倍以上である。これらを他の遺跡と比較してみると、稻荷山遺跡では、山形押型文が出土土器全体の14.9%で、楕円押型文が10.0%（1970 橋ほか）となり、むしろ、山形押型文の方が、1.5倍多い。早水台遺跡では同様に山形押型文が多く、A調査区で63~71%、B・C調査区でも62~71%（1955 八幡・賀川）をしめ、楕円押型文の2倍から3倍に当たる。これらの各遺跡は、押型文土器の中では古い時期に属するもので、ここでは逆に楕円押型文より山形押型文の方がはるかに多い。田村遺跡（1960 賀川ほか）では、ざんねんながら、山形押型文と楕円押型文との比率は明らかにされていないが、この時期には、すでに山形押型文よりも楕円押型文の方が、量的にまさっていたものと推察される。ヤトコロ式（1957 賀川）に相当する政所馬渡遺跡では、楕円押型文がはるかに多く、相対的には、時間が新しくなるにつれて、楕円押型文の比率が増加するという傾向をみてとることができよう。

さらに、押型文土器には、多く無文土器の伴出が知られており、政所馬渡遺跡でも、無文土器の割合は、全体の28.9%であった。無文土器の系譜は、押型文以前にさかのぼり、川原田洞穴（1964 岩尾・酒勾）や成仏岩陰遺跡（1972 板田）あるいは二日市洞穴（1980 橋）では、押型文土器より下層に、強くとがる尖底の無文土器が発見され、また、成仏岩陰遺跡や二日市洞穴では、最下層に無文土器や条痕文土器が確認されている。他の遺跡における無文土器のあり方は、稻荷山遺跡では73.0%と高率をしめ、早水台遺跡においても、A調査区で65%、B・C調査区で61%であったと報告されている。田村遺跡では、無文土器は少なくなり、政所馬渡遺跡では、さきに述べたように28.9%で、共伴する土器の中ではもっとも多いが、相対的には減少しているといえよう。つまり、無文土器の場合は、古い時期の押型文土器に多く伴出し、時期が新しくなるにつれて減少するという結果が得られた。

1955 八幡一郎・賀川光夫「早水台」『大分県文化財調査報告3』大分県教育委員会

これは、有文土器全体に対する割合である。

1957 賀川光夫「押型文共伴資料」『九州考古学2』九州考古学会

1960 賀川光夫・羽田野一郎「大分県大野郡朝地町田村遺跡の調査報告」大分県朝地町教育委員会

1964 岩尾松美・酒勾義明「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」『大分県地方史34』大分県地方史研究会

1970 橋 昌信ほか「稻荷山遺跡緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告20, 21』大分県教育委員会

山形文と楕円文の比率の数値が低いのは、出土土器全体にしめる割合のためである。稻荷山遺跡では、全体の73.0%を無文土器がしめている。

1972 板田邦洋「成仏岩陰遺跡の調査」『国東町文化財調査報告書』国東町教育委員会

1980 橋 昌信「大分県二日市洞穴発掘調査報告書」別府大学付属博物館

次に、政所馬渡遺跡では、押型文土器に共伴する特筆すべき土器として、撫糸文・繩文土器があげられる。今までにも、押型文土器に共伴して少量の撫糸文土器や繩文土器が出土する事実は知られていたが、政所馬渡遺跡では、他の遺跡とは比較にならぬほどの多量の撫糸文・繩文土器を出土し、全体の 14.3%をしめ、山形押型文の出土量を若干しのぐ状況であった。この撫糸文・繩文土器については、あとでさらに検討してみたい。

その他、少量の出土はあるが、南九州の大口盆地におもに分布する塞ノ神式土器や押型文土器の系統を引く手向山式土器などがある。これらに伴って若干の南九州地方の土器も混在している状況であった。これによって、政所馬渡遺跡の下限を決定づけることができる。それ以降の新しい時期の土器は、まったく検出することができなかった。

以上、政所馬渡遺跡は、押型文土器の中では古い形式とされる早水台式土器に始まり、押型文土器の伝統を最後まで残す手向山式土器まで引き継がれる。しかし、文化の主体となるものは、ヤトコロ式土器であり、押型文土器の編年の中では、もっとも新しい段階に属するものである。政所馬渡遺跡は、この新しい段階、いいかえれば、押型文土器の系譜の中では最終段階に当たる押型文土器の様相を検討するのに重要であろう。つまり、押型文土器にみられる文様や器形自体に質的変化があらわれ、共伴する土器群にも多様性がみうけられるようになる。共伴する土器群の中では、撫糸文土器や繩文土器の割合が大幅に増大し、刺突文土器や条痕文土器などの存在もみのがせない。このような状況は、押型文土器文化以降に発展する新たな土器文化の胎動として、1つの見解を与えることができよう。

なお、土器の多様性は、立地による影響も大きいと思われるが、このことは、別の機会に論じたい。

2 主要土器の細部拡大と粘土型について

押型文土器も含めて、有文土器の研究においては、文様の施文原体と施文技術を解明することは、その文化の性格の一端を知るのに重要であると考えられるが、それらの解明は、土器に圧痕として残存する文様から割り出さなければならない。これは、今日の段階ではかならずしも充分とはいえないが、1つの方法として、ネガティブな文様を、粘土型によってポジティブに起こし、観察する方法がある。押型文土器についてもある程度効果があり、撫糸文土器や繩文土器の分析では一段と有効である。押型文土器の場合は、1原体分施文されている部分を詳細に観察し、施文原体を復元する方法が、いまのところもっとも便利である。ざんねんながら、政所馬渡遺跡からは、押型文の施文原体を復元するのに充分な資料は、発見されなかった。

さて、図版 45 は、押型文土器の粘土型である。1原体分の文様は割り出せないが、文様は、原体に整然と彫り込まれていることが観察されよう。山形文の彫りは箱彫り的で精密に彫り込まれ、梢円文の場合も原体に上下から刻みを入れて梢円状にくぼみを付けるので

はなく、1つ1つ楕円形に彫りくぼめられている。格子目文は、さらに彫りが深く、原体には、縦横等間隔に逆台形的な彫り込みが加えられたと推察できる。これらの文様を刻むには、精巧な彫刻刀様石器の存在が必要であったと考えられる。

次に、燃糸文土器と縄文土器について観察してみよう。図版46の1は、3段燃りの縄文を施文した縄文土器で、粘土型の右端に3つの節がみうけられる。この破片は、ちょうど口縁部に当たるため、完全に文様が密着していない。粘土型で1つの節を観察してみると、節内の条が左上から右下にさがっており、もともとは0段燃り「1」の燃糸を基本としていることがうかがえよう。0段燃りの燃糸「1」を3段燃りにすると、「R/L/R」「(1)-(R)-(L/R)」となり、これを上から下にころがして施文すると左側の文様と同一になる。2は、0段燃りの燃糸文で、粘土型で観察すると、条が左上から右下にさがっている。したがって、この燃糸は「1」であり、これを棒状工具にぐるぐる巻きつけて施文したもののが、左側の文様である。0段燃りの燃糸の場合は、右巻きでも左巻きでも同一の文様が得られる。3は、燃糸文を地文として口縁部に絡条体圧痕を施す土器であり、粘土型で観察してみると、絡条体部分の燃糸に筋がみられ、1段燃りの燃糸を使用していることがわかる。さらに、絡条体は、端の方の文様が小さくなっているので、まっすぐな棒状工具に、1段燃りの燃糸がちみつに巻きつけられて押圧されたものと考えられる。地文の燃糸文も、棒状工具に巻きつけた同一の施文具を回転して施文されたものに違いないであろう。もともと燃糸文は、棒状工具に燃糸を一定間隔で巻きつけて、器面に対して上から下にむけて施文した場合、文様自体は斜行する。しかし、本例のように、ちみつに巻きつけて施文すると、文様は斜行せず、原体をころがした方向と同一になる。したがって、この土器の場合には、はじめ、原体を斜めにむけて地文の燃糸文を施文し、その後に、口縁部付近に同じ原体を使用して、絡条体圧痕文を施文したものと考えられる。

また、図版47の1は、網目状燃糸文で、1段燃りの燃糸を棒状工具に「x」字状に巻きつけて、それを横位に置き、上方から下方にむかって回転施文したものである。燃糸はわりと太めのものを使用していることがうかがえよう。2は、粗雑に燃った1段燃りの燃糸を施文したものである。3は、塞ノ神式土器に共伴する網目状燃糸文である。細く燃った1段燃りの燃糸を、棒状工具に「x」字状に巻きつけ、交差するところを結節して、網と同様な形状にしたものである。技術的には、かなり高度で洗練された感じをうける。

図版48の1は、単節縄文を羽縄文的に施文したものである。これは、縄文原体のころがす方向を90°変えて施文すれば同様な文様を得ることができる。粘土型を観察すれば、節は縦に短く丸味を帯びている。おそらく強く燃りをかけた結果であろうと考えられる。さらに、節の中には条が判然と確認できず、使用された繊維は、わりと良質なものであった可能性がある。わずかに確認できる条は、節の長軸に対して右上から左下に傾斜している。これは、0段燃り「r」の燃糸が使用されたためで、この「r」を2段燃りした「R/L」が縄文原体として使用されたことがうかがえよう。2は、条痕文土器であるが、貝殻条痕文

でないことは明らかである。条痕のように、擦過した文様は、粘土型では判別し難い。消極的ではあるが、棒状工具に燃糸を巻きつけて、それを原体として擦過した条痕文土器ではないだろうか。3は、細かい条痕を地文とし、刺突文を施文した口縁部である。これらの刺突は、竹管状刺突文とみなしてきたが、粘土型を取ってみると、竹管とは性格が違うようにみうけられた。刺突が鋭利で、管の壁も薄いことなどから、断定はできないが、鳥類の管骨などを利用した可能性もある。

その他、粘土型図版では割愛したが、第21図19, 20(図版33, 34)は、外面に刻目貼付凸帯をもち、内面に繩文を施文する土器で、この刻目貼付凸帯は、内面に施文した繩文原体によって刻み目を施されていることが、粘土型をとって明らかとなった。当初、へら状工具で、刻み目をついていると考えていたが、同一施文具ですべてを処理していることが明確となった。燃糸文と絡条体压痕文も同様な関係にあり、異なる文様を同一施文具で施文するということは、かなり一般的におこなわれていたのではなかろうか。

3 押型文土器共伴の燃糸文土器と繩文土器について

押型文土器共伴の土器群の中で、無文土器を除いて量的にもっとも多かったのは、燃糸文と繩文土器であった。これらは、出土土器全体の14.3%を占め、山形押型文の出土量に匹敵する。そこで、ここでは、出土したすべての燃糸文土器と繩文土器片について観察を加えた結果を述べてみたい。

燃糸文土器は、出土总数83点であり、全体の8.2%をしめる。概して下層からの出土が多かった。器形は、ほとんど単純な砲弾形の尖底深鉢形になり、器壁は厚く、胎土に小石を混入するものなどみうけられるが、内面はよくみがかれ、光沢がある。ごく一部には、器形が砲弾形を成さず丸底に近い平底となり、器壁も薄い燃糸文土器がある。さらに、網目状燃糸文を施文する燃糸文土器は、田村式土器に近い形態を有している。しかし、燃糸文土器のほとんどは、単純な砲弾形の深鉢となり、1つの特徴としてあげることができよう。また、文様は、器壁全体に斜行する燃糸文が施され、口縁部付近には絡条体压痕文を施文して文様帶を形成しているものもある。文様自体は、きめ細かく、ちみつに施されるのが一般的である。さらに、文様を分析してみると、0段燃りが19点、1段燃りが60点、2段燃りが4点となり、1段燃りがもっとも多い。燃糸の燃り方向の識別は、器面が風化して節や条の残存が悪く困難であったが、一部判別し得たものについては、0段燃りの場合、「1」が8点、「r」が4点で、1段燃りの場合、「L」が1点、「R」が11点であった。2段燃りの場合は、まったく識別できなかった。消極的ではあるが、0段燃りで「1」が「r」に比べて多いことは、0段燃りをさらに1段燃りにした場合には燃りの方向が変わるために、1段燃りでは「L」よりも「R」の方が量的に多いことと共通する。1段燃りでは燃り方向を判別しかねる破片が48点もあり、燃り方向の傾向をみいだせなかつたが、「R」の占める割合が高いのではないかと推察される。

次に縄文土器については、全部で 62 点あり、全体の 6.1% の比率をしめる。もっとも中心的な包含層からの出土が多かった。器形は、撚糸文土器とは異なり、外反する口縁に屈折する胴部をもち、平底があるいは幾分あげ底に近い底部へ移行するものを基本とする。一部、ヤトコロ式土器と同様な器形をもつ縄文土器も存在するが、きわめて少数であった。文様は、1 段燃りのいわゆる無節縄文が 4 点、2 段燃りの単節縄文が 51 点、3 段燃りの複節縄文が 4 点、それぞれ識別できた。もっとも多いものは 2 段燃りの単節縄文で、1 段燃りと 3 段燃りは 4 点ずつでともに少量であった。つづいて、縄文原体を判別し得た分についてみると、1 段燃りはすべて「R」であるが、2 段燃りでは「L/R」が 30 点、「R/L」が 16 点となり、「L/R」は「R/L」の約 2 倍に当たる。さらに、3 段燃りでは、「R/L/R」が 2 点だけ識別できて、残り 2 点は判別できなかった。これらの状況から、厳密に文様の施文特徴を規定するには不充分であるが、1 段燃りの「R」から、それを燃って 2 段燃りにした「L/R」、この「L/R」をさらに 3 段燃りにした「R/L/R」の系統が量的に多いという傾向が導き出せよう。

さて、これまで述べてきたように、撚糸文土器と縄文土器とには、文様自体の差異とともに、性格的にもかなり異なっていることがうかがえよう。これらの違いは、それぞれ系譜を異にするためであろうと考えられ、編年的にも先後関係を考慮しなければならない。撚糸文土器は、すでに早水台遺跡などで出土しており、古い時期から出土することが注目される。政所馬渡遺跡では、わりと下層から出土したものが多く、底部が尖底となり、撚糸文土器の中でも、網目状撚糸文は田村式土器の器形をもつため、時期的には、田村式土器の後半からヤトコロ式土器にかけて併出するものと考えられる。

今日、九州西南部における円筒土器の問題（1977 賀川ほか）が新たな論議を呼びつつあるが、これらの撚糸文を共伴する円筒土器は、直行する口縁に、文様構成、内面のみがき、器壁が厚く胎土に小石を混入するなど、九州中南部一帯に分布する円筒土器の性質に、きわめて類似するところがあり、円筒土器の祖型の 1 型式として理解されるべきものであろうか。

また、縄文土器は、ヤトコロ式土器に共伴し、撚糸文土器とは、一部並行するか、幾分新しい時期の所産と考えられよう。器形は、手向山式土器と大略同様であると考えてさしつかえあるまい。しかし、政所馬渡遺跡からも、いわゆる手向山式土器は出土しており、手向山式土器とは、はっきりと区別することができる。もともと、手向山式土器自体に、一部撚糸文や縄文を施している例（1970 片岡）はあるが、器面全体にこれらを施す例は知られていない。しかも、政所馬渡遺跡出土の縄文土器には、口縁部付近や胴部の屈折部に、突帶などは、まったく施されていない、手向山式土器とは、明らかに様相を異に

1970 片岡 肇「手向山式土器の研究」『平安博物館紀要 1』平安博物館

1977 賀川光夫ほか「九州の円筒土器文化」『考古学論叢 4』別府大学考古学研究会

するものである。

大口盆地に分布の中心をもつ手向山式土器は、以前から特殊な形態の押型文土器として知られていたが、その発生は明らかでない。山形押型文とミミズばれ文を併用したり、山形押型文と沈線による幾何学文を併用したり、変化に富む施文方法をもつが、これまでのところ手向山式土器自体は、主体的遺跡を形成しない。大分県地方では、押型文土器を出土する遺跡において、少量の手向山式土器が出土するといった状況が一般的である。しかし、黒山遺跡（1968 賀川・鈴木）では、わりとまとまって出土した。手向山式土器の特殊な器形は、突然発生するものではなく、それよりも古い時期に、何らかの祖型的な器形が存在してもふしきではない。おそらく、政所馬渡遺跡の縄文土器は、手向山式土器の前段階的な土器としての可能性が考えられよう。ただし、文様がまったく異なるため、今後類例をまって、さらに検討しなければならない。縄文自体は、帝釈峠遺跡群（1976 松崎ほか）などで注意されている押型文土器の直上より出土する縄文土器との関係があるのかも知れない。

4 政所式土器の設定

今回の調査において、1960年に発見された政所式土器（巻頭図版）と同様な形態で、文様のパターンもきわめて類似した土器がかなり出土し、単に押型文土器に共伴する土器として片付けられ得なくなってきた。また、器形的には、手向山式土器に類似する縄文土器の一群も明らかとなった。これらの土器群は、押型文土器文化以後に発展する新たな土器文化の要素を内在しており、みのがせない問題である。そこで、今後の縄文文化研究において、これらの土器群が重要視されなければならないことを考え、ここで、あらためて政所式土器の設定を提唱するものである。

政所A式土器

1960年に発見されたいわゆる政所式土器をA式とする。この土器は、貝殻腹縁文を口縁部にもつ深鉢形の尖底土器で、器壁は厚手、地文を施さず、よくみがかれている。

政所B式土器

これは、従来呼称されてきた政所式土器を基本的な形態とするもので、外反する口縁に肉厚の器壁をもち、尖底の底部へ移行する砲弾形の器形を有する。胎土には、一般に砂粒を混入し、1~3mm程度の小石を混入する場合もある。色調は、黄褐色のものと暗褐色から黒褐色を呈するものとがある。文様は特徴的で、器面全体に文様を施すことが多く、口縁

1968 賀川光夫・鈴木重治「黒山遺跡発掘報告」『大分県文化財調査報告 17』大分県教育委員会

1976 松崎寿和ほか「帝釈峠遺跡群」『紀青房

部周辺には、文様帯を形成する。中には、口縁部周辺に文様帯を形成せず、器面全体に地文を施す場合もあるが、同一形式とみなしてさしつかえあるまい。ところが、政所B式土器は、文様のパターンは類似していても、施文具にはいろいろと変化がある。第18図1は、撚糸文の地文に絶条体圧痕文を施している。なお、政所B式土器の編年的位置づけは、田村式土器の後半から、ヤトコロ式土器に並行するものと考えた方が適当であろう。

政所C式土器

政所馬渡遺跡出土の撚糸文土器の大部分は、政所B式に当たるのに対して、縄文土器の大部分は、政所C式土器に相当する。器形は、口縁部が外反し、胴部で屈折して、平底か幾分あげ底気味の底部へ移行するものを基本とする。器壁は、政所B式土器にくらべて薄く、胎土もよい。色調は、黄褐色から赤褐色を呈するものと、黒褐色に近いものとがある。文様はすべて縄文で、1段撚りから3段撚りまでの縄文原体が使用されている。第18図2と3は、それぞれ3段撚りと2段撚りの縄文を、一定間隔をおいて施文したものである。第18図4と6は、それぞれ全面に2段撚りの縄文と1段撚りの縄文を施文したもので、文様は、いくらか変化に富む。なお、無文土器の中には、政所C式土器に類似する器形（第20図3）が存在する。政所C式土器の時期は、縄文土器のページで述べたとおり、ヤトコロ式土器に並行するものと考えられよう。

5 政所馬渡遺跡出土の石器と石材について

政所馬渡遺跡から出土した石器は、第1表にしめすとおりで、その種類は豊富であったが、数量的には少なかった。しかし、今回の調査では、石器だけではなく、すべての剝片や碎片も採集し、検討を加えた。石材と剝片・碎片の数量および百分率は第3表にしめす。これについては、後で述べたい。

まず、石器の種類について概観すると、剝片を利用した石器としては、石鎌や尖頭形石器・彫刻刀様石器・削器などがあげられよう。礫石器または礫核石器としては、石斧や礫器・敲石・磨石などがあった。

石器の中でもっとも数量的に多かったのは、石鎌であり、出土石器全体の36.0%をしめている。石質は、硅岩と黒曜石がほとんどで、黒曜石は、さらに石質に変化があり、多くの原産地から搬入されたものと考えられる。石鎌の形態は、長2等辺3角鎌から鉢形鎌、小形の3角鎌までかなり変化に富んでおり、押型文土器の古い形式と共に伴する長2等辺3角鎌や鉢形鎌は、概して少量であった。政所馬渡遺跡のように、新しい時期の押型文土器と共に伴する石鎌としては、側刃が直線的で整った形態のものや、断面が厚手でやや粗雑な作りのもの、小形化したものなどに変化していることがうかがえよう。石鎌の中でも特異なものとしては半磨製石鎌があった。半磨製石鎌は、中部・関東地方の遺跡にも分布するが、とくに西北九州地方には濃密な分布をしめしている。政所馬渡遺跡出土の半磨製石鎌

は、西北九州地方の半磨製石器ときわめて類似するものであり、何らかの関係が想起されるのである。

石器のほかに、尖頭形石器も注目に値しよう。尖頭形石器は、瀬戸内地方の押型文土器出土遺跡からも知られ、西北九州地方にも、多くの尖頭形石器を出土する遺跡が、分布している。東九州地方では、尖頭形石器の存在は、あまり知られておらず、田村遺跡（1960 賀川・羽田野）で1点出土しているのみである。政所馬渡遺跡の尖頭形石器は、どの時期の押型文土器に伴うのかはっきりしないが、やはり、西北九州の影響を考えなければならぬであろう。

押型文土器に共伴する石器のうちでも、定形石器の種類は、あまり多くはない。縄文時代に普通にみられるつまみのある石匙にかわる機能を有するものとして、縦はぎあるいは横はぎの削器や剝片類の存在が注目される。これは、早水台遺跡や稻荷山遺跡（1970 橋ほか）すでに指摘されていることで、政所馬渡遺跡でも同様な状況であったということができよう。削器は、縦はぎ剝片の1側辺に、調整剝離を加えて刃部形成をおこなったものが多く、中には、横はぎの剝片を使用したとみられる削器も存在する。削器と2次加工剝片や使用痕剝片とは、調整の状況および刃部形成によって区分したが、もとより、基本的な用途の差は、あまりないものと考えられる。剝片の代表的な例として、2次加工剝片と使用痕剝片とを図示したが、2次加工剝片は、剝片の一部に調整加工が施されたものを分離しただけである。剝片の概要を知ることができるのは、使用痕剝片としてあげたもので、縦はぎと横はぎの剝片からなる。縦はぎと横はぎの剝離技術には、特別な違いは認められず、ともに、定形的な剝片がはぎとられていることが注目される。横にはいだ場合には、翼状の剝片となり、中には、連続的にはぎとられたとみられる剝片も存在する。この特徴的な横はぎ剝片は、政所馬渡遺跡出土剝片の特色といえよう。これらの縦はぎあるいは横はぎの剝片は、2次加工剝片や削器に加工され、剝片そのものも、刃器として使用されたものと考えられる。定形石器の少ない押型文土器の時期に、以上のような剝片類が多数をしめるということは、この時期の普遍的なあり方として認識されるべきものであろう。

その他、押型文土器に共伴する定形石器として、数は少ないが石斧や礫器があり、敲石や磨石もその組合せの中では、重要な位置をしめる。ただ、稻荷山遺跡で多数出土した凹石は、1点も検出することができなかった。

以上、政所馬渡遺跡の石器の組合せ内容を検討してきたが、これを用途別に区分すると、飛ばすかあるいは投げる道具として、石器や尖頭形石器があり、削ったり、切ったり、搔いたりする道具としては、彫刻刀様石器・削器・2次加工剝片などがあげられる。また、斬ち切ったり、たたいたり、つぶしたりする道具として、石斧や礫器・敲石・磨石を當て

1960 賀川光夫・羽田野一郎「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」朝地町教育委員会

1970 橋 昌信ほか「稻荷山遺跡緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告 20, 21』大分県教育委員会

することができる。

次に、石材について検討してみたい。政所馬渡遺跡出土の石器石材は、器種によってある程度齊一性があり、石鏃では、硅岩がもっと多く、ついで黒曜石となる。尖頭形石器にはサヌカイトをもちい、削器・2次加工剥片および使用痕剥片では、硅岩がもっと多く、流紋岩・頁岩・黒曜石などがいくらか使用されている。とくに、剥片石器類では硅岩が多く、ついで、黒曜石が使用石材の主体となる。ところが、礫石器類になると、圧倒的に安山岩が使用されることになる。石斧は、硬質で粒子の細かい砂岩が利用され、礫器の一部には、流紋岩を使用したものもあったが、多くの礫器や敲石・磨石は、すべて安山岩であった。礫器のように、鈍器として使用するものや、敲石・磨石のように、かたいものをつぶしたり、すったりするものには、剝離性に富む石材よりも、いくらか粗粒で粘りのある石材の方が適していたのであろう。

さらに、石材を剥片・碎片についてみると(第3表)と、その石材別の頻度は、石器の石材数とほぼ比例する。当然のことながら、硅岩がもっと多く、全体の28.2%をしめる。次に黒曜石で、19.1%であった。安山岩も16.5%とかなり多かったが、これは、安山岩系の石材をすべて一括したためである。サヌカイトもわりと多く、反対に、流紋岩が少なかつた。

石材の中でも、剥片石器に使用される剝離性に富む石材は、需要が高く、手ごろな原石で移動が可能なため、石材の分布の問題についてしばしば論じられてきた。(1960 複、1970 橋ほか)。礫石器に使用されている石材は、遺跡周辺から採集されるものが多いが、剥片石器の石材は、かなりの移動が考えられる。

政所馬渡遺跡でも、硅岩については区別できなかったが、黒曜石については、少なくとも6種類に区別できた。それは、次のとおりである。

- ① 白斑まじりでにぶい光沢のあるもの(従来阿蘇系と呼称するもの)
- ② 漆黒色のもの(肥岳産)
- ③ 灰白色のもの(姫島産)
- ④ 灰白色の脈のはいるもの
- ⑤ 黒色で比重の軽いもの(溶結凝灰岩に含まれるものか)
- ⑥ 灰色のもの(長崎周辺産)

もっとも多いものは①で、33.3%をしめ、②も27.7%で、多い方であった。姫島産の黒曜石は、23.6%と3番目に多く、⑤の11.1%以外④と⑥は、ごく少量であった。

サヌカイトも次の3種類に区別できる。もっとも数が多かったのは、②である。

- ① 黒色できめ細かく、風化面が青灰色のもの

1960 複 昭志「石器材料の石質からみた需給圈」『考古学研究7-1』考古学研究会

1970 橋 昌信ほか「福荷山遺跡緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告20, 21』大分県教育委員会

- ② 粒子があらく、風化面が褐色のもの
- ③ 白斑まじりで粗粒、しま模様がはいっているもの。

これらは、おそらく原産地が異なっているものと考えられる。

現在のところ、すべての石材の原産地を明らかにすることはできないが、西北九州や姫島から搬入された石材の存在は、石材の分布と選択性の問題において、きわめて重要である。しかし、量的な問題としての硅岩の存在もみのがせない。稻荷山遺跡では、姫島に産出する角閃質安山岩が多量にもちいられ、硅岩の使用頻度は低かったが、早水台遺跡においては、主体をしめるものであった。早水台遺跡と時期的にも近い菅無田遺跡でも、大多数の石材は硅岩であった。硅岩は、押型文土器出土遺跡において普遍的にみられる石材で、硅岩を使用する頻度は、かなり高かったものと考えられる。ただ、押型文土器の原初の時期や、政所馬渡遺跡のように新しい押型文土器の時期には、いくらか量的に減少する。もちろん、地域的影響によってもある程度量の多寡を考えなければならない。

政所馬渡遺跡では、一部、西北九州や姫島など外部から石材がもちこまれているものの、多くの石材は、遺跡周辺にその原産地を求めることができよう。姫島周辺の押型文土器出土遺跡では、他の石材も使用されてるが、姫島産の原石がおもに使用される場合が多い。このように、東九州地方の押型文土器文化においては、遺跡周辺の石材がおもに使用され、一部、外部から何らかの形で原石が搬入されるという1つのパターンを想定することができる。

〔細石器文化関係〕

6 政所馬渡遺跡における細石器文化について

萩地方では、これまでに、地元の研究者によって、後期旧石器文化期に属すると考えられる遺物が多少なりとも採集されており、その実体解明に興味がもたれていた。しかし、阿蘇東方の火山灰が厚く堆積した場所では、特別な機会がない限り、その確認は、なかなか困難であった。今回、はからずも、1個の細石核の採集から、細石器文化の追求という新たな問題が生じ、もっとも包含が良好と考えられるG-6区を選定し、グリッドの半分(2×4m)を徹底的に掘りさげることになった。その結果、削平面より約2m下の第Ⅳ層で、確実な細石器の文化層を確認し得たのである。

政所馬渡遺跡は、調査終了後、予定どおり地さげ工事が続行されるようになっており、地さげ工事は、押型文土器包含層を完全に消滅してしまう可能性があったが、さいわいにも、細石器の文化包含層は、地表よりかなり深部にあるため、保存されることになる。そこで、G-6区以外では、できるだけ包含層の保存に努め、精査を後日に譲ることにした。ここでは、G-6区の8m²から得られた資料をもとに、細石器および土器の問題を中心に、2,3かんたんにまとめて、今後の参考としたい。

九州地方において、細石刃・細石核がまず注意されたのは、唐津周辺の玄武岩台地に所

在する遺跡から出土するものであった。その後、長崎県吉井町福井洞穴の調査を契機として、西北九州には、細石刃・細石核を中心とした遺跡が、集中的に存在することが明らかになった。しかも、細石刃・細石核に土器を伴う事例は、土器の発生の問題として多くの関心を集めることになった。今日では、九州全域に細石器文化の存在が明らかになり、その編年的・形態的研究も進展の度をましている。

ところで、九州を中心とした細石核の分類については、すでに數名の先駆によって試みられ、ほぼ編年の位置づけも確立されている。大局的には、半円錐形→舟底形という形態的・時間的変遷が承認されているようである。また、野岳遺跡（1971 鈴木）では、角柱状あるいは角錐状の細石核が主体をしめ、同様な細石核は、九州一円に分布範囲が認められると指摘されている。

政所馬渡遺跡出土の細石核は、わずか3点ではあるが、すべて形態的に異なっていた。黒曜石製のものは、西北九州にみるような舟底形であり、形態的にもきわめて類似しているが、他は角柱状と3角錐状を呈している。黒曜石製の細石核は、層位的出土でないため、他の細石核と共に伴するのか不明である。野岳遺跡で指摘された角柱（錐）状の細石核は、編年の位置を古く設定されているが、西北九州以外では、意外に新しい時期まで、角柱（錐）状の細石核が残存している。ただし、形態的に不規則になったり、小形化していくことは、充分考慮しなければならない。政所馬渡遺跡では、これらの細石核に土器を伴っていたのである。

細石刃・細石核に土器が共伴することは、福井洞穴（1965 鈴木・芹沢）ではじめて注目されて以来、今日では、数遺跡でその事実が確かめられている。たとえば、福井洞穴のほかに泉福寺洞穴（1973 麻生、1975 麻生・白石）、上場遺跡（1967 池水）などは、その代表的な遺跡としてあげることができる。そのほかにも、岩土原遺跡（1973 鈴木）や石飛分校遺跡（1968 池水）などでは、その可能性の一端をうかがわせるような出土状況が、みとめられている。泉福寺洞穴では、豆粒文土器から無文土器まで、細石核の共伴が明らかとなった。今後とも、細石刃・細石核に土器を共伴する例は、増加するものと考えられるが、現在までの分布は、ほとんど九州西部に限られていた。しかし、政所馬渡遺跡では、第VII層から2点の土器片の出土をみたのである。細石刃・細石核と土器とが共伴して発見されたのは

1965 鈴木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰」『考古学集刊3-3』明治大学考古学研究室

1967 池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊3-4』明治大学考古学研究室

1968 池水寛治「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル21』ニューサイエンス社

1971 鈴木忠司「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化23-8』古代学協会

1973 麻生 優「泉福寺洞穴の第4次調査」『考古学ジャーナル88』ニューサイエンス社

1973 鈴木重治「宮崎県岩土原遺跡の調査」『石器時代10』石器時代研究会

1975 麻生 優・白石浩之「泉福寺洞穴の第6次調査」『考古学ジャーナル116』ニューサイエンス社

大分県でははじめてであり、このことで、九州全域に、細石刃・細石核に土器が伴出するという事実が確められるにいたった。ざんねんながら、無文土器であるため、編年の位置づけを明確にすることはできない。共伴する細石核の形態から、上場遺跡第II層に類似が求められるため、爪形文土器の可能性もある。しかし、泉福寺洞穴では、無文土器と細石刃・細石核が伴出しており、にわかには断定できない。みとおしとしては、爪形文土器の時期を考えている。

政所馬渡遺跡出土の細石核は、黒曜石使用のものと瑪瑙・珪化木使用のものと石材の上で2系統に分類することができる。G-6区から発見されたものは、すべて瑪瑙・珪化木を使用したものであった。包含層をすべて水洗して碎片などを徹底的に採集したが、黒曜石のそれらしいものは、1点も確認できなかった。したがって、黒曜石を使用した細石核と瑪瑙を中心とした細石核とでは、その出土地点が幾分異なる可能性がある。しかも、黒曜石は、良質の漆黒色を呈したもので、表面的観察では、腰岳に産出するものと同一である。もし、腰岳産のものであれば、何らかの形でこの遺跡に持ち込まれたものとなる。このことは、第VII層出土の細石核が、瑪瑙・珪化木という素材の特異性に対して問題である。ただ、時期的な差はあまりないものと考える。

九州地方の細石核に使用されている石材は、じつに変化に富んでいる。中でも1番の割合をしめているのが、黒曜石であり、各地の産出場所によって使用頻度が異なっている。西北九州では、福井洞穴の良質の腰岳産黒曜石に対して、速目遺跡では乳白色をした黒曜石、野岳遺跡では安山岩に似た黒曜石を使用している。佐賀・福岡周辺では、腰岳産の黒曜石が多い。黒曜石のほかに、船野遺跡(1975 橋)では流紋岩、上場遺跡では日東遺跡に産出するような不純物の多くまじった黒曜石などが使用されている。政所馬渡遺跡では、瑪瑙・珪化木が使用されており、新たな石材の登場を考慮しなければならない。このような使用石材の違いは、とうぜん、時期的な差をあらわしているものであろうが、大部分は、地域性に根ざした結果であろうと思われる。今後の資料の増加をまって、時期差および地域差をより明確にしていかなければならない。ともあれ、石材は違っていても、必要とする細石刃をはぎとることが可能な性質をそなえていれば、どのような石材でもよいことになる。このことは、普遍的な細石器文化の下にあって、文化の構造を理解するための重要な要素となるだろう。

ここで、細石核素材について、もう少しふれておきたい。政所馬渡遺跡からも、2点の細石核素材が出土している。黒曜石製の細石核素材は、こぶし大の円礫または亜角礫からはぎとられた剝片に、半両面加工を施したものである。ただし、上端には、はぎとられたときの打面をそのまま残している。この素材の長軸方向に、さらに打面を作り出せば、すでに出土している黒曜石の細石核と、まったく同一となる。

佐賀県の原遺跡（1971 杉原・戸沢）では、舟底形細石核とともに、削片の存在が指摘された。また、泉福寺洞穴の調査では、多数の細石核素材と削片が発見されている。これらによって、西海技法の再検討が望まれているが、とくに湧別技法の登場は、九州の細石器文化研究に、新たな段階を画するものと期待される。たしかに西北九州には、西海技法にしろ、湧別技法にしろ、両面加工品から細石核を作成したことは、一部に認められていた。ただし、すべてこれらに包括されるものではなく、小円錐の一端に打撃を加えて、それを打面なり側面に使用した細石核もあった。西北九州以外では、不定形な原材をもちいた細石核も多数認められる。これらは、同一時期であっても、使用石材の制約からくる当然の帰結であると思われる。こぶし大くらいの原材しか手にはいらない場合は、大きさはぎとった剥片から、両面あるいは半両面加工品を作り、それをもとに、細石核として使用した方がより合理的である。西北九州以外では、両面加工品をあらかじめ製作して細石核に使用した確実な例は、発見されていないようであるから、別な技術体系のもとにあった可能性も考慮しなければならない。この点において、両面加工を施した細石核素材が、遠く東九州の地で発見されたことは、注意を要しよう。

そのほか、政所馬渡遺跡では、第VII層同一平面内で、細石刃3点と剝片などが得られている。これらの広がりは、この遺跡の性格を決定づけるのに、重要な意味をもってくる。細石刃は、側縁の不規則なもの、全体的に湾曲しているもの、あるいは断面が3角形で厚すぎるものなど、使用に適さないものが残存していた。ほかは、それぞれの使用目的のため、遺跡外に運びだされたものであろう。しかし、これらの細石刃・細石核あるいは細石核素材は、ともに、有機的関連の中でとらえることができた。

今後派生する問題として、同様な遺跡の探査と分析および群としての遺跡時間のまとまりなど、検討していくなければならない。それとともに、使用石材の探索も今後の課題といえよう。

使用石材の原産地同定という問題については、古文化財研究会（代表・渡辺直經氏）で、京都大学原子炉実験所の東村信武氏によって、西日本一帯のサヌカイト原産地と遺跡の同定がおこなわれ、加えて黒曜石にもおよぶことになった。原稿完成時に九州地区全般の検査結果もとどけられた。また、岡山理科大学の三宅邦男氏は、この研究会において、別の理科学的方法で分析を実施されており、その成果発表がまたれている。

本学坂田邦洋助教授は九州全域の黒曜石原産地の検査を顕微鏡による肉眼同定で実施し、その全体の特徴を広く把握している。この研究を含めて、石器・石材の同定が明らかにされるものとみられる。筆者は、縄文時代にあって石材の選択は生活をささえる重要な手段であると考えるので、この辺の研究成果を期待してやまないところである。

1971 杉原莊介・戸沢充則「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊4-4』明治大学考古学研究室

文様	区・層			D-5			E-5			F-5			G, H-3,4			G-5			G-6			小計			一括 採集	合計	%
	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V
山形押型文	-	-	-	-	1	4	3	10	3	3	16	6	3	23	12	8	11	10	17	61	35	30	143	14.2			
梢円押型文	-	-	-	-	2	16	11	27	6	16	34	10	9	66	9	10	5	21	46	134	62	92	334	33.1			
格子目押型文	-	-	-	-	-	-	2	3	-	1	3	1	-	5	1	-	2	-	3	13	2	9	27	2.7			
燃糸文	-	-	-	-	2	3	-	4	12	1	9	1	1	9	4	2	-	17	4	24	37	18	83	8.2			
繩文	-	-	-	-	-	2	1	1	-	6	8	2	2	15	5	3	2	2	12	26	10	13	62	6.1			
条痕文	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	2	-	-	4	3	-	10	17	1.7			
沈線文	-	-	-	-	-	1	-	2	1	-	3	-	1	3	-	1	1	4	2	9	7	4	21	2.0			
刻目貼付文	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2	-	-	-	-	-	3	1	1	5	0.5				
刺突文(押引文)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	0.2			
塞ノ神(式)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	2	6	4	3	7	4	3	17	1.7			
手向山(式)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	6	7	0.7			
無文	-	-	-	-	3	18	13	25	20	16	16	10	12	44	8	10	12	12	51	100	68	73	292	28.9			
小計	-	-	-	-	9	44	31	72	42	44	90	32	30	170	39	38	39	70	143	380	227						
合計	-				53		145			166			239		147		750		260	1010	100.0						

第2表 政所馬渡遺跡出土土器文様別頻度表

石材	区・層	D-5			E-5			F-5			G, H-3,4			G-5			G-6			小計			一括集	合計	%
		III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V	III	IV	V			
石 材	硅 岩	2	-	-	8	-	-	2	5	2	3	5	4	2	7	-	2	1	4	9	18	20	60	107	28.2
	黑曜石	-	-	-	4	-	-	1	1	-	3	6	1	3	7	-	2	1	4	9	15	9	39	72	19.1
	サヌカイト	1	-	-	2	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	4	-	2	5	2	5	42	54	14.4
	安山岩(系)	-	-	-	8	-	-	3	8	5	2	1	5	1	2	1	-	1	2	6	12	21	23	62	16.5
	流紋岩	-	-	-	3	-	-	1	3	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	3	6	15	25	6.6
	頁岩	2	-	-	3	-	-	2	-	-	1	1	-	2	-	1	-	1	1	5	7	7	20	5.3	
	泥岩	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	2	5	1.3
	砂岩(硬)	1	-	-	4	-	-	1	3	1	1	1	-	-	-	1	-	1	-	2	5	8	15	30	8.0
	砂岩(粗粒) (輕石)	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	0.3
	小計	6	-	-	33	-	-	7	21	14	11	16	11	7	19	2	9	4	14	34	60	80			
合計		6			33			42			38			28			27			174			203	377	100.0

第3表 政所馬渡遺跡出土剝片・碎片石材別頻度表

第5章 押型文土器の編年 — 繩文早期から前期への系譜 —

1 押型文土器の研究と<早水台式土器>

縄文早期の土器に、回転摺をもつて押捺施文をおこなう<押型文土器>がある。この土器を最初に注目し、<梢円押型文土器>という名称を付した論文（1932 八幡）を公表したのは、八幡一郎先生である。そうして、現在、中部山地の押型文土器文化研究について、膨大な論考（1974, 1978 八幡）を展開されつつある。

西日本での押型文土器に注目されたのは、小林久雄氏で、熊本県阿高および御領貝塚などの調査（1934, 1939 小林）によるものである。この押型文土器は、しばしば、縄文後期の御領式土器と共に伴することがあって、その編年に問題を提起した。

1945年、太平洋戦争終結後は、遺跡の調査と方法に、戦前とは違った点がみられるようになった。広い範囲の発掘と、出土遺物の数値によって、遺跡・遺物を観察し、研究しようとするこころみも、その1つである。

大分県速見郡日出町の早水台遺跡は、そうした問題に関しての絶好の対象であった。1953年、多数の研究者が集まり、押型文土器を単純に出土するこの遺跡の調査（1955, 1965 八幡・賀川）となった。遺跡の全体を理解できるほどの広範囲に発掘がおこなわれ、西日本初の住居跡が発見され、また、土器や石器の分類がすすめられた。この調査の中で、旧石器に類似する疊器（Chopper, Chopping-tool, Hand-Axe）が出土し、その疑問（1962 角田）から、遺跡下層の探索がおこなわれた。はたして、ローム層下部、安山岩角疊層上部から、石英質の石器群が検出（1965 芹沢）されるなど、前期旧石器文化について、新たな問題を提起するにいたった。

さて、早水台遺跡発見の押型文土器は、層位の観察・土器形式の違い・文様の変化・石

1932 八幡一郎「梢円押型文」「考古学3-6」東京考古学会

1934 小林久雄「所謂梢円押型文について」「考古学5-6」東京考古学会

1939 小林久雄「九州の繩文土器」「人類学先史学講座11」雄山閣

1955 八幡一郎・賀川光夫「早水台」「大分県文化財調査報告3」大分県教育委員会

1962 角田文衛「日本文化的源流」「古代文化8-3」古代学協会

1965 芹沢長介「大分県早水台における前期旧石器の研究」「日本文化研究所研究紀要」東北大学

1965 八幡一郎・賀川光夫ほか「続早水台」「大分県文化財調査報告12」大分県教育委員会

1974 八幡一郎「日本中部山地における縄文早期文化の研究（上）」平凡社

1978 八幡一郎「日本中部山地における縄文早期文化の研究（中）」平凡社

雖ほか石器の共伴関係などから、2形式に分類することができた。山形文や楕円文の細かな文様を施し、口縁部裏面に限って刻み目や原体条痕文が施される尖底深鉢形土器の一群と、いま1つは、山形文や楕円文が大きく縱走して施されるほか、裏面には口縁部にむかって斜めに走行する大きな原体条痕文が施され、器壁は比較的厚手で、尖底部は乳房状に整えられている一群の、2つである。前者を早水台I式、後者を早水台II式と称する。早水台I式は、瀬戸内海一帯の押型文土器と、細部まで類似することが明らかであり、早水台II式は、和歌山県高山寺貝塚（1939 浦）出土の土器と一致している。

早水台I式およびII式土器に共伴する石器には、明確な形態的違いがみとめられる。前者は、2等辺3角形の長手の形態をしたものが多く、後者は、鐵形鐵といわれる短形で基部のえぐり込みが大きく深いものが多い。前者には、細石鐵の混入（1970 賀川）があった。石器の材質は、黒曜石・珪岩・サヌカイトなどであるが、姫島産の黒曜石が検出されていないことは、留意しなければならない。また、とくに注目されるのは、前述のように、各種の器皿が、I、II式土器群に混在していたことである。

押型文土器のほかに、無文厚手の尖底深鉢形土器があり、I、II式の押型文土器に共伴して出土する。この無文土器は、I式土器との共伴が数の上で多量であった。無文土器は、押型文土器発生以前の尖底深鉢形土器で、早水台I式土器に、その残留が共伴出土することは理解できる。このことは、愛媛県上黒岩洞穴（1967 江坂）や、大分県川原田洞穴（1964 岩尾・酒匂、1967 賀川）などの調査で、明らかとなった。無文土器から押型文土器への移行は、大分県成仏岩陰（1972 坂田）で検討され、無文土器そのものの層位的研究は、大分県二日市洞穴（1980 橋）において整理された。

2 田村式土器の確認

早水台II式の土器は、厚手の尖底深鉢形土器である。文様は、主として楕円の連続文であり、その楕円形は大粒である。口縁部裏面には、施文原体である棒状工具を擦過して、原体条痕文が施されている。このような土器形式は、前述のように、浦宏氏によって、和歌山県高山寺貝塚の調査において指摘されているところである。

1939 浦 宏「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」「考古学 10・7」東京考古学会

1964 岩尾松実・酒匂義明「速見郡山香町大学広瀬川田原洞穴の調査」「大分県地方史研究会

1967 江坂輝弥「上黒岩洞穴」「日本の洞穴遺跡」日本考古学協会

1967 賀川光夫「川原田洞穴」「日本の洞穴遺跡」日本考古学協会

1970 賀川光夫「讃文化の起源と押捺文土器の発達」「史学論叢 5」別府大学史学研究会

1972 坂田邦洋「成仏岩陰遺跡の調査」「国東文化財調査報告書」国東町教育委員会

1980 橋 昌信「大分県二日市洞穴遺跡発掘調査報告書」別府大学付属博物館

大分県大野郡朝地町所在の田村遺跡は、1958年に調査（1960 賀川ほか）された押型文土器の包含層である。ここでは、土層の状態に注目すべき点があり、褐色土層の下に、赤色荒粒子土壌（アカホヤのことを、当時このように呼んでいた。）が厚く堆積（1971 賀川）し、その下部に、黒色土層の堆積をみた。この黒色土層は、早期の土器を単純に出土する層（今日は、押型文土器のほか、塞ノ神式など円筒系土器の出土がある。）であった。土器は、早水台II式が主体で、梢円形の大粒な文様を中心とし、綴走して施文されていた。厚手に焼成された土器の文様は、梢円がおもで、ついで山形文がみられた。文様は、早水台I式に比較すると、大形に終始していた。器壁は厚手で、口縁部は外反し、乳房状尖底が特徴とされる。口縁部裏面には、施文原体を擦過移行して、原体条痕文を施している。この土器に、無文土器が共伴するが、その数は少ない。

石器のうち注目されたのは、柳葉状の尖頭形石器で、両面が加工されており縁辺部の調整もよく、長さ6cmほどの石器である。石器は珪岩・サヌカイトの類が多く、黒曜石はみられなかった。石器の形態は、鋸形が大部分で、長手の2等辺3角形をしたものはごく少数であり、やや偏平性をおび、大形になっている。このように、土器のほか、石器からみても、早水台I式とは違い、II式に相当するところが多い。その上、田村遺跡全体の土器形式が単純性をもっていることもあって、田村式土器という名称をもちいることにした。この段階で、押型文土器の編年の上で、早水台式（同I式のみ）、田村式（早水台II式）というそれぞれの地名を付した名称で位置づけることにしたのは、周知のとおりである。

3 ヤトコロ式土器

阿蘇山は、広大な外輪山をもっているが、とくにその東側には、火山灰が幾重にも堆積してできた平坦な高原がひろがっている。大野川上流の各支流は、この高原を浸食して、東に舌状にのびるいくつかの台地をつくった。ここに、有望な遺跡が残されているのである。その1つに、竹田市大字ヤトコロ所在の遺跡がある。

ヤトコロ遺跡においては、住居跡の一部が検出された。この遺跡上層のアカホヤ（赤色荒粒子土壌）が、残された柱の穴につまっていたことから、アカホヤの下層である黒色土の最上層に生活面があったことが判明した。これは、アカホヤの堆積直前の縄文早期末葉における文化層をしめしており、塞ノ神式土器のほかに、円筒土器の層位との関係を注意する必要がおこった。したがって、アカホヤ下層に堆積している黒色土層は、縄文早期の単純層ではあるが、円筒土器を含めて、層序的検討を必要とするという問題が残されている。ここに、放射性炭素（C¹⁴）測定数値をあげて、それを層位と合わせて考えたい。いわゆるヤ

1960 賀川光夫・羽田野一郎「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告書」朝地町教育委員会

1971 賀川光夫「縄文文化の諸問題—黄色火山灰の堆積—」『大分県の考古学』吉川弘文館

押型文土器の編年

縄文前期

<轟式>	5680±130 ^y B.P	莊貝塚
	5950±210 ^y B.P	上畠貝塚

アカホヤの堆積 Tephrochronological Key Bed

6050^yB.P ~ 6400^yB.P

円筒系土器

<塞ノ神式>	6360±90 ^y B.P	
	6690±50 ^y B.P	粉IVb層
<吉田式>	6360±120 ^y B.P	跡江上層
縄文早期		
<ヤトコロ式>	7320±130 ^y B.P	跡江貝塚下層
<田村式>	7730±50 ^y B.P	粉Va層
	7820±115 ^y B.P	川原田IV層
<早水台式>	8200±150 ^y B.P	成仏V層
	8400±350 ^y B.P	黄島貝塚
	8800±200 ^y B.P	川原田Ⅵ層

トコロ式土器では、外反する口縁をもち、押型文が粗大化（山形・楕円）し、縦走施文が顕著となる。器壁はやや厚手化し、底部は平底となり、押型文土器の終末、円筒土器への移行の時期が考えられる。

田村式について、ヤトコロ式土器の問題を検討するためには、1976年に調査を実施した大分県直入郡荻町政所馬渡遺跡（本報告書）の土器が注目される。1960年、道路工事中に採集された貝殻腹縁文の尖底深鉢形土器（1960 賀川）が問題となり、政所式という名称を付した。その後、その出土地点と思われる場所が、土地改良事業に含まれることになったため、調査がおこなわれた。層位はヤトコロ遺跡と同じであるが、土器の種類は、押型文土器のみではなく、燃糸文・縄文の共伴がきわめて多くみられた。

押型文土器は、大形の粒からなる楕円文、縦走する山形文が主体で、これに近い数の格子目文が混在していた。口縁部がやや外反する傾向は、田村・ヤトコロ遺跡と同じであるが、やや円筒状の深鉢形となり、底部が、尖底のものと、小さいながら平底をなすものと

が半ばしていた。政所馬渡遺跡の特徴は、前述のように、撫糸文土器が多数をしめることで、前期前葉にみられる繩文の盛行に先立つものと考えられる。

さて、いわゆる「政所式土器」として一般に知られている貝殻腹縁文の尖底深鉢形土器は、政所馬渡遺跡出土土器の大部分が、いわゆるヤトコロ式の押型文土器である中では、いわば特異な存在である。しかし、**「政所式土器」**という名称を、同遺跡の撫糸文・繩文を施す土器をふくめて残しておくことは、将来の研究上必要であろう。なお、ヤトコロ式土器が、押型文のみの分類であったのに対して、政所馬渡遺跡においては、ほかの遺物と共に伴するため、ヤトコロ式を検討するよい資料といえる。

4 九州における繩文早期の編年

九州の押型文土器を、かって、大別して3つの形式（川原田洞穴出土の押型文ペルト施文を1形式とすると4つの形式）に編年（1957 賀川）した。その後の調査研究で、多数の資料が報告され、細部にわたって検討されているが、それらの研究を含めた結果からみて、この編年に大きな訂正を加える必要はないと考えている。しかし、押型文土器の盛行期の前後、すなわち、無文土器から押型文土器への移行の段階と、押型文土器から円筒土器への推移（尖底から平底への過程）については、いくつかの大きく新しい問題が、提起されつつある。

長崎県福井洞穴（1967 芹沢）や、上黒岩洞穴出土の隆線文土器に、1万2千年前という古きの測定値が出されたときは、放射性炭素（C¹⁴）の信憑性が疑問視されたほどであった。放射性炭素（C¹⁴）の測定は、その後、年代判定に秩序ある数値をあらわし、現在では、科学的方法としてはもっとも信頼され、一般にもちいられている。

さて、西日本において、尖底無文土器が、押型文土器の先駆的なものとして出土したのは、1960年前後であった。そうして、押型文土器との層位的関係を明確にしたのは、1962年の上黒岩洞穴や、1963年の川原田洞穴の調査であった。この調査では、押型文土器を包含する文化層の下部から、層を異にして無文土器が発見され、それらを、放射性炭素（C¹⁴）で測定すると、押型文土器との間に、明確な時間的推移がみられた。

無文土器文化の発達と、押型文土器への移行についての研究は、前述の成仏岩陰の調査において、細部にわたる検討が加えられ、また、放射性炭素（C¹⁴）による層位年代の測定がおこなわれた。それによると、この遺跡の無文土器は、V₂層で 10240 ± 200 B.P. で、上黒岩洞穴IV層の 10085 ± 320 B.P. とほぼ一致した年代が得られている。この無文土器を、さらに詳細に分類したのは、二日市洞穴の層位的観察であった。無文土器は、平底から丸底へと、年代の下降にしたがって変化することが明らかとなり、条痕文を施す平底や無文

1957 賀川光夫「押型文土器共伴資料」『九州考古学2』九州考古学会

1967 芹沢長介「福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会

の丸底から、無文尖底へと推移し、押型文文化へと移行することがみとめられた。この二日市洞穴文化層の年代測定は、熱ルミネッセンス法を応用しておこなわれているので、いずれ詳報が得られるはずである。

無文土器の研究の進展は、土器の起源についての編年的問題を整理する方法に、課題を提起したことになる。縄文土器文化の頂上は、福井洞穴の隆線文土器あるいは長崎県泉福寺洞穴(1980 麻生ほか)の豆粒文土器の発見などによって、きわめられつつある。芹沢長介教授によれば、福井洞穴の土層の絶対年代は、第III層(隆線文)が 12700 ± 950 B.P.、第II層(爪形文)が 12400 ± 350 B.P. であるという。これらの文化層から、二日市洞穴の第9おより第8文化層の条痕文平底、第7文化層の無文丸底(成仏V₂層、 10240 ± 200 B.P.に相当)、第6文化層の無文尖底(川原田XII層に相当)、第5および第4(F)文化層の無文尖底への、いわゆる無文土器文化への推移は、隆線文土器から押型文土器までの時間帯を、充分にうめつくしたものと考えることができる。また、二日市洞穴の第4(上)文化層の無文尖底土器は、早水台式押型文文化の前段的要素をもつていていることを証明することができた。

ここにおいて、豆粒文あるいは隆線文土器からはじまる九州の縄文土器は、その押型文土器にいたるまでの編年が確立したことになる。これらをまとめると、次のようになる。

九州における縄文早期土器の編年

早水台式	押型文尖底	8800 ± 200 B.P.
川原田洞穴VII層	押型文尖底	
二日市第4(上)文化層	無文尖底	
二日市第4(F)文化層	無文尖底	
二日市第5文化層	無文尖底	
二日市第6文化層	無文尖底	
川原田XII層		
二日市第7文化層 成仏V ₂ 層	無文丸底 無文平底～丸底	10240 ± 200 B.P.
二日市第8文化層	条痕文平底～丸底	
二日市第9文化層	条痕文平底～丸底	
門田遺跡	爪形文	
福井第II層	爪形文	12400 ± 350 B.P.
福井第III層	隆線文	12700 ± 950 B.P.
泉福寺	豆粒文	?

1980 麻生 優ほか「特集 泉福寺洞穴」『考古学ジャーナル 172』ニューサイエンス社

5 円筒土器と政所馬渡遺跡出土の土器

押型文から以後の土器文化の移り変わりはどうであろうか。九州における円筒土器文化の系列を、具体的に考える問題を提起したのは、「九州の円筒土器文化」(1977 賀川ほか)である。同論文集での、南九州の前平式土器以降の円筒土器の原流は、押型文土器の平底化にあるという、高木正文氏の考えは、慧眼であった。この問題を解く重要な遺跡が、政所馬渡遺跡である。

政所馬渡遺跡出土土器の大部分は、ヤトコロ式と命名されている早期土器の一群であったが、器形は、尖底深鉢から円筒形への移行をしめす形態にまとめられていた。これまでにも押型文土器の尖底深鉢の器形については、製作技術に若干の考察が加えられていた。粘土の巻きあがり法(巻きじまいがとがる)、尖底の背籠(中國地方山地帶)を材料とした型塗りなどである。このような考えは、実証的には、かならずしも多数の同意が得られたわけではない。しかし、押型文土器の平底化は、確実に、<粘土たが>の輪積み法によるものであることがわかる。尖底土器から円筒土器への土器製作技術の発展は、巻きあげ法から輪積み法への形成法の移行のうえで、理解できる。

政所馬渡遺跡では、その土器群が、巻きあげ法から輪積み法に移行し、しだいに安定のよい平底へと進展する過程が観察できる。これは、土器片断面にみられる形成痕跡から、充分に理解できる。輪積み法の採用は、土器を円筒形にするばかりでなく、これまでの押型文とともに、燃糸文・縄文が施され、しだいにその数を増す傾向にある。

九州において、縄文による文様で構成され、それが顯著にみられた円筒土器に、宮崎県都城市五十市遺跡出土のもの(1977 野間)がある。その後、高木正文氏は、熊本県塚原遺跡における絡条体圧痕文や、同調訪原遺跡での燃糸文など、いわゆる縄文による施文が、貝殻条痕文と併用されて、ひろく縄文前期の円筒土器に使用されていることを報告(1977 高木)している。このような円筒土器は、全九州的ひろがりをみせ、わが国における縄文時代文化にとって、重要な存在となりつつある。政所馬渡遺跡において、押型文土器終末の尖底から平底への過程に、縄文や条痕文を主体とする円筒土器へのめばえがみられるのは、注目すべきことである。さきに、豆粒文・隆線文土器から押型文土器までの系譜が具体的になつたと同じように、押型文土器から円筒土器への過程についても、編年がすすめられるにいたつのである。さらに、この時代の絶対年代判定に、各所において、物理学的測定がおこなわれており、考古学的層位研究とともに、その成果が期待されるものである。

1977 賀川光夫ほか「九州の円筒土器文化」『考古学論叢4』別府大学考古学研究室

1977 高木正文「熊本県の円筒土器」『考古学論叢4』別府大学考古学研究室

1977 野間重孝「宮崎県の円筒土器」『考古学論叢4』別府大学考古学研究室

第6章 九州と中国・四国の縄文早期土器

九州地方の縄文早期土器は、前述のように、1つの系統に立っての編年が可能になってきた。その一方で、隆線文土器の問題については、大陸にその系譜を求めるべきではないかという考えが、急速にふくらみはじめてきている。たとえば、中華人民共和国東北地区のオロス遺跡では、隆線文土器が、細石器とともに発見されている。これらの細石器や早期土器に限らず、大陸との対比は、今後の考古学研究の重要な課題となろう。

さて、隆線文土器は、長崎県福井洞穴（1967 芹沢）や愛媛県上黒岩洞穴（1967 江坂）で発見されていることは、周知のとおりである。日本を代表するこれら2つの遺跡は、放射性炭素（C¹⁴）測定法でも、ほぼ一致した測定値が得られており、土器の起源の1つの問題を提起した。一方、長崎県泉福寺洞穴出土の豆粒文土器（1980 麻生ほか）については、隆線文土器に先行するものとの見解がある。この問題は、層位的研究とともに、C¹⁴測定法による対比など、科学的裏付けをあわせて、やがて解明されるものと期待している。なお、筆者は、1977年渡韓の際、慶州国立博物館館長より、蔚山市西生浦遺跡において、豆粒文土器と類似のものが出土しているという、注目すべき事実を耳にした。福井洞穴や泉福寺洞穴とは対岸にあたるだけに、今後の調査研究が待たれるものである。

隆線文土器と押型文土器との間には、約2,000年の長期にわたる空白があった。それをうめる研究は、上黒岩洞穴や大分県川原田洞穴（1964 岩尾・酒匂）などではじめられた。これらの出土土器は、いずれも約10,000年前というC¹⁴測定値を得ている。また、大分県成仏岩陰（1972 坂田）の調査においても、その年代測定値（1979 坂田）に大差がないことがわかった。

隆線文土器と押型文土器との間の空白は、成仏岩陰や大分県二日市洞穴（1980 橋）など

-
- 1964 岩尾松美・酒匂義明「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」『大分県地方史』34 大分県地方史研究会
1967 江坂輝弥「上黒岩洞穴」「日本の洞穴遺跡」日本考古学協会
1967 芹沢長介「福井洞穴」「日本の洞穴遺跡」日本考古学協会
1972 坂田邦洋「成仏岩陰の調査」「国東町文化財調査報告書」国東町教育委員会
1979 坂田邦洋「C¹⁴年代からみた九州地方縄文時代の編年」『別府大学考古学研究室報告書2』広雅堂書店
1980 麻生 優ほか「特集 泉福寺洞穴」「考古学ジャーナル172」ニューサイエンス社
1980 橋 昌信「大分県二日市洞穴発掘調査報告書」別府大学付属博物館

の層位的調査研究によっても、その姿を層序的にあらわしつつある。一方、福岡県門田遺跡（1979 木下）や沖縄県渡具知東原遺跡（1977 高宮・知念）などで出土した爪形文土器は、福井II層の爪形文土器といくらかの違いが観察され、若干の時間的先後関係があるとみなされている。これらによって、 12400 ± 350 B.P の福井II層爪形文土器から、成仏V₂層 10240 ± 200 B.P をはさみ 8800 ± 200 B.P の川原田VIII層押型文土器の間に、いくつかの無文土器のグループを、時間の流れにしたがって置くことができるようになった。

四国地方では、上黒岩出土の隆線文土器に、 12165 ± 600 B.P 愛媛県穴神洞穴（1979 長井）I式一微隆起線土器がつづき、さらに、上黒岩II式とされる無文土器と愛媛県土壇原遺跡（1979 長井）の条痕文土器が、九州の二日市洞穴の無文土器と対比される。なお、四国地方の編年については、長井数秋氏の論文（1979 長井）にくわしい。

中国地方では、広島県帝釈峠遺跡群（1976 松崎ほか）の馬渡岩陰第4層から、口径21cm、高さ16cmの平底鉢形土器が出土している。これは、この時期にみられる有舌尖頭器形石器の出土とともに、広義の爪形文土器から押型文土器の間の1つをうめることになる。また、帝釈峠觀音堂洞穴の第20、21層出土の無文土器も、基本的には馬渡岩陰第4層と変わりなく、平底無文鉢形土器である。このように、帝釈峠遺跡群では、無文土器の一群が、層位的にみて押型文土器の下方から出土している。しかも、これらが細石鐵（1970 貝川）を作出する点で、その状況は、ほかの遺跡と符合している。

中国・四国地方の無文土器を、九州での精査された数層の爪形文・無文土器群と対比するには、まだ若干資料不足であるが、それぞれ精査された層位的検討によるものであるだけに、その先後関係を明確にすることができるのも間近いものと考えている。いずれにしても、西日本全域において、爪形文・無文土器の編年が確立されつつあることは興味深い。

押型文土器の編年については、近年、新しい問題が各地でおこっているが、基本的には変化をみないことが明らかとなっている。九州でも、押型文土器は、ほぼその全域に分布しているが、たとえば、福岡県深原遺跡（1978 木下・橋）や熊本県中後邊遺跡（1978 桑原ほか）などで出土した押型文土器を検討してみると、そのおおかたが、編年的に、早水台・田村・ヤトコロの3形式のいずれかに含めることができる。なお、円筒土器がヤトコロ式の平底押型文土器につながるかも知れないという問題から、この時期を論考した高木正文氏

1970 貝川光夫「纏文式文化の起源と押捺文土器の発達」『史学論叢5』別府大学史学研究会

1976 松崎寿和ほか「帝釈峠遺跡群」亜紀書房

1977 高宮広衛・知念 勇「渡具知東原一・次発掘報告」読谷村教育委員会

1978 木下 修・橋 昌信「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告8」福岡県教育委員会

1978 桑原憲彰ほか「中後邊遺跡調査報告書」九州電力株式会社・中後邊遺跡調査団

1979 木下 修「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告11」福岡県教育委員会

1979 長井数秋「城川の遺跡」愛媛県東宇和郡城川町教育委員会

の報告（1977 高木）は、押型文土器以降の問題を示唆することになった。

四国地方の押型文土器についてみると、上黒岩洞穴の層位的調査により出土した同III式土器が、黄島貝塚出土の押型文土器に類似するところから、早水台遺跡と同時のものと考えられている。また、穴神洞穴では、そのIII層に高山寺式、IV層に黄島式の土器が出土し、ここでも、層位的に、押型文土器の出土が観察されている。

中国地方では、岡山県黄島貝塚をはじめ、押型文土器についての報告が多い。そうした中で、帝釈峠遺跡群の調査は、層位的観察をもとにしているので、ほかの地域の遺跡と対比する上で、重要なものである。帝釈峠觀音堂洞穴の調査によれば、その出土土器について、第19層上部のものに高山寺式、下部のものに黄島式をあてており、これは、九州における田村式や早水台式と符合するものである。

押型文土器は、当初の整然とした小形の文様から、しだいに文様が粗大となる傾向をしめす。また、器壁の横走押捺は、縦走へと移行する。そうした文様の変化とともに、尖底鉢形の単純な器形が、口縁部は外反し、底部は乳房状となり、さらには、平底の深鉢形に移っていく。器壁の粗厚化も、同じように、文様と器形の変化にともなうことが、すでに判明している。

九州における隆線文土器から押型文土器までの編年については、第5章で、その概略を述べた。そして、ここで、九州に隣接する中国と四国の編年の概要を併記してみると、隆線文土器から押型文土器までの相互関係がよく理解できる。しかし、土器形式の相互関係はかつて江坂輝弥氏がいったように、土器そのものの特徴を精細に検討しない限り問題は進展しない。さらに芹沢長介氏は層位的検討についての相互関係を重視し、その組合せを石器を含めて重視する必要があるとしている。たしかに土器に関する問題はそうたやすく比較検討することはできないものと考えている。したがって九州と隣接の地域での協同調査・研究が望まれるところである。

西日本における縄文早期土器の編年

<九州>	<中国>	<四国>
ヤトコロ 押型文平底		
田村 押型文乳房状尖底	広島県松ヶ迫B地点 帝釈峠観音堂 19層上	穴神III層
早水台 押型文尖底 8200±150 ^y B.P.	黄島 8400±350 ^y B.P. 帝釈峠観音堂 19層下	穴神IV層 上黒岩III式
川原田VII層 押型文尖底 8800±200 ^y B.P.		
二日市 4, 5 文化層 無文尖底		不動ヶ岩屋 (高知)
二日市 6 文化層		土壤原
二日市 7 文化層 無文丸底 成仏V ₂ 層 10240±200 ^y B.P.		穴神VI層 上黒岩II式 (VI層) 10085±320 ^y B.P.
二日市 8, 9 文化層 条痕文丸～平底 帝釈峠馬渡 4層		
福岡県門田 爪形文		
福井II層 爪形文 12400±350 ^y B.P.		穴神VII層
福井III層 隆線文 12700±950 ^y B.P.		上黒岩I式 (IX層) 12165±600 ^y B.P.
泉福寺 豆粒文	?	



* 泉福寺洞穴(第10層下層) [長崎県]
(陸續文系土器群を含む) ×



門田遺跡 [福岡県] ×



二日市洞穴
(第8文化層) [大分県] ×



二日市洞穴 (第7文化層) ×



二日市洞穴 (第6文化層) ×



二日市洞穴 (第4文化層下層) ×



* 半水台遺跡 [大分県] ×



* 川原田洞穴 [大分県] ×



* 上黒岩岩陰 (第9層)
(愛媛県) ×



馬渡岩陰 (第4層) [広島県] ×



叶瀬遺跡 [愛媛県] ×



* 韋成仏岩陰 (第5層) [大分県] ×



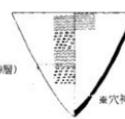
二日市洞穴 (第6文化層) ×



二日市洞穴 (第4文化層下層) ×



観音堂洞穴 (第19層)
(広島県) ×



* 穴神洞穴 [愛媛県] ×



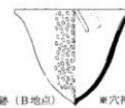
* 田遺跡 [大分県] ×



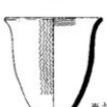
中後遺跡 [熊本県] ×



* 松ヶ瀬遺跡 (B地点)
(広島県) ×



* 穴神洞穴 [愛媛県] ×



* セトコロ遺跡 [大分県] ×



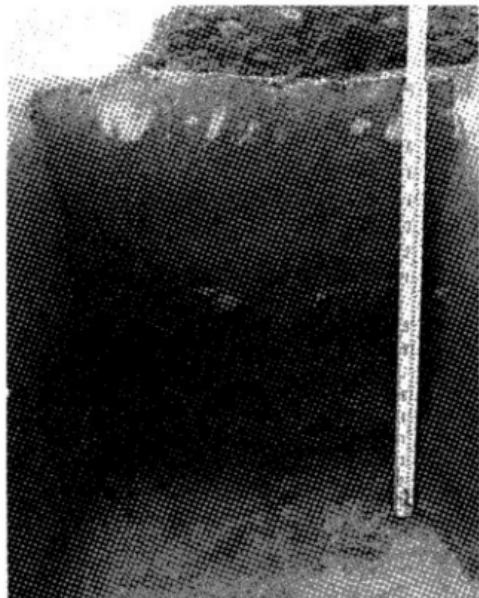
中後遺跡 ×



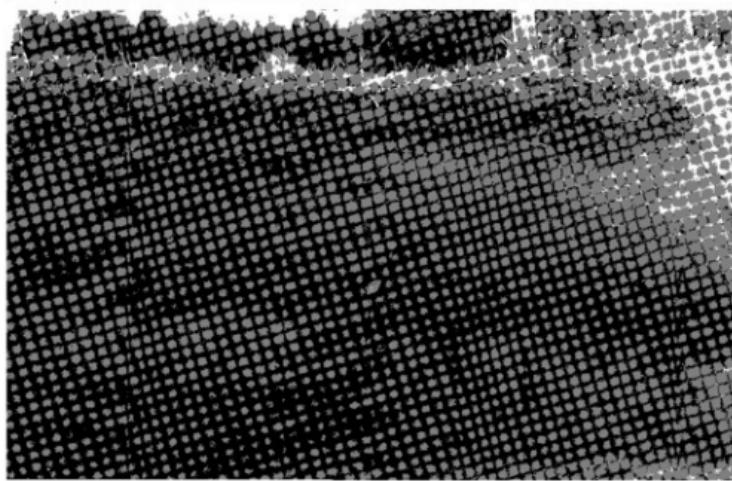
図版 1 政所馬渡遺跡遠景（調査前、北より）



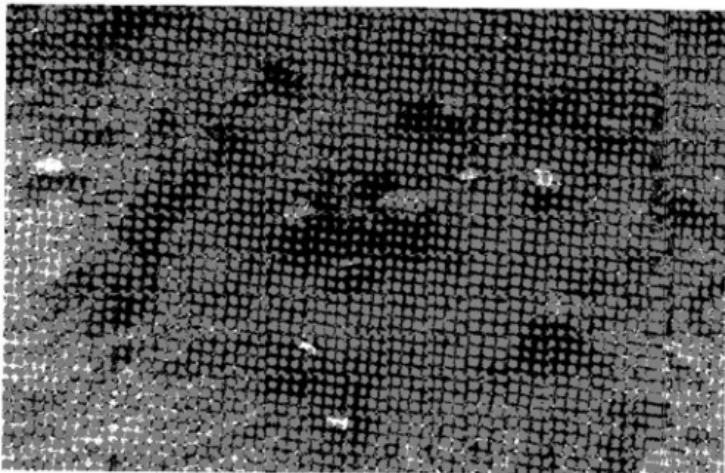
図版 2 政所馬渡遺跡近景（地さげ工事途中、南より）



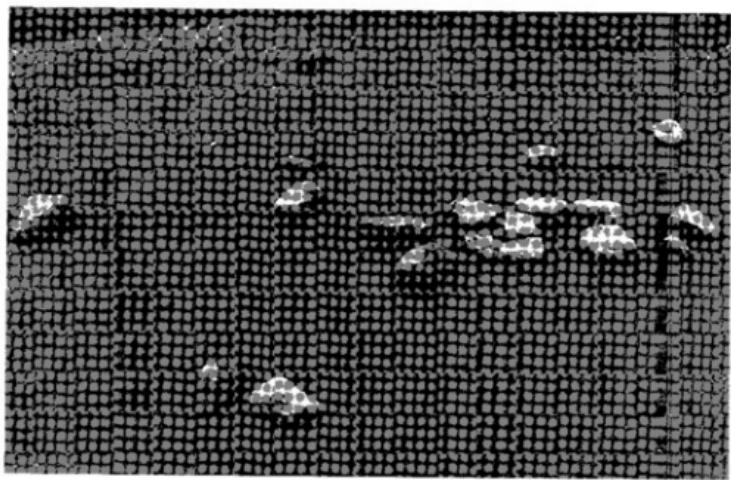
圖版 3 G - 6 区 北側土
層斷面



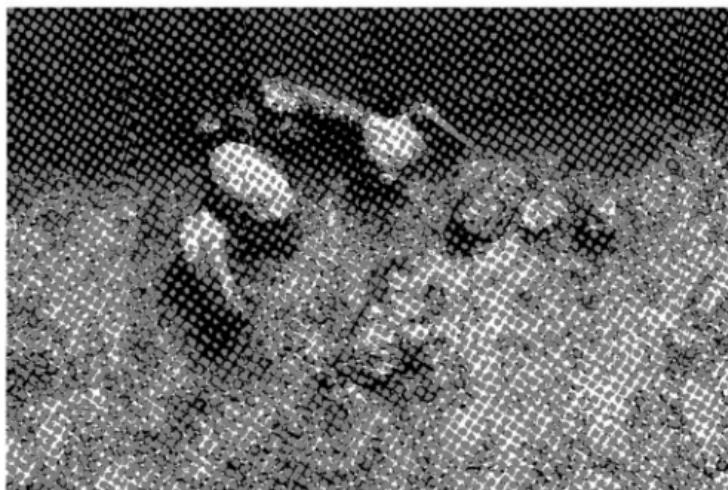
圖版 4 J - 1 区 西側土層斷面



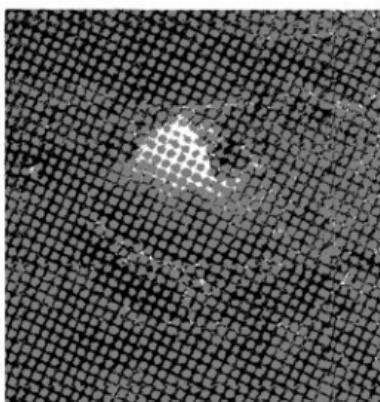
図版5 E-4・E-5区 第1集石遺構



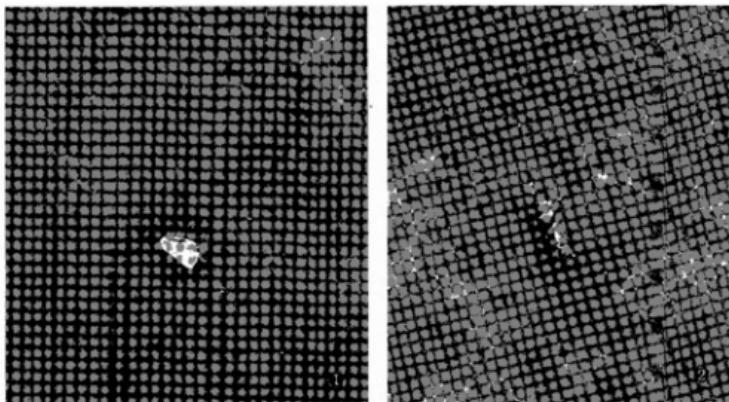
図版6 G-4区 第2集石遺構



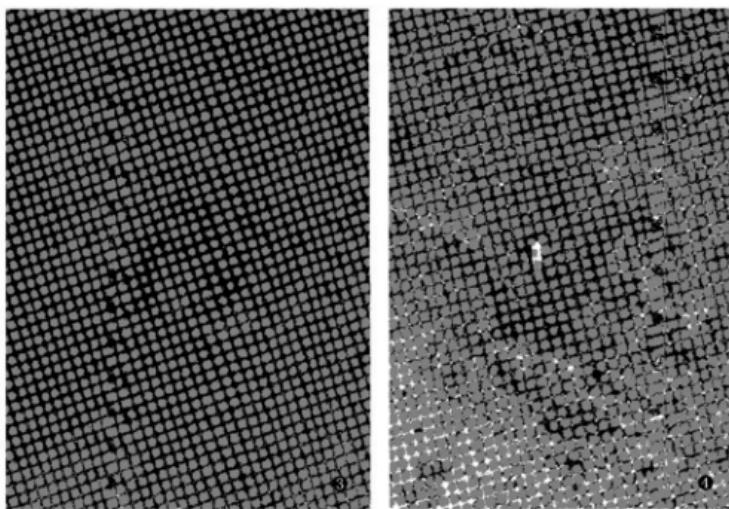
图版7 G-5区 第3集石遺構



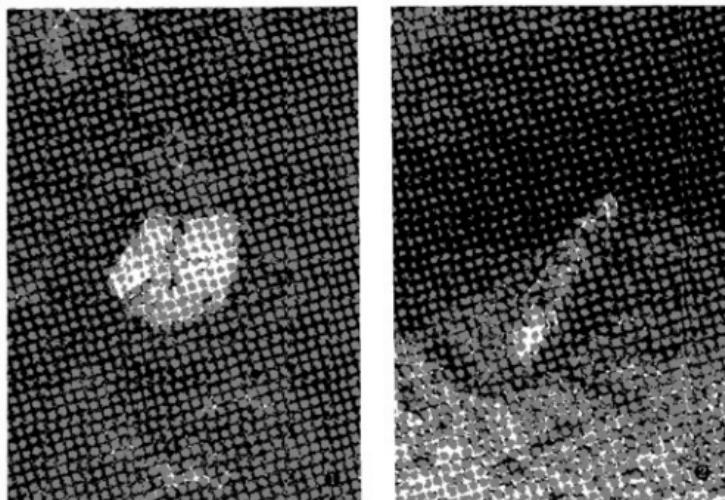
图版8 G-5区 土器出土状况



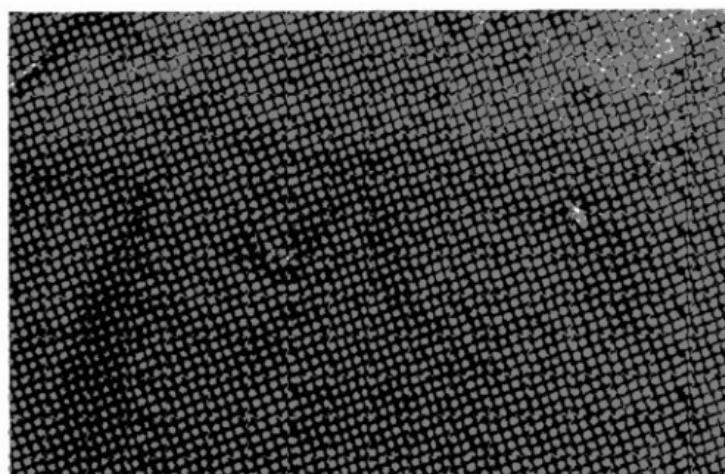
図版 9 G - 6 区 細石核①および細石核素材②出土状況



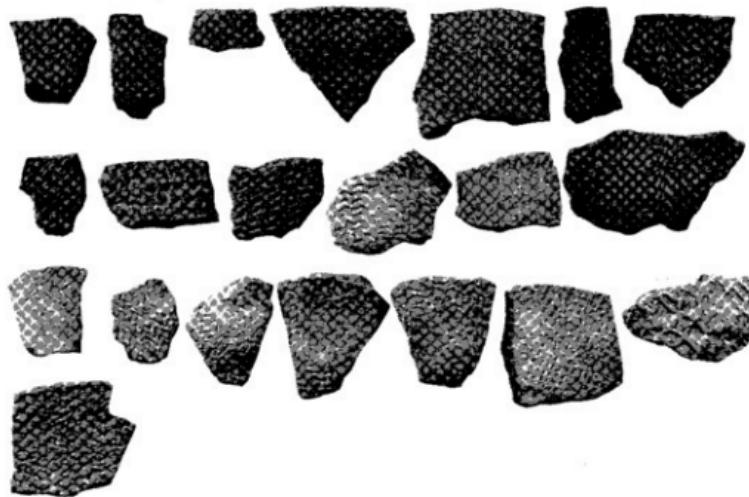
図版 10 G - 6 区 細石核 共伴土器③および細石刃④出土状況



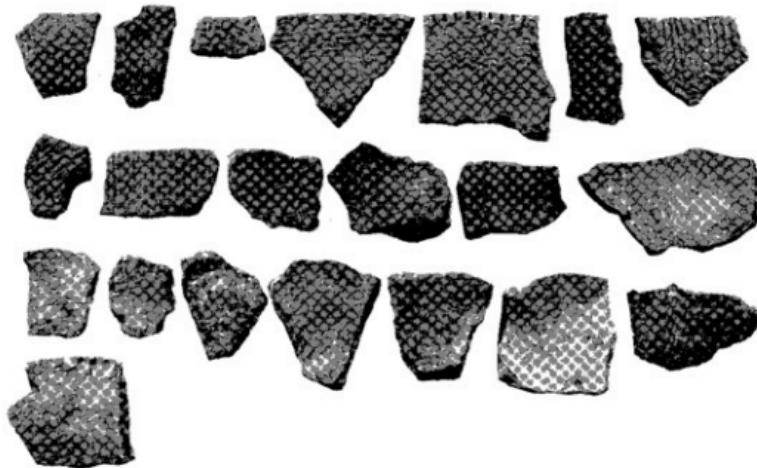
図版11 G - 5 区 碾器①およびG - 6 区尖頭形石器②出土状況



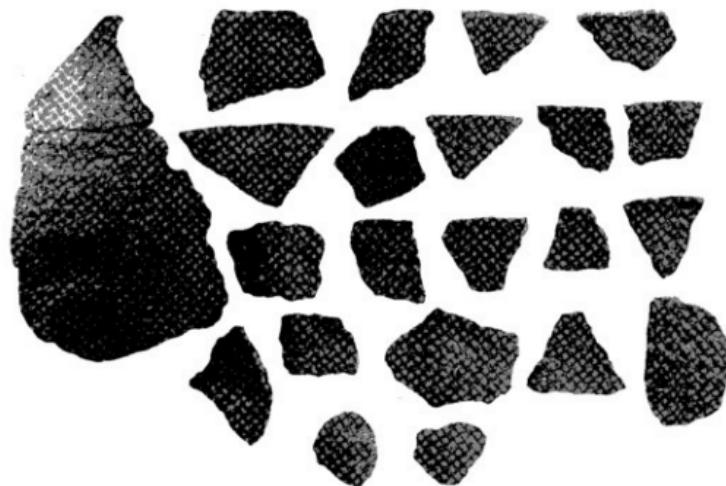
図版12 G - 6 区 細石核および細石刃出土状況



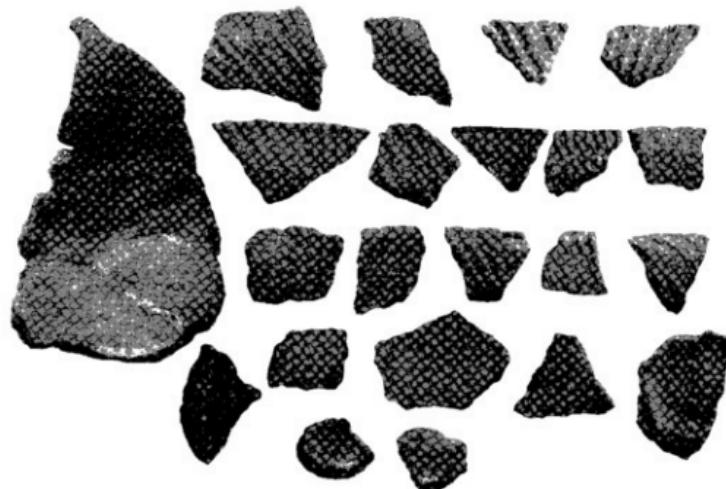
図版 13 第 I 群 a 類土器 (表)



図版 14 第 I 群 a 類土器 (裏)



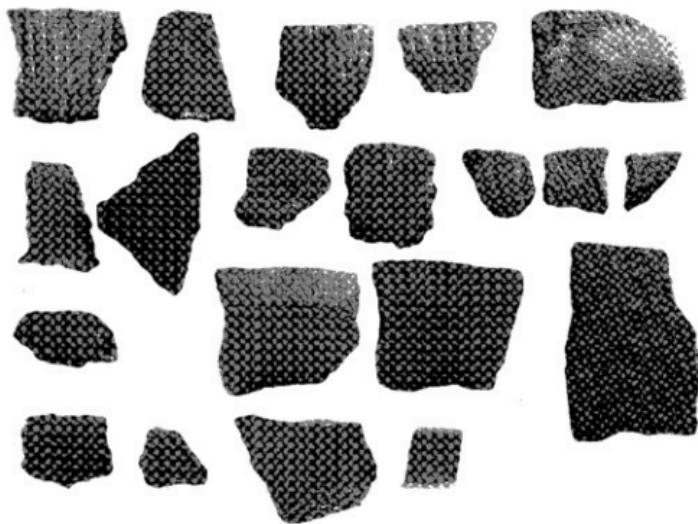
図版 15 第 I 群 b 類土器 (表)



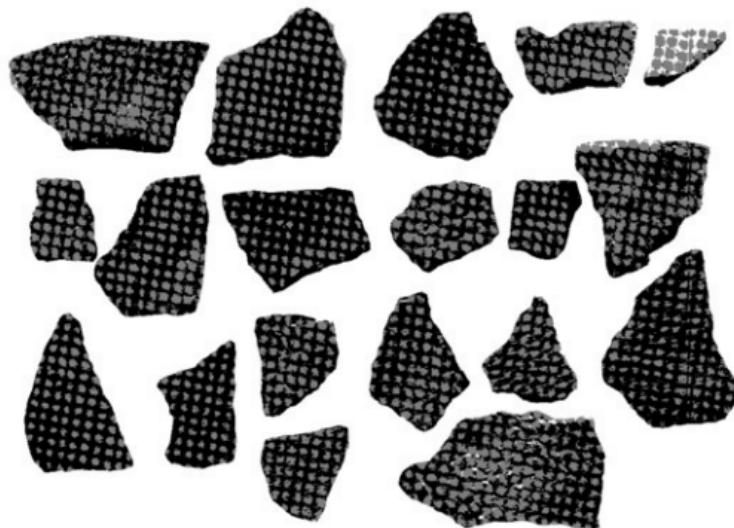
図版 16 第 I 群 b 類土器 (裏)



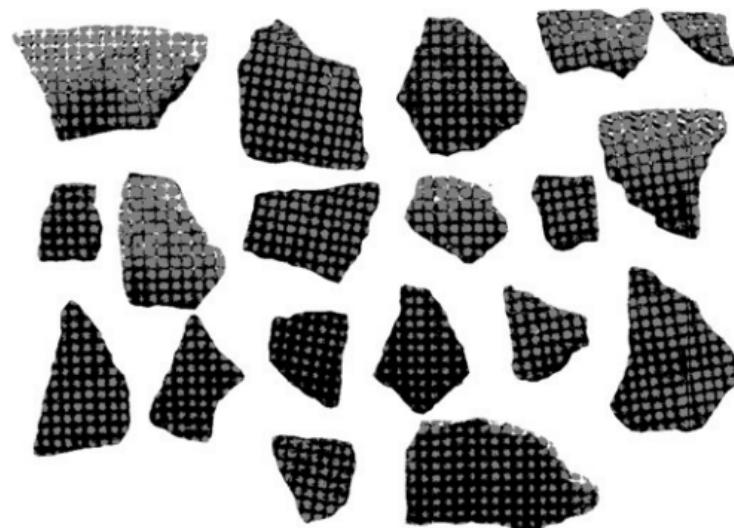
圖版 17 第 I 群 c 類土器 1 (表)



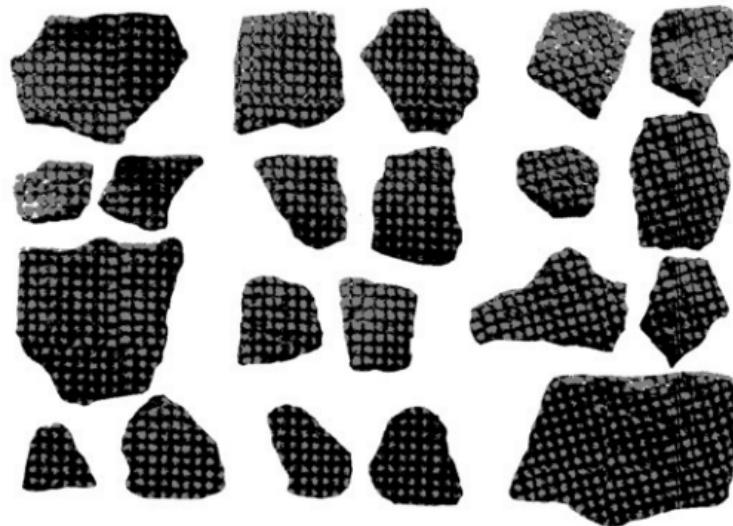
圖版 18 第 I 群 c 類土器 1 (面)



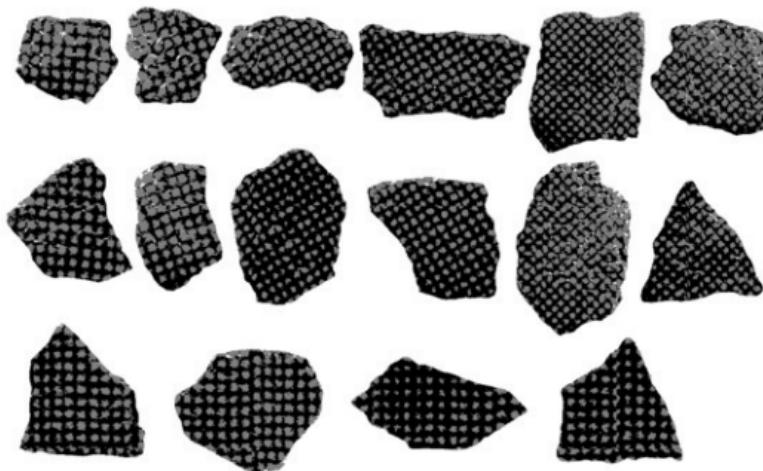
図版 19 第 I 群 c 類土器 2 (表)



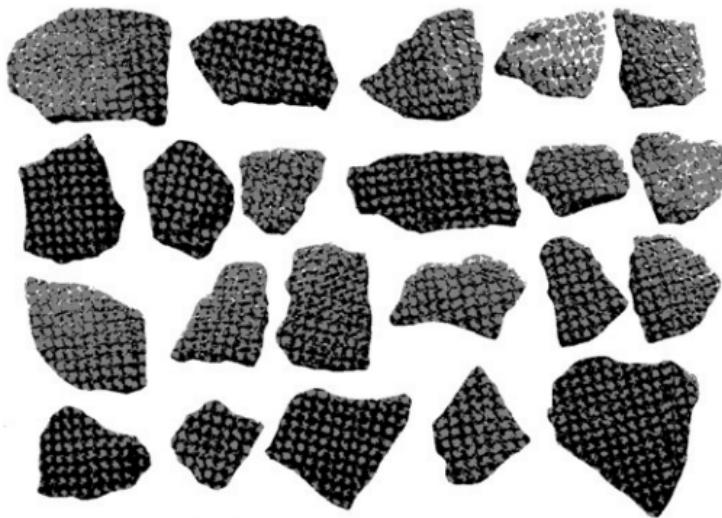
図版 20 第 I 群 c 類土器 2 (裏)



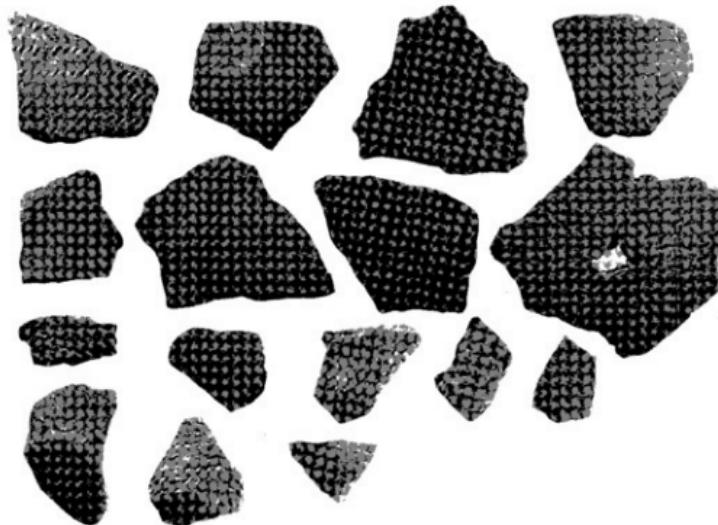
図版 21 第 I 群 c 類土器 3 (表)



図版 22 第 I 群 c 類土器 3 (表)



図版 23 第 I 群 c 類土器 4 (表)



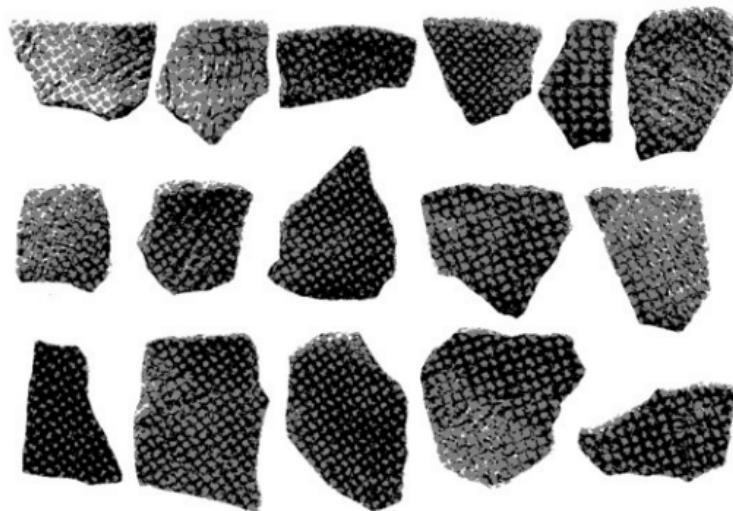
図版 24 第 I 群 c 類土器 4 (表)



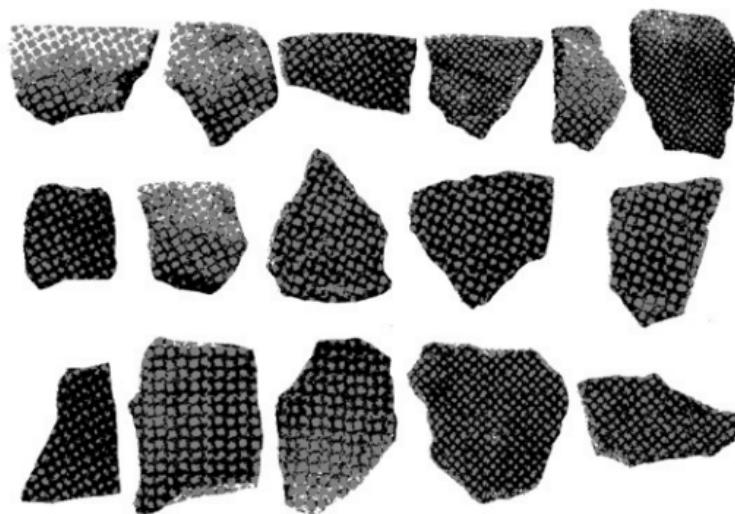
図版 25 第II群 a 類および b 類土器 1 (表)



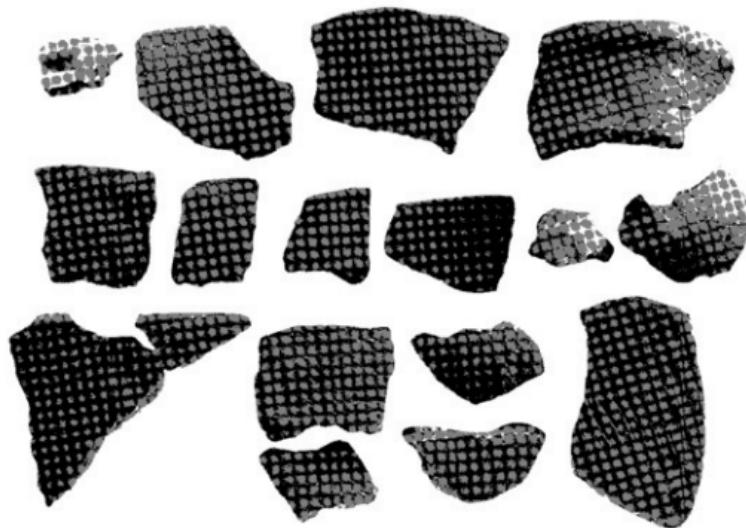
図版 26 第II群 a 類および b 類土器 2 (表)



図版 27 第II群 a類およびb類土器 3(表)



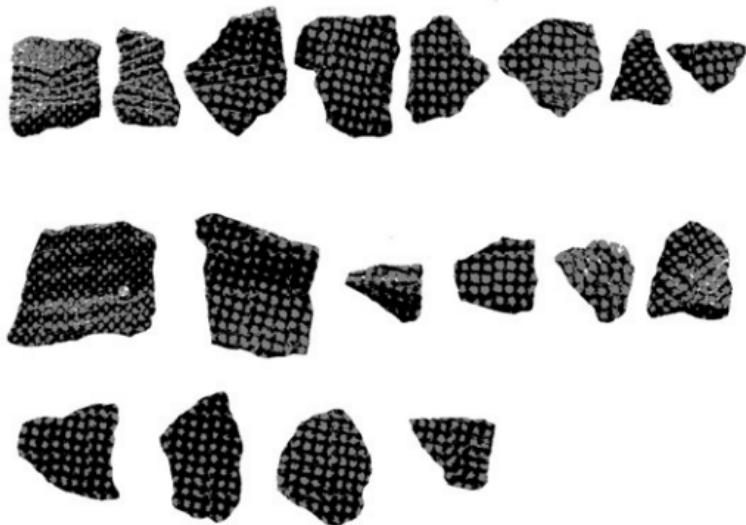
図版 28 第II群 a類およびb類土器 3(表)



図版 29 第III群a類(上2段)および第IV群a類土器(表)



図版 30 細石核共伴の土器(表, ×2)



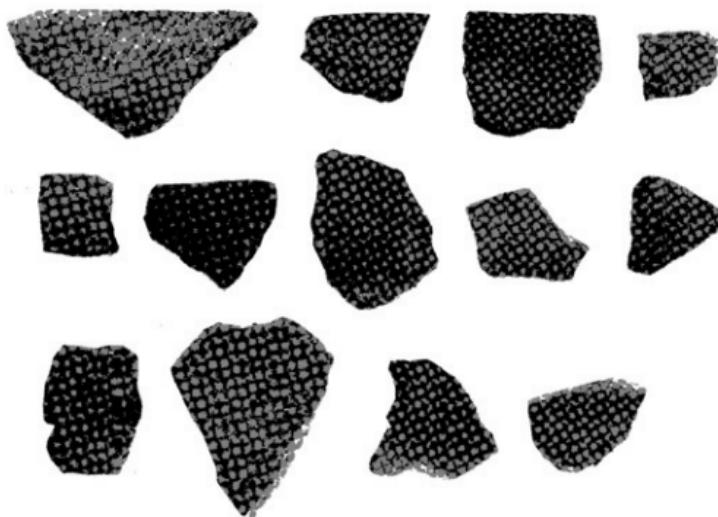
図版 31 第 IV 群 b 類および c 類土器 (表)



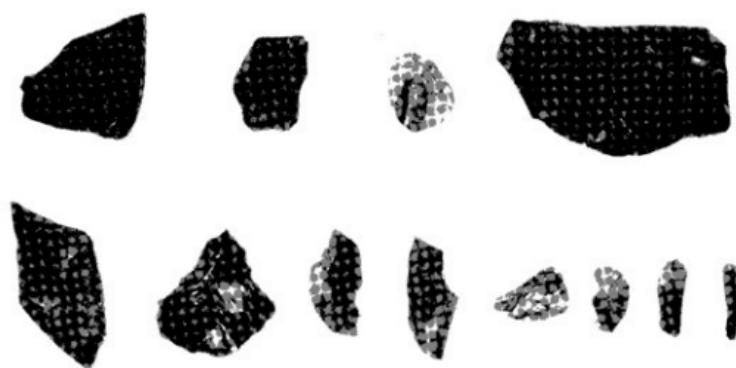
図版 32 第 IV 群 b 類および c 類土器 (裏)



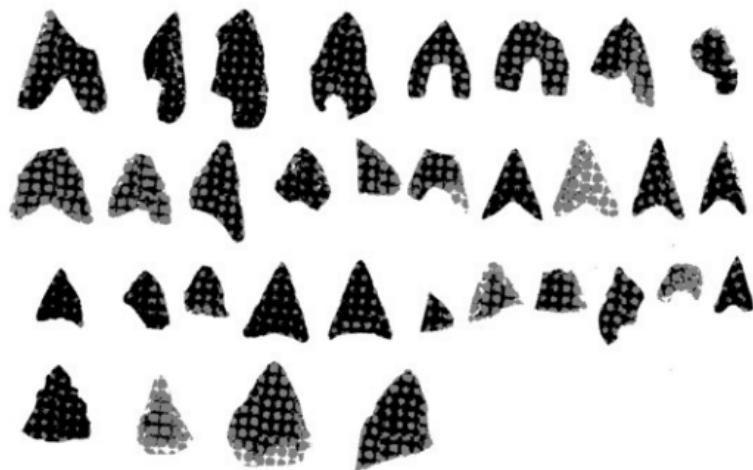
图版 33 第 IV 群 d 陶土器 (表)



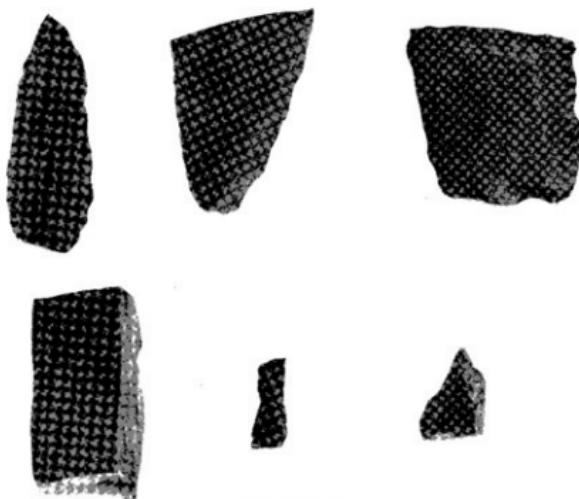
图版 34 第 IV 群 d 陶土器 (表)



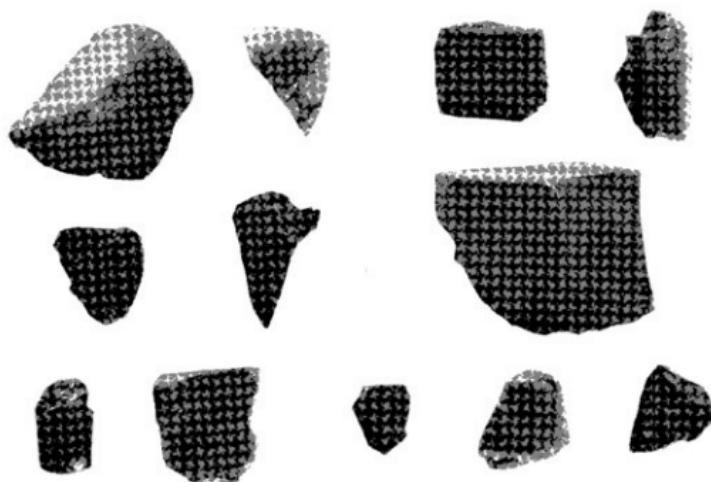
図版 35 細石核・細石核素材・撃器・剥片・石核再生剥片および細石刃



図版 36 石鏃および尖頭形石器



図版 37 尖頭形石器・石片・石核および彫刻刀様石器



図版 38 削器および2次加工片

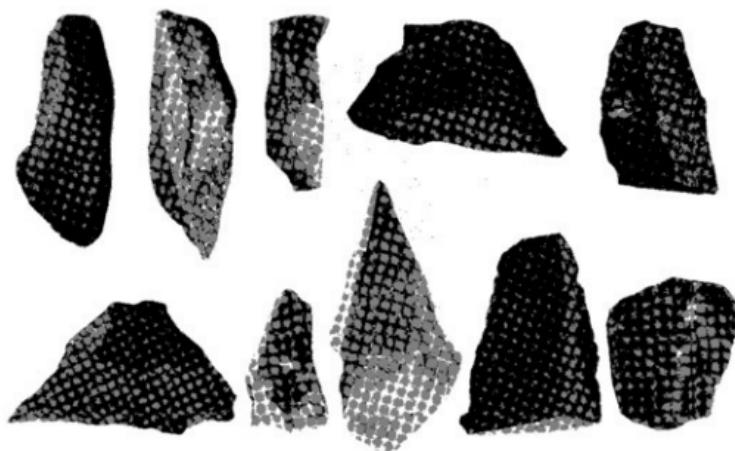
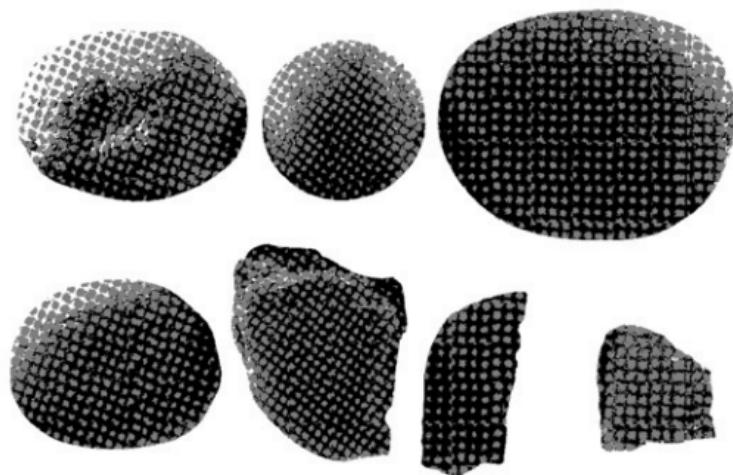
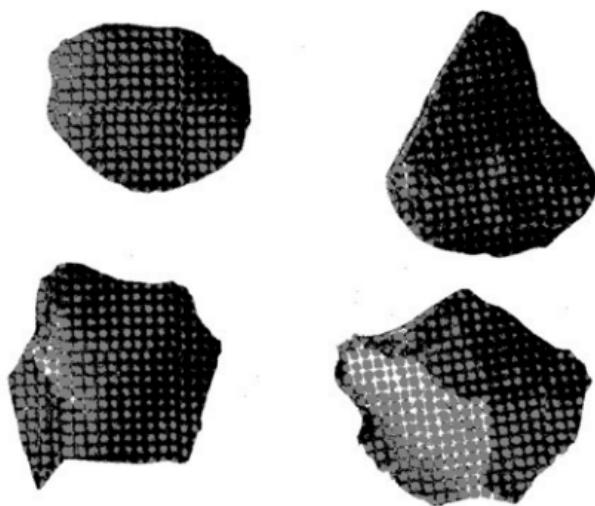


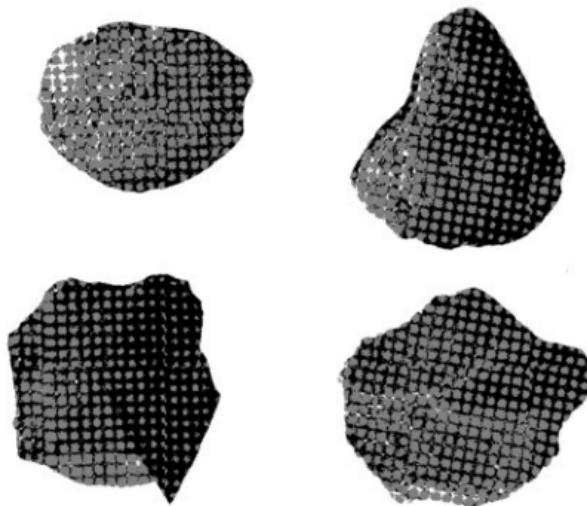
図39 使用痕剥片および2次加工剥片



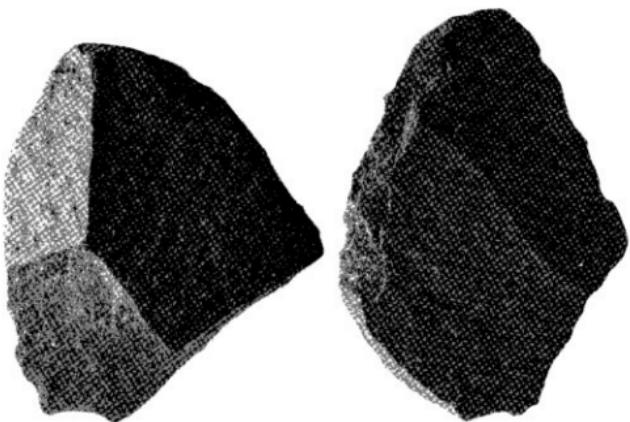
図版40 敷石および磨石



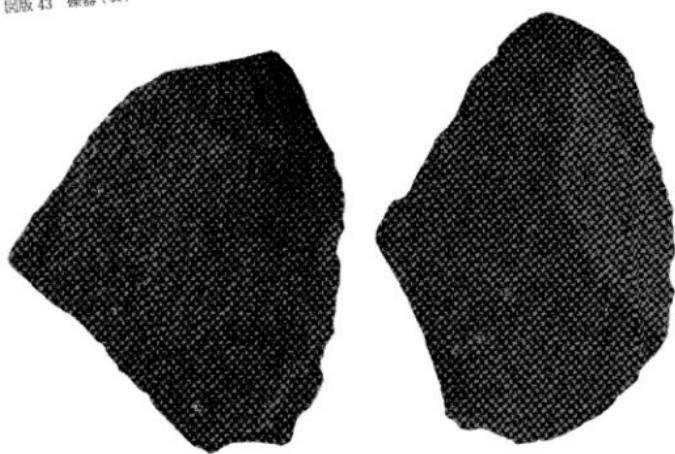
図版 41 使用痕剥片および器（表）



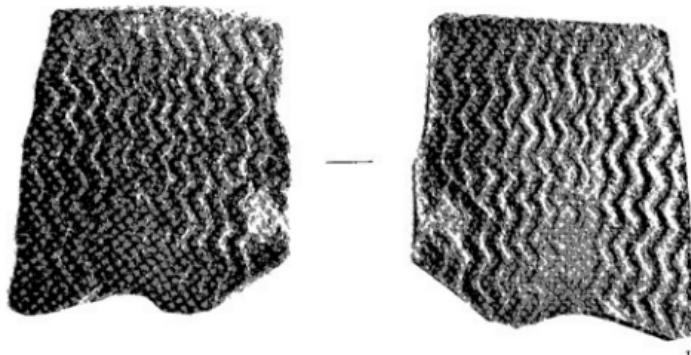
図版 42 使用痕剥片および器（裏）



圖版 43 碓器（表）



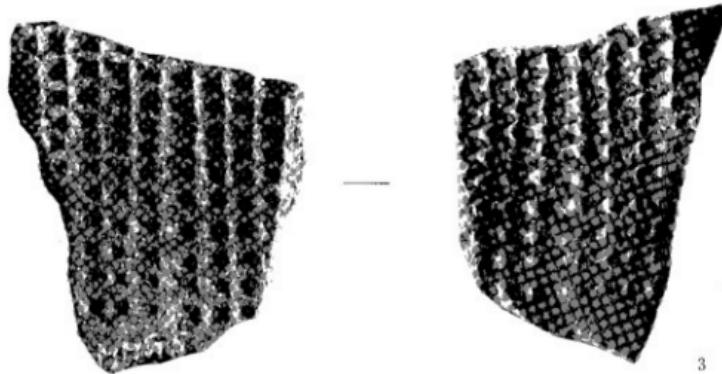
圖版 44 碾器（裏）



1

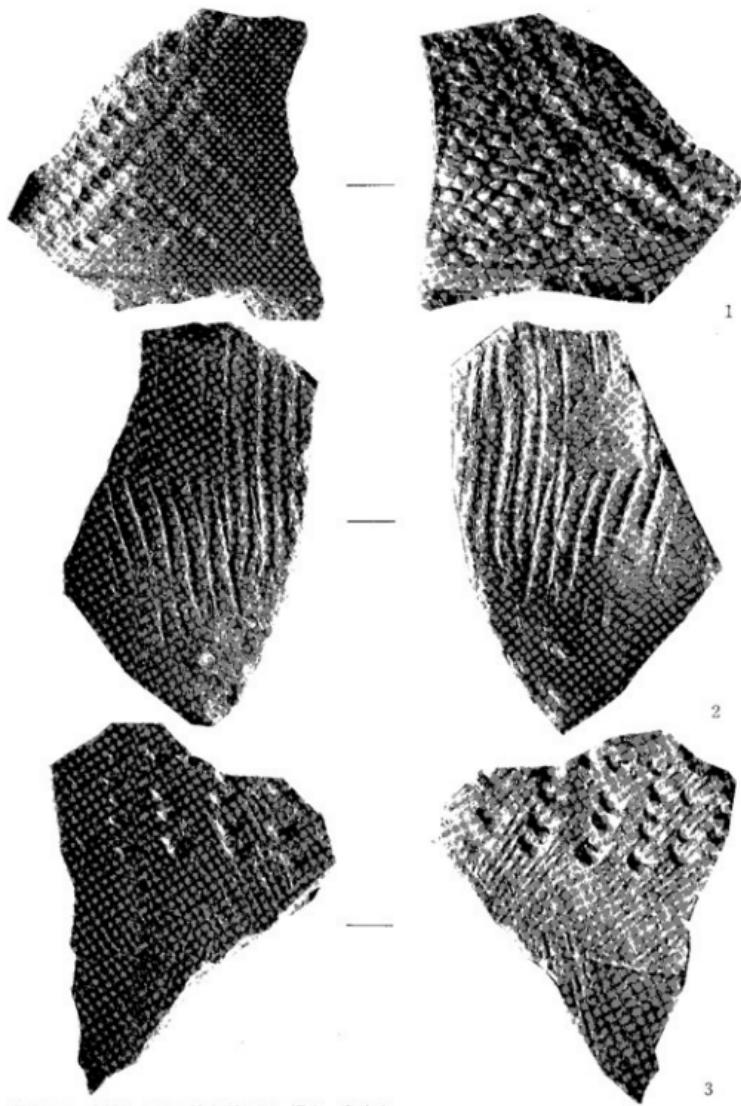


2



3

図版 45 土器片とその粘土型(右)-押型文-



図版 48 土器片とその粘土型(右)-縄文・条旗文-

政 所 馬 渡

1982年2月15日発行

編集 賀川光夫

発行 別府大学付属博物館

〒874-01 別府市北石垣82

TEL 0977-67-0101

印刷 佐伯印刷株式会社

大分市古国府11組

